COBALT-SERIES

迷える羊に愛の手を

若木未生

ハイスクール・オーラバスター



集英社

諒が屋根をぶちぬいたり〔第1話〕、冴子と絶妙(?)のコンビで事件を解決したり〔第2話〕、〈妖の者〉に狙われてる女の子をガードしているうちに希沙良と十九郎の優雅(笑)な生活が判明したり〔第3話〕、中学時代の亜衣が登場したり〔第4話〕。人気爆発のハイスクール・オーラバスター第4弾は、初のオムニバス形式。豪華オールスター・キャストで送る、愛と笑いとアクションの大騒動!

恋を夢みる乙女のための小説誌!

[コバルト] Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

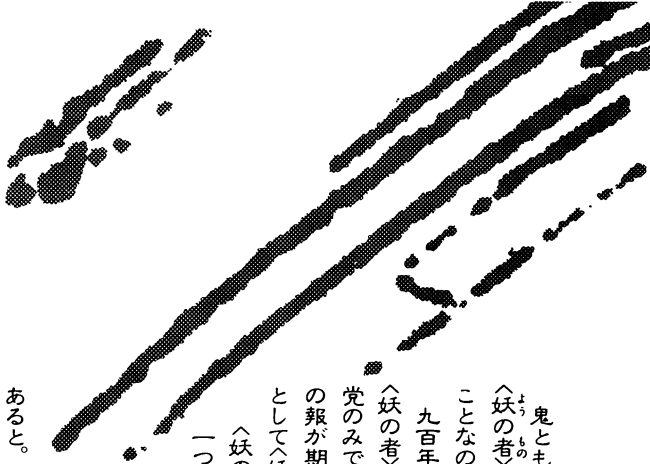
迷える羊に愛の手を

若木未生

集英社

目　次

天使墜落……9
迷える羊に愛の手を……43
アニバーサリー……123
黄金時間が見えるまで……219
あとがき……250



鬼とも妖怪とも呼ばれ伝説に語られてきた人外の存在――〈妖の者〉が目立って活動するようになったのは、ここ十数年のことなのだという。

九百年の昔に彼らの天敵たる〈空の者〉との大戦に敗れて以来、〈妖の者〉の多くはなりをひそめ、世に出るのはごくわずかな残党のみであった。しかし現代に至り、妖者総帥「九那妃」復活の報が期待と確信をもって彼らのうちに流布され、それを刺激として〈妖の者〉は勢力を回復しつつあるのだ。

〈妖の者〉の形態は千差万別だが、共通する点が二つある。

一つは、本体が精神体であるということ。いま一つは、人を喰らうということ。彼らの多くは人間の身体にとり憑き、人の社会にまぎれてひっそりと生息する。

そして古より隠密裏に伝承された真理。人を喰らうのが〈妖〉であるならば、〈妖〉を喰らうのは〈空〉であると。

選ばれた血統の、選ばれた赤子の内にかぎり転生を為す〈空



の者〉。それは神の降臨とさえ呼ばれる奇跡である。

またその血統を保ちつづけた一族を、斎伽の一族と呼ぶ。その血には妖者の「妖力」に対抗する超常能力「術力」の因子が内在し、一族の者は空者とはならずとも何らかの能力を保持した者、すなわち「術者」として空者に仕えていたと伝えられる。

しかし〈妖の者〉との大戦の後、一族の血は分かれ、純粋な血統はほぼ絶えたと言って良い。数百年にわたり〈空の者〉の降臨はなされず、術者の数は激減した。

そのような現代に、ただ一人転生した〈空の者〉がいる。空者総帥「伽羅王」、またの名を斎伽忍。弱冠十九歳にして一族の長を務める若者である。

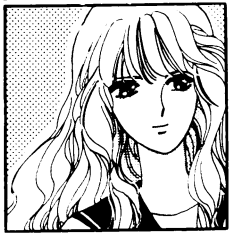
〈妖の者〉の動きが活発になる一方、〈空の者〉に比べれば甚だ微弱な術力しか有さぬ術者数人が手中にあるのみという現状に、彼が何を思うか——うかがい知ることは、いかなる者にも許されなかった……

登場人物紹介



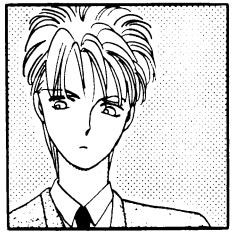
水沢 涼

戦闘的な〈術力〉と能天気な性格がウリの〈術者〉。忍の指令により、各地の高校を転々としている。



七瀬冴子

強気が専売特許の美少女で、回復系の能力を持つ〈術者〉。なぜか涼の行く先々に現われ、事件解決を助ける。



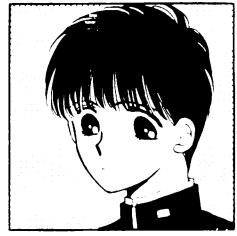
和泉希沙良

〈術者〉のひとりで涼に匹敵する攻撃力を持つ。奔放な性格だが、十九郎以外にはなかなか心を許さない。



里見十九郎

沈着冷静な参謀型の〈術者〉。希沙良のいとこでフォロー役。公私にわたる多忙ぶりは尋常ではない。



崎谷亮介

諒の親友。最近底知れぬ〈術力〉にめざめたばかり。カワイイ感じと言われるが、本人は結構気にしている。



神原亜衣

亮介の同級生でGF。〈術者〉ではないが事情に通じ、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。

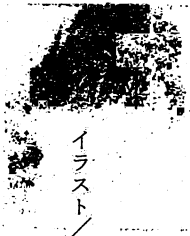


斎伽　忍

〈術者〉一族の若き総師で、ただひとりの〈空の者〉。一連の事件の全貌を把握しているのは彼だけらしい…。







イラスト／杜　真琴

天使墜落

べきいっ。

——と、いきなりとんでもない所から板のへし折れる音なんかが降ってきたのは、草木も眠る午前一時三十五分。

草木は眠ってても、感心な受験生の妙子さん（あたしだ、あたし）は当然しっかり机に向かって因数分解と格闘していたりした。それでもってノートに美しく並んだ数式にうっとりと見とれていたりなんかした——わけではないけど、でももっ、一生懸命ノート半分使ってきれいに並べた答えに思いっきりずざあっとシャーペンをすべらせてしまったらやっぱりショックは大きかった。ち、ちくしょー妙子さんのノートはきれいなことで定評があるというのに……。

はっ。そーじゃないんだってば。

手元を狂わせてしまった原因は——思いちがいでなければ、屋根の上。

べきべきめし、と第二波が来た。あたしはがばっと天井を振りあおいだ。

この部屋は受験生の妙子さんのために特別に建ててもらったプレハブの勉強小屋で、要するに造りはヤワである。ヤワだけど。

いくらヤワだとはいえ。

「な、なんで……」

あたしは口をかばっと開けて絶句してしまった。

なんでいきなり屋根からにょきっと足が生えなきゃなんないんだ!?
「……し、しまった……」
そろそろと足をもちあげながら屋根の上のそいつがぼそぼそと呟いた。
「これは不覚。ワタシとしたことが。とほほほ」
お、男?
真夜中にいきなり人の家の屋根踏みぬく男って何者……。
「あのお」
妙に間のびした声が、ぽっかりあいた穴から届いた。
「これはちょっと早めのサンタさんだということで納得していただけないでしょーか……」
「だっ、誰がっ!」
思わず言いかえしてしまってから、あたしははたと我にかえった。
「そうか、駄目か……いい考えだと思ったのに……」
そういう問題じゃないだろうっ!
「な、なんなのよあんたっ。警察呼ぶわよっ」
「いえいえそんな怪しい者では」
「どこが怪しくないって言うのよーっ!!」
時刻といい状況といい何もかもが怪しすぎると思わないか、え? 思わないか普通!? こっ

ちはうら若き十五の乙女ひとりで、そっちは若い男ときたら、こりゃ誰だって平和的にお見合いしてるだなんて思わないぞ、思うわけがないぞっ。

「あらぬ疑いをかけられるのは悲しい。しくしく」

……泣いてる場合じゃないと思う。

と、屋根の上でごそごそと動く気配があった。ちょっとどきっとしてあたしが息をつめて見上げていると、ひょいと板の破れ目からのぞいたのは意外なことにあたしと同い年くらいの男の子で——。

人好きのする日焼けした顔。

「あの。ごめんなさい。ほんとに」

あっ、かわいい。

(あ!?)

自分自身に愕然としてあたしは頭痛すら覚えてしまった。かわいいなんて思ってる場合でもないんだよっ、妙子っ。

「ちょっとわけあって事情は言えないんですが、勘弁していただけませんですか」

「……そんなこと言っても」

はいわかりましたそうですかではさよなら、と言って見逃せるシチュエーションだろうか、これは。それにしてはあんまり普通じゃない事態ではなかろうか。

それでもってまた、屋根の上で頭さげてるバカというのが……なんか、なんというか、この状況にあまりにそぐわないというか、怪しくなさすぎて調子が狂う。なんなんだこの軽薄男は。

なんかこれってよく考えるとSF的状況かも……。

などと思ってるあたり、あたしってばすごい余裕あるじゃん。おー？

「やっぱり駄目ですか」

しょんぼりと肩を落としてそのバカが言う。

「仕方がない、本当のことを申しましょう。実は私は月の世界からやってきたカグヤ一族の生き残りで、名前をウサギ・モチツキというのです」

つくならもう少しマシな嘘をついたらどーなんだこいつは……。

「あ、信じてない。そうか、それじゃ本当のこと言うけど、僕ってば愛刀〈朱雀〉を振るって夜な夜な人知れず〈妖の者〉を退治している闇の始末人なんです」

「あ、そう……」

なんだかもう馬鹿馬鹿しくなってきてあたしはため息をついた。とりあえず、のぞきでも泥棒でもなさそうだし。

「というわけで正体も明かしたことですし、ここはひとつお月様に免じて見逃してやって下さいませんか」

大真面目に訊いてくるあたり律義な奴である。わかったわかった、と口に出しかけて、あた

しはふと目をこらした。あれ？　こいつ。
「ち、ちょっとあんた、怪我してるんじゃないの？」
左手の、ひじの所。トレーナーが裂けて。濡れたみたいに染まって。血？　え、もしかしてこれって大怪我!?
ついと腕をもちあげて、バカは自分の傷をのぞきこむ。妙に落ちつきはらった動作。
「そうか、忘れてた」
「忘れてたって、あんたねえっ」
「――その怒鳴り方、誰かさんにそっくり……」
意味不明のことを呟いて、そいつははじめてちょっとだけ笑った。
「救急車呼んだほうがよくない!?」
「いえっ、そういうの困るんです。ほら、僕ってば異星人だから」
あっ、そういえば大騒ぎするとあたしも困るんだった……。
いやその、なんで困るのかというと。だから。えーと。つまりだね。
……し、仕方ないなあっ。
「えと、それじゃ、救急車は呼ばないけど、その、救急箱ならあるから……」
う。なんか一生懸命に言いすぎてしまったかな。
バカはなんとなくきょとんとした感じでこっちを見おろしてる。

あたしはちょっとムキになって、上目づかいにそいつを睨みつけた。
「屋根！　直してもらわないと、困るんだけどっ」
「大工さんですか、僕は」
「せ、責任、とってよねっ」
「……ふむ」
また少しだけ笑う。どこか意味深に、小さく息をついて。
「そういうことでしたら」
え？　と思う間もなく腕の中にぼいぼいとスニーカーが連続して落ちてきた。き、汚い靴っ、とひきつったら次の瞬間。
「ごめんなすって」
すとん、とあたしの目の前にやたら背の高い影が着地して、それからひょいと片手あげていたずらっぽく敬礼した。
「どうもっ。ウサちゃんでーす」
誰が信じるかっ。
靴をつきかえそうとして、その古ぼけたスニーカーも泥まみれ血まみれになってることにあたしは気づいた。ぶ、物騒な奴……。あれかなあ、不良同士のシマ争いとか暴走族の抗争とか、そういう次元の話かな。やだなあ。

「お嬢さん、失礼ですがお名前は」

ぐるりと八畳の小屋の中を見まわしながら、明るい声でバカが訊く。部屋の隅に小さな流しを見つけて、そっちに歩みよる。

「……妙子」

「さ、サエコさん?」

「タ、エ、コ！　たちつてとのタ！」

「あ、そか。べっくらした……」

本当にびびった感じで、ほっと息つきながらバカは水道の蛇口をひねった。よくわからない。

あたしは腕の中の靴をどう処分したものかとしばし考えた。とりあえず、ドアの脇にあたしの靴と並べてそろえる。でかい靴。二十六センチ。そっか、男ものだもんねえ。

——ん?

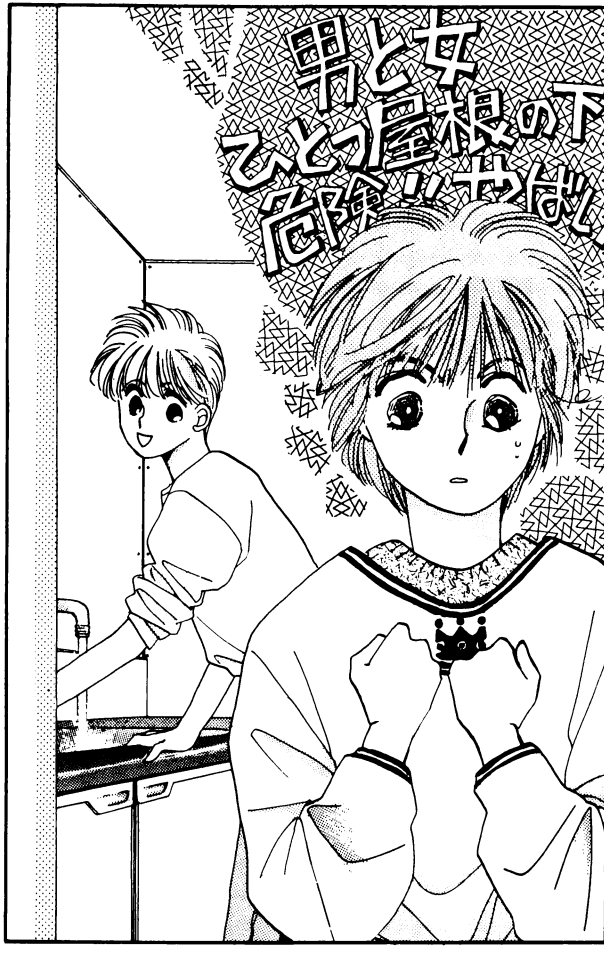
「しかしあれですね、妙子さんって勇気ある人ですねえ」

ざあっ、と傷口を洗う音にかぶって脳天気な声。

「女の子ひとりの部屋に見知らぬ男入れちゃうのって、けっこう肝っ玉だよね」

あ、あれ?

どどどっ、と今頃になって頭に血がのぼってきた。反対に体温はすーっと落ちていく。え


男と女
この屋根の下
危険な出会い

ーっ、何やってんのあたし!?　なんでこんな正体不明のヤバそうな男と夜中にふたりきりになってんの!?　ちょっと待てよ、えーっ!?

そ、そうかあっ。余裕じゃなかったんだ。あたしってば単にショックで頭が麻痺してたんじゃん。げーっ。ど、どうしよう……。

「妙子さーん、タオルありませんか」

いや、でも、ここで突然うろたえたりしたらますます危ない状況になるよね。弱み見せたらつけあがるもんね。と、とにかく刺激しないようにしないと……って、刺激したらどーなるっていうのよ、えー!?

「あ、これってば使っていいのかな？　使っちゃうよー。救急箱これですよね。勝手にあけてしまうよーん」

えーとえーと。だからとにかく落ちつくんだ、気を静めろ、落ちつけ妙子っ。

「人間救急箱がいないと苦労するよね。やれやれ。ところで妙子さん、ウサギさんは実は飢えてるんですが、何か恵んでもらえると大変嬉しいなっと」

うんうん、だんだん平常心になってきたぞ。よ、よし、この調子でなんとかごまかして早々にあいつ追い出そう。そうしようっ。

「妙子さん、聞こえてます?」

はた。

いきなり目の前が暗くなったな、とか思って。それから視界の焦点が合うのにちょっとばかし時間かかって。

よく見たら鼻先十センチに。

「もしもし？」

邪気のないふたつの瞳。

「っ――きあああっ」

「あ、よかった聞こえてた」

反射的に三メートルとびすさったあたしを見おろして、何もなかったようにバカがひとりごちる。ば、ばかーっ!!

「ふ、不必要に近寄らないでよっ！　常識わきまえなさいよ常識っ」

「だってシカトされると悲しいじゃないですか」

「う、うるさいっ。シカトなんか、さ、されて当然でしょ、立場考えなさいよねっ。こう寒いってのに屋根なんか破られて――そのへんの迷惑わかってないんじゃないの!?　これじゃ安眠もできないじゃないのよっ」

「妙子さん、ここで寝泊まりしてるの？　すぐそこに家があるのに」

穴のあいた屋根を見上げて、ぽつりとバカが呟いた。あたしは言葉を呑みこんだ。

「ふうん」

何も言ってないのに、肩をすくめてそいつが視線をこちらに戻す。
らしくない——大人びた表情で。
「それじゃ、ひとりで淋しかったよね」
「————」
一瞬、何を言っていいかわからなくなってしまった。
「あ……あんたには、関係ないじゃないのっ！」
怒鳴りかえしたけど、ちょっとタイミングをはずしてたかもしれない。

☆

抗議行動なんだよね。実は。ロックアウト。
三日間ふんばって、今夜を越したら四日目になる。絶対家には戻らないって。誰とも話さないって。食糧どさっと運びこんで、枕と寝袋とくまさんのぬいぐるみ確保して、万全の態勢をととのえて妙子さんはこの小屋にたてこもったのである。
そういう状況でやることっていったら勉強しかないし。テレビもないし。
「でも毎晩ごはんがカップヌードルというのは、栄養バランス悪いと思うよ」
恵んでやった「赤いきつね」にお湯を注ぎながらバカが言う。しょーがないじゃん、湯沸かしポットしか持ちこめなかったんだもん。
「あたしの勝手でしょ」

「でも栄養バランスが偏ると精神状態も不安定になるんだよ」
「余計なお世話っ！」
あんたは屋根を修理してくれればそれでいいんだよっ。流しに立つバカから可能な限り距離をとって、あたしは壁際に座りこんでいる。ちくしょー、やっぱり冷えるな。
「早く食べて早く修理して早く出てってよ」
「つ、冷たい。ウサギさんは悲しくて目が真っ赤になってしまいます」
無視だ、無視！
バカはばきりと歯で割り箸を折ると、本当に飢えていたらしくて黙々と食事をはじめた。部屋の端と端でふたりしてしーんと座りこんでるのってなんか……なんか間抜けである。
ずるずるずる。
と、スープをすする音。
……えーと。
「ねえ、兄弟いる？」
ぼそっと訊いたら、バカはスチロールのどんぶりに顔を伏せたまま目だけあげてこちらを見た。
もう一口かきこんでから、
「いますよ。妹が一名」

「げっ」
「いきなり『げっ』というのはひどくないですか?」
少しばかり傷ついたように呟く。だ、だってさー……。
「だって、それじゃ……」
「? なんです?」
「えと……いいや」
もごもごとごまかす。それじゃ、あたしの気持ちなんかわかんないよなー。
バカは何か言いかけたけど、結局黙ったまま食事を再開した。
「妹と仲良かったりする?」
またいきなりあたしが切り出した。バカはごほっ、と咳きこんで箸を持つ手を止める。
「前触れのない人ですな、妙子さんは」
悪かったな。
「ウサギさんは出来の悪い兄ですので、嫌われてるみたいですよ」
「やっぱり……」
「そこで『やっぱり』というのもひどくないですか?」
哀れっぽい眼差しでバカが訴える。あたしはため息をついた。
「あんたのことじゃなくて。こっちはこっちでいろいろ考えてんの!」

「あ、そうでしたか」
それ以上は話してやらない。
ぐるぐると箸でスープをかきまわして、バカはちょっとだけ間をおいた。
「ちなみにね、妙子さん」
にっ、と口許で笑って目を上げる。
「ウサギさんのほうは、妹のことが大好きなんです」
「――あ、そう……」
なんとなく意表をつかれた。うまく答えられなくて、あたしは口ごもる。
どんぶりをきれいに空にして、バカは箸をそろえた。手なんか合わせたりして。
「ごちそーさまでした」
よくよく律義な奴である。
「屋根は？」
「はいはいそうでしたね」
あたしに睨まれて、のたのたと立ち上がる。
「しかしこんな夜中に本格的に大工仕事すると近所迷惑なうえに注目を浴びてしまいますからね、とりあえず応急処置でいいですよね」
「なんでもいいから早くして」

「妙子さん投げやり……」

「う、うるさいっ。いちいち突っこまないでよっ」

大工道具なんか勿論なかったりするわけで、使えそうなものといったら部屋中ひっくりかえして見つけたガムテープくらいである。どっかからダンボール拾ってくればなんとかなるな、とバカは勝手にひとりごちて、靴をつっかけてのそのそと出ていく。

この時間に妙子さんの小屋から男が出ていくってのは人目にふれると問題があったりするのは必定で、ドアが開くときはちょっと冷や汗ものだった。おそるおそる家の窓を見たら、どの窓も真っ暗だった。なんだ……。

「では」

ドアが閉まる。あたしは残される。

しーん。

いきなり耳鳴りがしそうな静けさがずしっとのしかかってきた。空気だけじゃなくて音まで凍ってるみたいだ。寒い。

床に座りこんで、ずるずる毛布を引き寄せた。

あ、そうか、あいつあっさり外に出ていったけど。

もう戻ってこなくてもおかしくないんだ。

ぼんやりそう思いついて、体をまるめる。別にそれはそれでいい。それで普通だもん。

屋根なんて直らなくても、凍死することはないだろうし。さすがに。

いいんだけど、別に。

ため息。

妙子さんは、少しおかしい。いくら頭が混乱してたからって、いきなり見も知らぬ男を部屋にひっぱりこんだりしてるし。それもなんか力一杯こっちからお願いするよーな目で見上げてしまったし。よせばいいのに変なこと訊いてるし。わけわからなくて失礼な奴、とか思われたよね。多分。

妙子さんは……な、なんか妙子さんってばかなりおかしいぞ。常識はどこへ行ったんだ、常識は。大丈夫か？　頭しっかりしてるか？　三日間のひとり暮らしでおかしくなってないか？

三日間のひとり暮らしで。

学校にも行かないで。

ずっとひとりで。

——ひとりで、淋しかったよね。なんてあいつの声エコーつきでリピート。ちがうちがうちがうよ。そんなんじゃないよ。そんなんじゃないんだよ。

誰かと話がしたかったとか。ずっとずっと誰か待ってたとか。そういうんじゃないよ。そんな簡単に言葉にできちゃうようなことじゃないよ。言葉にしたら、ものすごく単純で安直でどこにでもありそうでそのへんのホームドラマになってしまう。そんなのやだ。

そういうんじゃなくて、あたしは。
そういうんじゃなくて。
「……」
わかんないよ。
あたしは毛布を引っぱりあげて、頭からすっぽりかぶった。
(あ、これってばオバQ)
——などと思ってるあたり妙子さんは本格的に……ナーバスだ。

☆

妙子さん妙子さん。妙子さんは良い子。
でも真澄くんはもっと良い子。
「ほんとうに良くできたお坊ちゃまで」
聞きあきるほど聞いた誉めことば。そうなんですよ真澄くんは我が校の誇りとでもいいますか、わははは。中学は一流。高校も一流。ついには日本一の大学にあっさりパスして東京行っちゃって。まさに地元のヒーロー、故郷に錦の生き見本。勉強だけじゃなくて、何をやらせても人並み以上にこなして。ついでにあたしに似て(おいおい)顔まで良かったと、ここまでくると鬼にマシンガン。天は二物も三物も、与える奴には与えるんだなあ、と同級生たちの肩をのきなみ落とさせておきながら、そのくせマジで人に恨まれたことはなかったという世渡り上

手。断言しよう、真澄くんはパーフェクトな男だったのだ。
ま、今にして思うと真澄くんは真澄くんで、パーフェクト猫を二匹も三匹もかぶって本人なりに苦労はしてたんだろうけどさ。
でもね。
でもね。
そこでそういうパーフェクトな兄を持ってしまった妹は世をすねてグレちゃったかってー
と、それは違うんだな。
言っちゃなんだけど。言っちゃなんだけど妙子さんにとって、真澄くんという存在は。
照れるからあんまし大声で言ったことはないけど。
……理想の、男、だったりしたんだな。
一番遠くて、一番眩しくて、絶対に落ちてこないお星様。
目標で、憧れで、誇りで、自慢。
誰よりも誰よりも大好きだった。そう、大好きだったんだよ。過去形だよっ。
「大学、やめてきました」
さっぱりした顔で真澄がそんなことをほざいたのは、四日前のこと。
時期はずれの長男の帰郷に盛りあがってたあたしらは、完全にあっけにとられたね。
さらに続けて真澄くんが言うことには。

「実は、バンドで歌ってるんです。いずれはこれで食っていけたらと」

ちょっと待て真澄ーっ！　なんだそれはあっ。

と、真っ先に騒いだのはこのあたしであった。

真澄は、真澄はエリート街道突っ走って、ゆくゆくは国家の中枢まで食いこむ逸材じゃなかったのか!?　たしか大学入るとき真澄の担任はそんなこと言って自分のことのよーに泣いていたではないかっ。

それがいきなり、こともあろうにロックバンドときたか真澄っ。軽薄。堕落。先行き真っ暗。水商売。つまるところ要するに、それってばエリートコースからのドロップアウト以外の何物でもないんじゃないのか!?　あたしの真澄が落ちこぼれるなんて、そんなん絶対許さないっ。

「妙子、そこまで言わなくても」

「まあ、真澄がやりたいことをやればいいだろう」

信じられないことに、これが両親の言葉である。マジか!?　普通、父親あたり猛反対しないか、こういう場合?

しかしうちの親はそろって親バカ、おまけに楽天家であったのだ。真澄くんの栄えある前途を祝って大人たち乾杯。妙子さん呆然。妙子さん激怒。妙子さん宣戦布告。

真澄が気を変えない限り、もう絶対家族と口きかないっ。

――と、いうのが妙子さんの主張である。
その時真澄がどんな顔をしてたか、あたしはなぜか憶えていない。

☆

真澄、あのね、真澄、あたしは真澄みたいになりたかった。
周り中の視線をたったひとりで集めてしまう、そんな力に憧れた。
そんな人が自分のすぐ近くにいるんだって、考えるだけで胸がどきどきした。
あたしのほうだけを見てくれてる、その瞳があたしの宝物だった。
小さいころ友達の家で遊びすぎて時間が遅くなると、夜の道を真澄が迎えにきてくれた。暗い道怖くて。手をつないで。ひろがる夜空を見上げて真澄が星座の話をした。ギリシャ神話を教えてくれた。そのへんのガキが知らないようなことを、子供のころから真澄はたくさん知っていたよね。
「妙子さん」
遠くから声。ぽんぽんと頭に手の感触。
「屋根、終わったよ」
屋根？　屋根ってなんだっけ？
でもわかってるのは。わかってるのは、この声が真澄とはちがうっていうこと。
「じゃあ、俺は帰りますからね」

……そしてこの声も遠くへ行ってしまう。
あたしは残される。
「真澄が」
ちゃんと声になったかどうかわからない。なんだか意識がふわりと浮いてるみたいだ。ぐらぐらしてる。
「真澄が迎えにこない……」
待ってるのに。
「どうして?」
静かに問いかえす声。あれ、あいつ帰らなかったんだ。
本当にいるのかな。夢かもしれない。夢でもいい。
もう真澄は迎えにこない。どうしてってそれは。
あたしが自分でそうしたんだ。
「来たんだよ、来たけど、あたしがドア開けてやらなかったの。あたしが一緒に帰らなかったの。来るなって言ったの」
真澄、何度もこの小屋のドアを叩いて、話をしようって言ってきたのに。
「それは嫌いだからなの? 好きだからなの?」
遠くからかすかに届くあいつの低い声。

「妙子さんは、その人にどうしてほしいの。自分の言うとおりにしてほしいの、してほしくないの」

いきなりそんなこと言われてもわからん……。

ぼうっと濁った頭で考えて。

「両方だから困ってんの」

「そうか、それは困るな」

「うん」

「困った時は寝てしまいなさい」

「うん」

それでは全然解決になっとらんぞと頭の隅で思ったりもしたけど、その声を聞いたらなんだか妙に落ちついてしまって、あたしはそのまま本格的に眠りに沈みこんだ。

おやすみなさい、と律義にあのウサギ。うん、おやすみ。

☆

月から落ちたウサギの夢を見た。

足をすべらせて月から落っこちて人の家の屋根ぶちぬいたウサギは、もう空に戻ることができなくて、ひとりきり。それじゃ淋しいでしょう、帰りたいでしょう、と言われてウサギは胸を張る。いえいえ、私はいつでもどこでも幸せで。

馬鹿だなあ、それじゃその泣きはらした真っ赤な目はなんなのよ。
言ってやったらウサギはいじけて、手の届かない高い所へ跳んでいってしまって……。

☆

「!?」
目が醒めたら朝だった。いや、別に朝なのはいいんだけど。
「あ、おはようございます」
壁に背中をつけて座りこんでたウサギ、じゃないやバカが、ちらりと手をあげてそんなことを言う。な、何!?
「な、な、何やってんのあんた!?」
「いや、僕もですね、安眠のお邪魔をしてはいかんと思ったんですが」
悪びれもせずに大真面目に答える。
「帰りますよと言ったら、妙子さんが絶対に帰るなとおっしゃるものですから」
う、嘘だろ!? がばっとはね起きて、あたしは口をぱくぱくと開閉させた。そんなこと言ってないっ！ ——と、本当は叫びたかったんだけど。
ちょっと待てよ。だから昨夜は。
いつの間にかうとうとしたんだ。そういえば。そこにバカが戻ってきて何か言って。で、あたしはねぼけてて、ねぼけたまんま、なんかいろいろ喋って——そうだ、喋っちゃったん、だ

よ。確か。

いや待てしかし、それは単にあたしの夢で、バカはカマかけてるだけということも考えられるぞ。う、うーんと……。

ええいごまかしてしまえっ！

「あたし昨夜のことってよく憶えてないから」

言うなりすっくと立ち上がり、バカの顔見ないようにして机に歩みよる。ううう、洋服のまま床で寝てしまった。なんてこった。

時計を見たらけっこう早い時間だった。……学校に間に合う。

どうしようか。

——そういえば。

「あんたは学校行かないの？」

机の上のノートとかシャーペンを手荒に片づけながら、振りむかずにあたしは訊いた。こいつもどう見たってまだ「生徒」の年だし。

「いつもは行ってるんですが、今日はお休みです」

「どこの学校？」

「ええまあいろいろ、全国をてんてん、いやピョンピョンと」

どこまで本当かわからんな。

「妙子さん中三だったんですね。受験生ですか」
教科書の表紙に目をとめたらしく、あいつの台詞。
「あんたは？」
「僕ですか？　僕はコウコウセイですよ」
げ、年上じゃん。
思わず振りむいたら、なんかすごく意外な瞳に出会った。
笑みを含んで、あったかくて、強い、目をして。ぐいと背中を押すような強い目をして。
「中学生にも戻りたいけどね、でも時間は戻せませんから」
「……」
何を言いたいのかは、よくわからなかった。言葉の奥の本音は見えなかった。
でも、その瞳。
「だからさ」
くだけた口調。
「見送っててあげますから。行ってらっしゃい」
あたしは黙っていた。
時間は戻せないから。今できることは今しかできないから。
あたしの時間も。真澄の時間も。いつまでも止まってなんかいなくて。

だから？

「……」

あたしはのろのろと動いて鞄に手をのばした。

ゆっくりと、ノートと教科書を一冊ずつ詰めていく。かたん、かたん、と鞄の底にノートがあたる音。

ただの理屈だったら、あたしは聞かない。

けど……ウサギは、泣いたんだ。なぜかなんて誰も知らなくても、本人何も言わなくても。あたしを眠らせた優しさは、あたしの淋しさを見抜いた赤い目は、その証拠。だからその言葉はただの理屈じゃないんだ。それはウサギが泣いて泣いて、あげくにつかんだ真実。今は今しかないんだ。過去も未来も、今にはないんだ。

「ねえ……」

鞄の口をとじて、あたしはもう一度振りむいた。

何を言おうか。

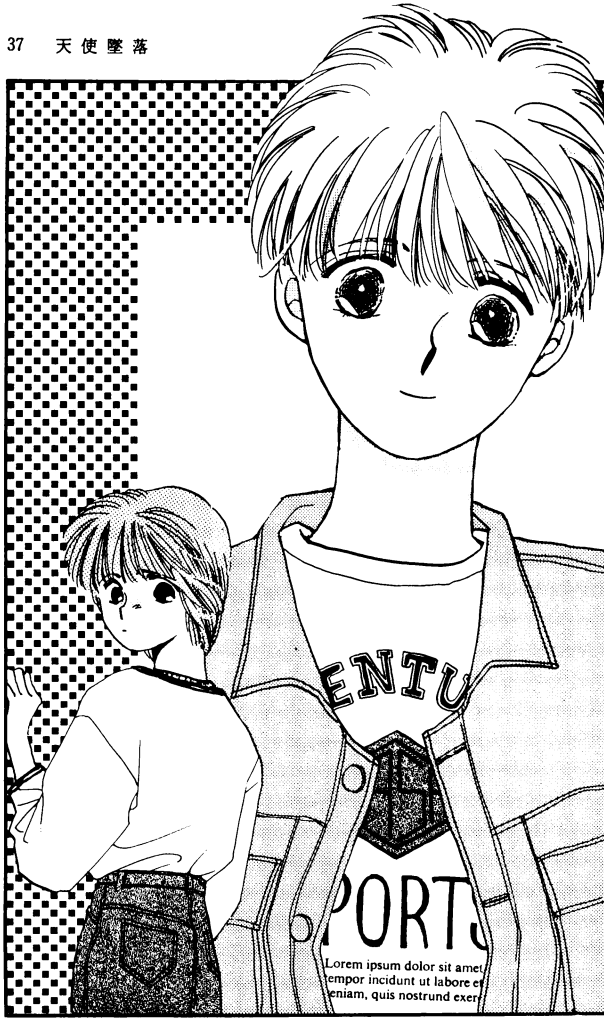
「友達、いる？」

「うん。大好きなんです」

迷いもせずにそいつは頷いた。嘘じゃなかった。本当の言葉。

あたしにも友達はいるけど。

大好き、ってのは、なかなか言えないよね。
こいつはきっと幸せなんだ。それならいい。
「あたし、学校行く」
鞄を持って机を離れた。制服は家にある。戻らなきゃならないけど、仕方ない。
バカは何も言わずに床に座って、こちらを見ている。
ドアのところであたしは振りむいた。
もし。あたしが帰るまでここで待ってろって言ったら、こいつは待っていたりするだろうか。頼んだら。もしも今ここで頼んだら。
うまくいかなくて、あたしが逃げ戻ってきた時、待っていてくれるだろうか。
頼んだら。
「忘れものはないですか」
こちらが口を開きそうになったところで、ぎょっとするようなタイミングでさらりとバカが言った。
「……うん」
大丈夫。行ってこい。見ててやるから。
そんな響きを勝手にあたしは読みとって。勝手に思いこんで。自分に言いきかせて、そしてドアを開けた。


ENTU
PORTS
Lorem ipsum dolor sit amet
empor incidunt ut labore et
eniam, quis nostrund exer

ウサギにはウサギの真実。

☆

あたしにはあたしの真実。真澄には真澄の真実。

考えてみたらあの真澄が、ただの気の迷いなんかで方向転換するなんてことはありえないんだ。いや、それどころかあの天才的八方美人の真澄が大学やめるなんて一大決心するってのは、ものすごい理由がなかったら嘘なんだ。

その「理由」はあたしじゃなくて、東京にいるあたしの知らない「仲間」たちで。それがあたしはくやしかったんだけど。

「妙子」

台所から母親が声をかけたけどあたしはかまわず二階に上がって、ばたばたと制服着こんでコートを羽織って、それから鞄を持ち直して部屋を出た。階段をおりたら母親が玄関先に出てきてた。

「学校、行くから」

短く言った。父親はまだ起きてない。真澄も。

「あのね、妙子」

しっかりとあたしの目を見るようにして、母親が口を開いた。

「明日、東京に戻るって。真澄」

「……そう」

そうか。帰るのか。

「ちゃんと話、聞いてやりなさいね。真澄が自分から、何かやりたいなんて言い出したのはこれがはじめてなんだから」

「……」

――そうか。だからか。親が諸手をあげて賛成してたのは。

真澄くんはできすぎた突然変異で。遺伝なんかまるきり無視した大天才だったから。重すぎるほど才能を背負って、なんでもできるのに、本当にやりたいことなんかない人だったから。

あたしの愛した真澄はお人形。

「真澄ッ」

いきなりあたしは二階の寝室に向けて大声で怒鳴った。

「覚悟してろよっ！」

母親がきょとんと目を円くしてたけど、そのままあたしは靴を履いた。

今はまだ真澄と話さない。あたしだってまだ許したわけじゃない。学校行ってじっくりいろいろ考えて――帰ってきたら。

「帰ったら、とことん真澄とケンカしてやるからさ」

母親に、少しだけ冗談めかしてそう言って、あたしは玄関を走り出た。

帰ってきたら。

人間の真澄と、本当の話を、はじめて、できると思う。だから。

もう少しくらい、感傷に浸っていたっていいじゃん。

☆

そして帰ってみたら、やっぱりバカはいなかった。

あたりまえだよね。

夕暮れのうすぐらい小屋の中をぐるりと見まわしたけど、あいつのいた痕跡は何もなかった。「赤いきつね」のどんぶりも、二十六センチの汚らしいスニーカーも。屋根だけはつぎはぎがしてあって、だからあのバカが幻じゃなかったってのは信じていいと思うんだけど。

もう少しくらい待ってたっていいじゃんよ、ばか。

絶対いないだろうなあとか、わかってたけど、だけどあんたのことだから人の裏かいてしっかり居座ってるかもしれないとか、根性悪いからどこかに潜んでて人を驚かしたりするかもしれないとか、常識の通じない奴だから今夜あたりもう一度屋根踏み破るんじゃないかとか、あらゆるケースを想定してシミュレーションしてきたのにさ。

書き置きが残ってた。だからもう、あいつは来ない。二度と来ない。

「お世話になりました。ありがとね。——水沢涼」

メモの切れはしに。汚い字。

あいつはもうウサギじゃないんだ。水沢なんて、あたしは知らない。だからウサギは二度と来ない。

迷った末に、確率一パーセントに賭けて買ってきた新品のスニーカーも、結局ムダだった。期待なんかするんじゃなかった。情けなんてかけてやるんじゃなかった。

真澄以外の男のために何かを買ってやるなんて。

はじめてだったのにさ。

——水沢って、誰?

「……ばか」

スニーカーがぼとぼと床に落ちた。気がついたらあたしは泣き出していた。忘れものがあったのに。あったのに。ごめんねもありがとうも言わないままだったのに。

言いそこねたら、もう二度と伝えられない。そんな大切なことも、あたしはよく知らなかった。ガキだね。しょーのないガキで。

泣いて泣いて、泣いてしまおう。忘れないために、気のすむまで泣こう。忘れないから。あんたが忘れても、あたしは忘れないから。

だから幸せでいてね。

泣きつづけながら、あたしは祈った。

いつかもっと優しくなれたあたしが、どこかの街であいつとすれちがう、そんな時のために。

迷える羊に愛の手を

1

季節は晩秋である。

詳しく限定すると十一月も中旬を過ぎ、そろそろ十二月初頭の期末試験が気になりはじめる時期である。つまるところ、転入生がやってくるには実に似つかわしくない頃合である。

そして舞台は男子校である。

さらに言えば県下屈指の進学校、有名大学への合格ゾロゾロ、偏差値は驚天動地の高レベル、入れるもんなら入ってみやがれこん畜生、という名門高校である。要するに、一年の終わりごろになって編入してくるバカなどとてもいるとは思われぬ学校なのである。

「ムリがある……」

威風ただよう校舎を見上げ、校門でその転入生はぼそりと呟いた。

一年生にしてはかなりの長身である。すらりと、ではなく、ひょろりと高い、というのが難点といえば難点、特徴といえば特徴、お茶目といえばお茶目であろう。長すぎて目にかかる前髪をぐしゃりと片手でかきあげて、小さくため息をつく。

「まあでも、常識だけじゃ世の中渡れないもんね」

制服がグレイの詰め襟というのも趣味ではないのだが、とりあえず仕方がない。

開きなおって鞄を持ちなおし、たらったらったらったウサギのダンス、と口ずさみながら事務室に向かった彼の転入生の正体は。

——もはや言うまでもあるまい。

☆

勤労転校少年こと水沢涼は、このところ実に働きものであった。

そもそものはじまりは「上野駅グッドラック事件」なのである。絶対すぐに東京に戻る、と宣言した以上はさっさと仕事を終わらせないことには話にならず、かくなるうえはと心を決めて、大真面目に働いていたりするのである。結局あれから半月足らずで八件の仕事を片づけたのだから異例の早さだ。もっとも、どれもこれもそれほど深刻なトラブルではなかったからこそ、ではあるが。

しかしその異例のスピードに呼応するかのごとく次々と仕事が舞いこんでくるのはなぜであろうか。いつもならとっくに暇になっていてよさそうなものなのに、今回に限って斎伽忍は息をつく間も、いや東京への日帰りすらも許さぬペースで指令を入れてくるのである。これは〈妖の者〉の動きが活発になっていることを示しているのか。あるいは単に忍の陰謀か。

（陰謀だ、陰謀に違いないっ）

根拠もなく確信して、涼はきりきりと奥歯を鳴らした。

（あいつ実は〈妖の者〉と組んで俺をいじめとるだけなんじゃなかろうか……）

極論に走ってしまいたくなるのは、目の前に広げた英語の教科書が頭から終わりまで全然わからなかったりするからである。

一年二組、火曜日の一時間目は英文読解の時間であった。元気のありあまった中年教師が怒鳴るように英文を読んでいる。どこを読んでいるかはわかるが、その意味するところはさっぱりわからない。どこの国の言葉じゃこれは、と諒はお手上げ状態で嘆息した。

わからないのは英語だけではなくて、この教室、さらにこの学校を占める、なんとも言えぬ空気のことだ。

転入生が来たというのに、教師のほうはおざなりの名簿確認をするだけで、生徒に対して紹介しようとする気配すらない。生徒のほうは関心を向けるどころか、予習に必死で机から顔も上げなかった。こちらとしてはお邪魔にならぬよう、こそこそと席に着くしかなかったが、なしくずしにクラスの一員になるという感じでどうにも座りが悪い。

四十人も男がいるのに、このおしとやかさはなんなのだろう。しんと空気が静まりかえって体温もろくに感じさせないのだ。進学校と呼ばれる所はいくつか回ったが、ここまで無機的な学校はめずらしい。

「大月」

指名されて、一番前の席の生徒が立ち上がる。

眼鏡の似合う、頭の良さそうな少年だ。委員長タイプだな、と教科書ごしに諒は観察した。

風格がある。

よどみなく発される訳文。

どこの訳をやっているのか見当もつかず、諒は考えるのをあきらめた。

（亮介が英語、得意だったなあ……）

ぼんやりと思う。いや、確か崎谷亮介は要領のいい奴で、ほとんどの科目がそれなりに良かったのだ。あえて苦手というなら理科系が——特に物理と生物が苦手で。

（でも神原さんが理数系得意だったから、ちょーどいいよね……しくしくしく。いいんだいいんだ俺なんか）

意味もなくグレてしまうのは、意地を張ってまだ一度も亮介と連絡をとっていないせいだろうか。

意地といっても、要するに緊張してなかなか電話をかける決心がつかなかっただけなのである。別れた翌日、というのはあんまり早いよなあ、と思って先送りにし、三日後には、今夜はもう寝たかもしんないなあ、と思ってやめ、一度タイミングを逃すと泥沼にはまって、用もないのに電話したら邪魔かも、いやもう俺のことなんか忘れてるかも、もしかして薄情者と思われて嫌われたかも、などと余計なことばかり考えて駄目になっているのだ。それがここに至って妙に意地になって、そうそう頻繁に声を聞いていたらありがたみが薄れるもんね、という後ろ向きな結論にたどりついているわけである。

なまじ「すぐ帰る」ことばかり考えていたので、こんなに音信不通が長びくとも思わなかった。不覚である。

「水沢」

いきなり名を呼ばれた。げっ、と目を上げると、なんとしたことか、見事に中年教師と視線が正面衝突しているではないか。とっても嬉しくない。

「次、三行目から」

(ちょっと待て――っ!)

だからわからんと言うておるのに、と腹の中で叫ぶ。これは正直に降伏するか、それとも笑いをとって逃げるか、と一瞬考えたところに。

「おい」

横から小声がかかった。隣の席。

見返ったら、押しつけるようにノートが一冊まわってきた。完璧な和訳文だ。わざわざ指定箇所の頭に赤マルまでついている。

少しだけ驚いて、それから諒はこっそり手をあげ相手に感謝の意を表しつつ、がたごとと音をたてて立ちあがった。

隣の席の少年からは、はにかむような笑顔がかえってきた。

☆

「どうもありがとうございました。助かりましたです」
休み時間になってから、改めて諒は隣の席へ向きなおった。
ばか丁寧な礼の言い方が意外だったのか、言われた当人は一瞬きょとんと目を上げて、それから何度かまばたきをくりかえした。
「……面白い人だね、君は」
伏し目がちに微笑を浮かべて、そう言葉をかえす。
「そ、そうですか？」
「うん。面白いよ」
「そ……そうだったのか。僕ってば面白い人だったのか。二言三言で本性見抜かれちゃって、僕ってば、ああこれからの人生どうしよう」
「何も悩まなくても」
頭を抱えこむ諒に、深田充というその少年は、まともに反応して一緒に困ってくれたようである。いい人だなあ、と感動して諒は顔を上げた。真面目なタイプは概して好きなのだ。
「深田君は、いい人ですねえ」
姿勢を正して正直に言ったら、またもや異星の言語を口にしたような驚き方をされてしまった。
「――え？」

しばしの空白の後に、我にかえって彼が聞きかえす。
「だから、いい人だなあと。おまけに親切だし」
「……そう、かなあ」
「ちょっとなんですかその疑いのマナザシは。この僕が嘘をついているとでもいうんですか。そんなこと言われたら諒ちゃん悲しいっ。諒ちゃん嘘つきじゃないもんっ。必殺涙目攻撃しちゃうもんっ。うるるるるんっ」
「――……」
もはや呆然の境地を通りこした表情で、深田充は二の句を継げずにいる。
思いきり哀れっぽく目をうるませて「いいえ世間に負けたポーズ」をとったまま静止していた諒は、ふっと肩の力をぬいてくすくすと笑いだした。
「いけないなあ、深田君のような人が相手だと、ついついサービス過剰になってしまいます」
「え？」
「いや、要するにからかってたりするんじゃないんです。そこのところ勘違いしないでね。僕ってば深田君みたいな人が好きなのだということです。そういうこと」
「……」
にっこりと笑って諒がそう言うと、毒気をぬかれた風情で充は深々とため息をついた。困ったなあ、と呟く声にようやく苦笑が混じる。

この学校もそう捨てたもんじゃないかも、と諒は先ほどの考えを少しばかり改めた。先入観で人や学校を決めつけるのは良くない。

「それにしても深田君」

真顔に戻って諒は視線を周囲に流した。

クラス全員とまではさすがにいかないが、半数以上は席に残って例のごとくお勉強に専念している。よく飽きないものである。

「ずいぶん競争が激しいんですね、ここは」

「ああ、まあ、そうだね」

これが日常になっているのか、充の口調はむしろあっさりとしている。

(当然だと思ってると、本当に当然になるんだよねえ……)

身に憶えのある感覚だ。諒は肩をすくめた。

「あんまり皆さん熱心だから、今日はテストでもあるのかと思ってしまったよ」

「え？　あるよ、テスト」

「は!?」

まさかの展開につんのめりそうになる。力いっぱい聞きかえした諒に、深田充は不思議そうな顔をした。

「先生から何も聞いてないのかな。火曜日はたいてい、午後に三教科の実力試験をやるんだけ

ど」

「き、聞いてない聞いてないっ」

なぜ聞いていないのかというと、今朝は校内で迷ってしまって職員室にたどりつけなかったからである。……いつものことである。

「順位がね、かなり成績にひびくから……それでみんな頑張ってるんだ」

「毎週ですか、それ……」

「うん。もちろん、定期試験のほうが優先だけど」

(明日から来ればよかったーっ!!)

転校初日から試験ということになるとは思わなかった。せめて前もってわかっていれば、対策の立てようもあったものを。

(忍だっ、ぜんぶ忍が悪いっ。そうに違いないっ)

目の前にいない人物に責任を押しつけて、諒は勝手にそう決めつけた。だいたい、こんな学校に人を放りこんでおいて仕事の内容もろくに説明しないとは何事であるか。

「ついてないね、今日来たばっかりで」

ショックにうちのめされている諒に同情をさそわれたらしく、充が横から声をかけてくる。

「でも、編入試験にパスしたくらいならトップクラスだよね。心配ないよ、君なら」

「……ははははは」

乾いた笑いを響かせ、諒は机にへばりついていた。
（やっぱしこの学校、ちょっと嫌かも……）

☆

昼休みにようやく探しあてた職員室に、一年二組の担任は不在であった。
数学準備室だろう、と隣のデスクの教師に言われて、やれやれと思いつつ再び校内探検の旅に出る。
（山口美夜先生、ね……）
名前から察するに女性であることは確かである。あんまり怖い人じゃないといいなあ、と階段を上りながら諒はひとりごちた。どうも自分は女運には恵まれていないような気がするのだが。
廊下の隅に、数学準備室の札はあっさりと見つかった。
「失礼しまーす……」
人の気配がない。そろそろとドアを開いて、諒はひそめた声で呼びかけてみた。
狭くるしい部屋に、デスクが四つ。
数学担当教官の専用密談室は、現在もぬけのからであった。
「なーんだ」
出なおすか、とドアを閉めかけたところに、

「あらやだ、どうしたの？」

耳元に妙に艶っぽい声が出現した。がばっ、とドアを背にして振りむくと、真っ赤なスーツが目にとびこんできた。

品定めするように見上げているふたつの瞳。

「せ……先生、ですか？」

少々意表をつかれて諒はその派手な双眸を見つめかえす。

「そうよ。先生、よ」

ルージュの唇がからかうような笑みを宿した。

二十代半ばほどの印象。化粧が板についている。素顔はともかく見た目は美人、だ。しかも——来る所まちがえたんじゃないか、と思うほどに、全身からあぶなっかしい光線を発散している……ような、気がする。

白のフリルのブラウス。きわどい短さのタイトスカート。ハイヒールのくるぶし。

「どこ見てんの、よっ」

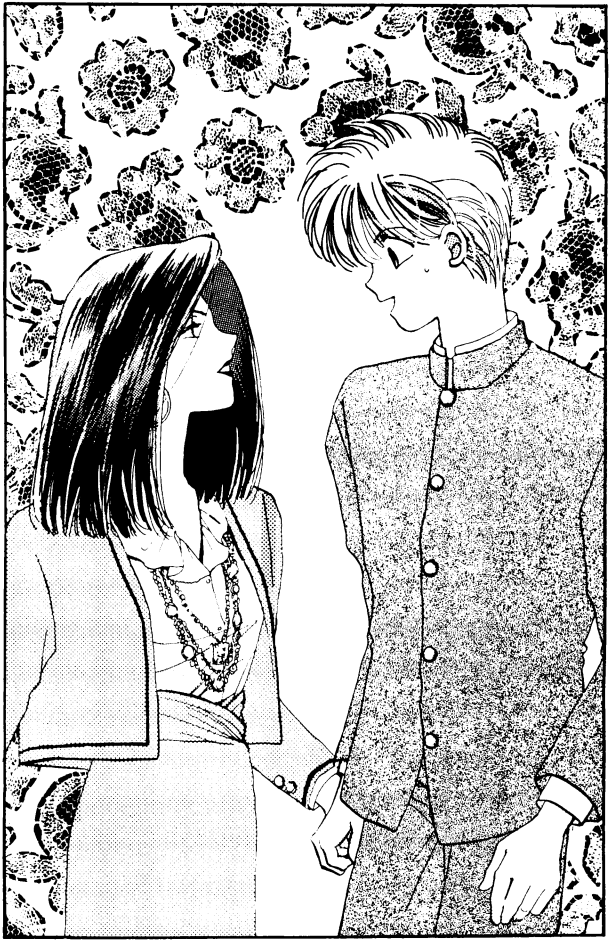
いきなり人差し指で額を軽くつつかれた。

「はあ？」

情けない声で聞きかえす。別によこしまな気持ちで脚を眺めていたわけではない。あまりにこの場にそぐわないので呆れていただけである。それだけのはずである。……多分。

「何か用かしら」
大きくドアを開いて部屋に踏み入りながら彼女が問いかける。腕にいくつものファイルを抱えている。
「はあ、山口先生に」
「あ、それ、あたしよ」
ファイルを窓際の机に放りだして、彼女は自分の胸を指さした。
（これが担任……？）
男子校にこんな教師を放りこんだら生徒の成績ガタガタにならんかね、と諒は頭の片隅で呟いた。掃きだめにマリリン・モンローだ。
「ははあ、キミ、今日来た転入生でしょ。そういうことでしょ」
山口美夜は腕を組んで、つらつらと諒を鑑賞している。
「実はそういうことなんです」
「あ、そっ。ま、入んなさいよ、ほら」
赤い爪が強引に諒を室内に誘い入れる。ドアを後ろ手に閉めて、諒はなんとなく嫌な予感を覚えた。
「水沢君だったわよねえ、ちょっと待ってね」
デスクの書類をあちこち引っかきまわして、山口美夜は一枚の内申書を探しあてた。

「そうそうこれだったわね、水沢諒、本日付で編入、よね」
「はあ。ごあいさつが遅れまして」
「あらいいのよ。ふうん、前の学校、東京だったのね。ああ例の祥英ね、うちのライバルだわ、なるほどね、道理で今ごろ編入してくるわけね。……やだ、あなたってば優秀じゃないの、嘘みたい。あの祥英でここまで点とれるってすごいわよ、ちょっと」
「ははは」
再び乾いた声で諒は空しく笑った。この手のハイレベルな学校に来るときはたいてい、東京は私立祥英高校在学中の里見十九郎氏の内申書を流用させてもらっているのである。斎伽忍の手抜きのほどが知れるというものである。
そういうことならいっそ自分が出向いてもかまわないのに、と十九郎は言ってくるのだが、そこまではさせられないと忍にクギを刺されている。それをやると諒の収入がなくなる、というのがその理由であるらしい。あんまりな言われようである。
(まあ確かに、あの人にこんなヤクザなことさせられないけどね……)
「ねえ」
気がついたらすぐ目の前に——正確には目の下に、赤ずくめの物体がにじりよっていた。何事か、と一瞬ひきつり、よくよく見返したら山口美夜である。
「ずいぶん背が高いのねえ」



「はあ。そうですか？」
「体型もなかなかスリムで好みだわ。何センチくらいあるのかしら」
「……百八十二、ですけど」
「あら、百八十超してるのね。すごいわ、理想的だわ。ねえ水沢君は先生のこと嫌い？」
「はあ？」
なんだか雰囲気があやしげになってきた。諒はじりじりとドアに向かって後ずさりを開始した。
「ちょっと何よ、逃げなくてもいいじゃないの」
ぐいと山口美夜の手に襟元をつかまれた。喉がつまる。
「だいたいあなたねえ、第一ボタンまできっちりかけちゃって、学生服の着こなしってものを全然わかってないわよ。若者がこんなに堅苦しくちゃ駄目よ。はい、先生が正しい若者のありかたを教えてあげますからねー」
白い指が勝手に動いて、詰め襟のボタンを上から次々と外していく。もしかしなくてもこれは、制服にかこつけておきながら別のことを目的としていないか。慌てふためいて諒はその手を押しとどめた。
「ちょっと、あの、先生、もしもし？」
「あらどうしたのよ水沢君。あたし正気よ、じゃなかった本気よ」

「なんなんですかそれはいきなり」
「いいじゃないのよ少しくらい。こっちはこれが唯一の趣味なんだから」
「よくないですよ普通っ！　あなた先生でしょ!?」
「教師である前にひとりの女よ……んふふふ」
熱っぽく見上げるその目は、明らかに常軌を逸している。日本の教育界はどうなっておるのだ、と諒は天を仰いだ。こういう局面にだけは対処のしようがない。
「手も大きいほうだわね。ますます好みだわ」
彼女に言われて自分の手を見ると、しっかり山口美夜の両手をつかまえたままだった。ぎゃっ、と放りだして飛びのく。
「あの、とりあえず俺、これで失礼しますのでっ。ほらほらっ、もうすぐ試験がはじまってしまうではないですかっ」
「まっ、残念。ゆっくりしてけばいいのに」
「……あなた本当に先生ですか?」
「そうよー。先生よー。ついでに担任だから、毎日会えるわね、嬉しいわ。今度いっしょに楽しいことしましょーねっ」
かえす言葉もない。
命からがら数学準備室から脱出した時には、カランコロンと予鈴が鳴り響いていた。

（……つ、ついていけねー……）

階段の踊り場にしゃがみこんで諒は頭を抱えた。こんな所でこれほどの強敵に遭遇するとは予想だにしなかった。深入りする前に、さっさと仕事を片づけて逃げなければ。

問題は、この学校のどこに〈妖の者〉がらみのトラブルが存在するのか、まだ見当もつかない、というところにあるのだが……。

「はっ。試験試験っ」

我にかえって階段をおりはじめる。もう階段にも廊下にも人通りは全くない。

（前門のお勉強漬け、後門の山口先生、ということだろーか）

なんだか力がぬけてきてしまった。

（やっぱしこの学校、ずいぶん嫌かもー……）

2

三教科分の試験を泣く泣く受けた後に学校全体を細かく見回ってから帰ると、アパートに着くころにはとっぷりと日が暮れていた。

学校から歩いて二十分程度のところに、安アパートを一部屋借りているのである。この近辺には忍の持ち家はないらしい。ねぐらは好きに選べと言われたので、経費を浮かすために四畳

半のボロアパートにころがりこんだのだ。長居をするつもりはないし、別に不自由はない。
自分の部屋の前までたどりつき、鍵をとりだそうとして涼はふと動きを止めた。
たてつけの悪い扉の向こうから。
「？」
きれぎれに聞こえてくるのは確かに人の話し声だ。
鍵は、出がけに間違いなくかけていったはずなのに。
（――まさか）
ドアの前で思いきり眉をひそめる。あまり想像はしたくないが。しかしまさか。
そろそろとノブに手をのばすと、あろうことか扉は半開きになっていて、ギギギ、ときしみながら手前に動いた。
「……そうそうそう、その卵の入れ方がポイントなのよ。あ、ちょっと待って、ネギはどうするの？　……そのまま入れるの？　……そうかあ、そうよねえ」
よく通る明るい声音。
「え、ソーセージ入れるの？　サラミ？　……あたしはねえ、ツナでしょ、コンビーフでしょ、決め手はコーンよ、コーン」
ドアのところで立ち尽くした涼にはおかまいなしで、部屋の真ん中に居座るセーラー服の少女は受話器に向けて何やら熱心に話しつづけている。

何かのついでのようにくるりと振りむいて、諒に片手をふってみせた。
「……うん、そうね、じゃ試してみるわそれ。どうもありがとね、またね」
そう言って電話を切ると、今度は改めて諒に向きなおる。
「お帰りなさーい。遅かったわね」
「……」
返事の代わりに諒は片手でがっくりと顔を覆った。
「冴子……おまえさん確か昨日から東京に戻ってるんじゃなかったか？」
「予定は未定でしょ。長い人生、こんなこともあるわよ」
当然のように悪びれもせず、冴子は言いかえす。
「長い人生、こんなことばっかりの気がする……」
深々とため息をつきながら、のろのろとドアを閉めて諒は部屋にあがりこんだ。
「似合わないわね、その制服」
「やかましい」
どうせ部屋の鍵は大家さんを「田舎の妹説」だの「内縁の妻説」だのでだまくらかして手に入れたのであろう。いつものことである。
「何をしに来たのだ、そもそも」
制服の上着を放りだし、諒は床に座りこんだ。いつの間にか部屋が掃除してある。

「電話、借りに来たのよ」
冴子が答える。何やら、この部屋にしか電話が存在しないような言い方である。
「もしかして今の、わけのわからん電話か？」
「うん。『インスタントラーメンのおいしい作り方』について」
「……おい。俺は今ものすごく呆れたぞ」
「あとね、もうひとつ。ラーメンもらいに来たのよ。おなか空いてるの」
またもやこの部屋にしかラーメンが存在しないようなことを冴子は言い、ぱたぱたと動いて鍋を火にかけている。口をはさむのも馬鹿らしくて、諒はごろりと床に横になった。勝手にしていただきたい。
「ねえ、電話の相手、知りたくない？」
ネギをきざみながら冴子が声をかけてくる。
「べーつにー」
諒は気のぬけた言葉をかえす。どうせどこかの物好きだろう。
「ふうーん……亮介ちゃん、かわいそう……」
包丁の手を止めて、ぼそりと冴子が呟いた。
一瞬の空白。
「――なんだそれ!?」

がばっと諒が身を起こす。
「おまっ、おまえ、おまえもしかして今の」
「亮介ちゃんって意外と研究熱心で、いろいろ工夫してるから参考になるのよね。今度諒ちゃんもラーメンの作り方教えてもらいなさいよ。役に立つわよ」
「だーっ！　ちょっと待てちょっと待てっ」
ばしばしと諒は平手で床を叩いた。きょとんとして冴子が見る。
真顔になって諒は座りなおし、口を開いた。
「もしかしておまえ、そういう世間話を今までに何度も亮介と」
「してるわよ、勿論。仲良しだもの、あたしたち」
「お……お、ま、え、なー……」
「難を言えば亮介ちゃん、未だに『冴子ちゃん』と『冴子さん』が混乱するのよねー。今度ガンと言ってやらなくちゃ」
「……」
声もなく口をぱくぱくさせて、諒は再び床にころがりこんでしまう。
「馬鹿みたい」
肩ごしに見おろし、冴子が短く言った。
「亮介ちゃん、心配してるわよ。ちゃんと生きてるのかどうかって」

「うるさい。うるさいうるさいうるさい。だいたいおまえはそのよーな瑣末事で亮介の貴重な時間をわずらわせるとは何事なのだ。それはとってもいけないことだと俺は思います。天が許してもこの俺が許しませんのことですよ」
「……羨ましいなら羨ましいって言えばいいのに」
「ずるいと言うておるのだ俺はっ！」
「同じことでしょ結局は」
「ちがーうっ！　俺は亮介の平和な学校生活の邪魔をしちゃいかんと思ってだなあ、節度というものを堅持しておるのだろうがっ。それにひきかえおまえという奴はっ。もう、おまえ亮介に電話しちゃだめっ。絶対だめっ。だめだめだめっ」
「すでに理性というものを失ってるわね」
ごろごろと諒は床をころがりまわっている。冴子が冷ややかに呟いた。
湯が沸いてカタカタと鍋のふたが音をたてた。
近くのスーパーで買ってきたらしい袋をかきまわして、冴子は卵と缶詰をとり出す。
「本当に、どうしていつもそういう小さなことにガチガチこだわるのかしらね。あんたといい亮介ちゃんといい」
「こだわりのA型だからであろうか」
「血液型に責任転嫁してどーすんのよ」

「冷静に分析しただけでしょうがっ」

冴子に歯をむいてみせ、諒は本日何度目かのため息をついた。

働けど働けどなおわが暮らし楽にならざり、じっと手を見る、の心境である。今日は何やらとっても疲れた。仕事というのもいろいろと大変なものである。

冴子は鍋にあれやこれやとにぎやかに放りこみ、あやしげなラーメンを作っている。

「……今度の仕事が終わったら、さ」

コンロの火が消える頃に、諒がぽつりと言った。

「電話。しようと思ってたりする」

「そう。いいんじゃない？」

冴子の背中が答える。

「だいたい電話なんて、かけたい時にかけるもんじゃないの、普通は」

「慣れてないんですよ。……友達いなかったから。俺は」

ころがったまま諒はひらひらと手を振った。冴子が沈黙した。

こんな仕事をはじめて以来。

いろいろな土地でさまざまな人に出会い、仲良くなった人もいたけれど。

仕事が終われば、彼らとはもう関わりを失う。それが今までの不文律だった。そのほうがお互いのためだから。自分と彼らとは、どうしたって住む世界がちがうから。そうとでも思って

いなければ、出会いと別れは重すぎるから。

帰るところなど、自分にはなくて。だから沢山の人の記憶の中に、ただ一条の軌跡を描いてすりぬけていくような生き方なら……幸せかもしれないと。自分には似合いかもしれないと。信じていた。亮介に会うまでは。

「亮介って、すごいなあ。何がすごいのかわかんないけどすごいなあ」

あらためて諒は呟いた。

きっと理屈じゃないのだ。亮介がどうして自分を惹きつけたのか。本当はきっと理由なんてないのだ。

ただわかるのは、彼のおかげで何かが決定的に変わったということ。

「要するに、根本的なところではそっくりなのよね、あんたたちって」

ちゃぶ台にざぶとんを引きよせ、冴子が言う。どんぶりを置く音。

「そうかあ?」

「本人たち自覚してないけど」

「……A型だからであろうか」

「進歩のない奴だわね」

うーむ、と諒は唸った。自分ではわからない。

「食べないの?」

「は？」
唐突に言われて身を起こす。冴子はもう自分のラーメンに箸をつけていた。
「あら。俺の分もあるわけ？」
「ひとり分作ったっておいしくないじゃないのよ」
「そうであったのか。では遠慮なく」
古ぼけたちゃぶ台に向かいあわせに座って、しばしふたりして食事に専念する。
ややあって。
「今度の学校、大変そう？」
ぽつりと、冴子が訊いた。
「まだ見当はつかないが、とりあえず難関がふたつほど」
ぼそぼそと諒が答える。
「なるほどね」
「まずはお勉強を頑張らないことにはどうにもなりませんな」
「昔とった杵づかで、なんとかなるんじゃないの」
「やってみないことにはなんとも」
「バンクする前に、しっかり亮介ちゃんに逃げなさいね」
「逃げないために頑張っとるんでしょうが」

「またすぐそういう方向に走る……」
「逃げるのは駄目です、逃げるのは」
ひとしきりそんな会話を淡々と続けたのちに、どんぶりを空にして冴子が立ち上がった。
「それじゃ、あたし帰るわ」
「……おまえ、本当に何しに来たわけ？」
思い出したように諒が尋ねる。
ハーフコートを肩からかけ、玄関先で冴子は振りむいた。
座ったまま諒は見上げている
冴子は少し間をおいた。
真顔と沈黙。
感情を含まない表情。
そのまま。
「言ったでしょ。電話とラーメンって」
まじめな口調で言い、ウェーブの髪をなびかせてドアの向こうに姿を消す。
静かに閉まったドアを眺めて、諒は微妙な——淡い、瞳でくりかえした。
「電話とラーメン、ねえ……」

☆

木曜日の朝、職員室の前の廊下は生徒たちの群れでごったがえしていた。先日の実力テストの結果が発表されているのである。お祭りさわぎだな、と集団の端のほうで諒は感心した。この時ばかりはここの生徒もみんな元気だ。

「あっ、失礼――」

誰かと肩が当たった。見ると、記憶にある顔である。

「大月さん、でしたっけ」

同じクラスの、眼鏡の似合う彼だ。話しかけると、彼のほうはクラス内でちゃんと諒の存在を認識していたらしく、ああ、と軽い笑顔を見せた。

「水沢、だったな」

「憶えててもらえて嬉しい。えへへへ」

「印象的だからな、君は」

大月雄二の名は、見事、総合順位の一位に輝いていた。

「すごいですねえ」

素直に感嘆して、諒が言う。

「まあね。それだけ勉強したから」

謙遜もせず大月雄二はあっさりと答えた。まぐれだよ、とか、俺なんか全然だめだよ、式の言い訳ならよく聞くが、この手のセリフを自信満々で言われると、かえって気持ちがいい。

（カッコいい人だなあっ）

自分を卑下しない実力者というのも、概して好みのタイプである。

「大月さんっ。ファンになってもいいですか？」

「え？」

一方で諒自身はどうだったのかといえば、嘘のようだがなんとか五十番以内には食いこんで、一応体面を保ってはいた。英語は壊滅状態だったが、かつての優等生の得意ワザはなんと数学だったりしたのである。まったくもって嘘のようである。

「あ」

大月がふと顔色を変えた。

「峰岸！」

はっ、と廊下の少し先でふりむいた少年も、大月の姿を認めたとたんに苦い顔になる。人込みの中、わずかな距離をおいて、ふたりは互いに言葉もなく視線だけを交わしていた。大月のほうには責めるような色がある。何かあったな、と後ろから諒はそれを眺めた。ざわざわと生徒の声。

峰岸と呼ばれた少年が、くっと唇を噛みしめた。

「……笑えばいいだろう」

一言、それだけ言うと踵をかえし、足早に去っていく。大月は追うことはせず、黙ったまま

それを見送った。

「なんです？」

さりげなく諒が問いかけた。大月が振りかえる。

「ああ、つまり……」

複雑な表情で成績発表の掲示に目をやる。

「見ろよ、あいつ百番以内にも入っていないだろう。ついこの前まで、俺とトップを争っていたくせにだぜ……」

「ライバル、ですか」

「こんな崩れ方をする奴だとは思ってなかったよ。まったく見損なった」

醜態だ、と吐き出すように大月は言う。

（な……なんか、ハードな世界だ……）

これもまたひとつの「男の戦い」ということだろうか。怖いなあ、と諒は胸のうちで呟いた。

（――待てよ）

ふと引っかかって、鋭い目を掲示に向ける。

「大月さん……そういう風に上位から脱落する人って、めずらしいんですか？」

「いや、それがそうじゃないんだ。最近は特にひどいみたいだな。みんなどうかしてるよ」

「はあ、なるほど」

最近は特に、というあたりがどうも暗示的だ。諒は両眼を細めた。もしかするとこの「成績」は、どこかでキーになっているのかもしれない。

（……しかしこれがどこでどう〈妖の者〉にたどりつくのやら）

この程度の材料ではまだ見通しは全然たたない。諒は成績優秀者の名を頭の中にたたきこみながら、何やら空しい気分に襲われていた。

（この仕事、ずーっと長引いたらどうしよう……）

☆

ところが、である。

その日の五時間目が数学の時間だった。担当はもちろん、山口美夜である。

教壇に立つと、あの山口美夜も教師としての本能に目覚めるのか、なかなか歯切れの良い授業をする。これだから人間はわからないのだ、と代数幾何の教科書で顔をかくして諒は考えた。頼むから色目を送ってこないでほしい。

うんざりするほど高度に内容の充実した授業が、終盤に近づいたころだった。

「……わかりません」

指名を受けて、そんな発言をかえした者がいた。滅多に私語も起こらぬ教室が、その時ばかりは大きくざわめいた。

それが大月雄二だったからである。

「どこがわからないのよ、大月君。この程度の問題、今までの授業しっかり聞いてたらバカでもわかるわよ」

チョークのついた指をはらいながら、山口美夜が重ねて尋ねる。

「全部、です」

痛恨の返答。諒の席からは彼の表情をはっきりととらえることはできなかったが、しかしその肩が小刻みに震えているのは明らかだった。

「大月君。あなたあたしの授業をなんだと思ってるの？」

「……すみません」

「出ていってよろしい」

ぴしゃりと、このうえもなく厳しく山口美夜は言い放った。彼女も立派に進学校の教師なのだ。言われた通り、大月はゆらりと席を立ち上がった。

「すみませんでした」

頭を下げ、力のない足取りで教室の外へ出ていく。

諒は隣の席の深田充と顔を見合わせた。充も全く信じられないという顔をしている。

「ほらほら時間の無駄よ。次の人いくわよ」

山口美夜だけは堂々とした態度で、かまわず授業を再開した。さすがだな、とひそかに諒は皮肉まじりの感想を抱いた。やっぱりちゃんと「先生」だったわけだ。

それにしても大月雄二のことが気になる。数時間前の彼は、いったいどこに消えたというのか。

授業が終わると同時に、諒は席を立った。山口美夜はまだ教壇で生徒の質問に答えている。彼女の目につかないように机のかげにしゃがみこんで、隣の深田充に手まねきした。

「深田君、俺ちょっと大月さんに用があるので、もし六時間目に間に合わなかったら気分悪くて保健室ということにしといてくれます？」

「え、大月？」

目をみはって充が聞きかえした。

「うん、俺あの人のファンなので。なんてね。どこにいるか心当たりないですか」

「……いや」

「そうか、そりゃそうですね。まあいいや。ではね」

こそこそと身をかがめたまま諒は机の間をすりぬけてドアへ向かう。充がふと片手をあげて口許を覆った。

「そういえば、あの……」

「え？」

ドアの手前で諒が振りかえる。

何か言いかけて、思いなおしたように充は手を振った。

「いや、後でいいよ。急ぐんだろ?」

3

大月雄二の姿はなかなか見つからなかった。下駄箱に靴があるので、外に出たということはないはずだ。まさか早まったことはせんだろうな、と思いつつ……プライドの高い彼の性格を考えると少々不安でもある。

十分間の休み時間も終わるころになって、諒は階段でひとりの生徒とすれちがった。どこかで見たぞ、と思いつき急ブレーキをかける。

「峰岸さんっ——ですよね?」

振りむいたのは鋭い眼光の持ち主。

大月雄二の元ライバルだ。呼びとめたのが諒と知ると、怪訝な面持ちで問いかえした。

「誰だ?」

「いや、実は面識は全然ないんですけど」

今朝の一件を諒が後ろから見ていたことなど、彼のほうは知るよしもない。とりあえず諒は手短に事情を説明した。

「それでちょっと俺としては気になりまして。あの人の行きそうな所、知りませんか」

「……大月が」

押しころした声で、峰岸克也は呟いた。険しい表情。

何か、思いあたるところがありそうだ。

「そうか……もしかすると」

六時間目のチャイムが鳴る。気にとめる様子もなく、峰岸は一年生の教室とは逆方向へ階段を上がりはじめた。

「あの、授業、いいんですか？」

「かまわないさ」

端整な横顔で言いきる。こりゃまたカッコいい人だなあ、と諒はミーハー心で感動した。さすがは宿命のライバルである。

（そういう問題でも、ないか……）

峰岸の足は屋上へ向いていた。オーソドックスな場所ではある。

「おまえは、なんなんだ？　大月の」

「あ、ファンなんです」

「え？」

重い金属のドアを押して、ふたりは屋上のコンクリートに踏みこんだ。峰岸はそこで立ち止まり、諒に顎をしゃくってみせた。

「行けよ。用があるのはおまえだろう」
「はあ……」
そのままドアの前で峰岸は腕を組む。諒は午後の淡い日光が照らすコンクリートの向こうを眺めた。
金網を背にして、大月雄二が座りこんでいる。
歩みよって、諒はふと目を細めた。大月が顔を上げた。
「何か用かい」
その髪はぐしゃぐしゃに乱れてしまっている。諒は彼の右手に血がにじんでいるのを見つめた。コンクリートを拳で叩いたのだろう。
「……興味があるんですよ」
ぽつりと、無表情に答える。
「興味？」
キッ、と大月が見返した。かまわず諒は言葉を続けた。
「そう。興味があるんですよ、突然トップクラスから脱落する人というのに」
「！」
大月が身を起こした。くりだされた右の拳を慣れた動きで諒はかわして、手首をつかんだ。
「怪我した手で殴ったらいけませんよ。手が駄目になる。左手でならよけませんから」

「――――」
「すみません」
まじめな瞳で諒は低く言った。手首をつかまれたまま、大月はそれを黙って見上げた。
突き放すように腕を振りほどく。
「どういうつもりだ」
「嘘をつくのはいけないなあと思って」
「嘘？」
「だから正直に話しているわけです。俺はちょっと個人的に調べてることがありましてね、実は。その関連で、大月さんの身に起こった事態に興味があるんだな」
（ほら……）
言いながら、諒は胸の内で誰かに語りかけている。
（とたんに、もう……オトモダチとは違う次元の話になるだろ？）
間違いなく好きなのだけど。
そんなファン心理も、とうに「作為」のシナリオにのみこまれて。
「失礼な奴でしょ。殴っていいですよ」
「……言われて殴れるか」
大月は舌打ちした。気がぬけたように再び座りこむ。

立ち尽くしたまま諒は口を開いた。
「何があったんですか？」
「……別に何もないさ」
「何も？　本当に？」
「しつこい奴だな。とにかくわからなかったんだ。考えても頭が真っ白で何も出てこなかったんだ。それだけだ！」
どうなっちまったんだ俺は、と大月雄二は呟く。
「知りたいのはこっちのほうだよ」
「そうですね。すみません」
「いちいち謝るなよ君は！　気に障る奴だなあっ」
「やつあたりはやめろ、大月」
ドアに寄りかかってあぐらをかいていた峰岸克也が、その時になって声を投げた。
「なんだ。笑いに来たのか、おまえまで」
「馬鹿野郎、本気で言ってるのか？」
自嘲めいた大月の言葉に、冷徹な目を向ける。
「そんなことのために授業を棒に振ってくるわけがないだろう。少なくともこの俺がだ。自惚れたことを言うなよ」

「……言いやがって」
大月はかすかに笑った。峰岸は肩をすくめ、視線を諒に転じた。
「おい。水沢っていったな」
「はいはい」
「何を調べてるんだ、いったい」
「言うなれば学園にしのびよる魔性の手というやつでしょうか？」
「……麻薬か何かのことか？」
実にまっとうな反応を峰岸はかえしてくる。あえて否定も肯定もせず、諒はひらりと手を振った。
「ご想像におまかせです」
「ずるい奴だなおまえ」
「ぐさっ」
「あ、傷ついてる。もっと言ってやろう。ずるいぞずるいぞずるいぞ」
「ぐさっ。ぐさっ。ぐさっ」
「遊ぶなよ、峰岸」
呆れた風情で大月が口をはさんでくる。すでにショックは緩和されたようだ。言葉の暴力から立ちなおって、諒は彼のほうを振りむいた。

「まあそんなわけで……もう少し詳しく聞いてもいいですか？」
「詳しくと言ったって、本当に君の見たとおりで、それだけだぜ」
大月は嫌な顔をした。五時間目に席について数学の数科書を開いたときにはじめて、それまで築きあげてきた知識がズタズタになっていることに気づいたのだという。
「数学だけかと思ったらちがうんだ、今まで勉強してきたことが全部だぜ！　信じられるか!?　俺は中学生に戻っちまったのかと思ったよ、本気で……」
「俺もそうだった」
ぽつりと、峰岸が呟いた。大月が目をみはった。
「何？」
「三日前だ」
あっさりと峰岸は言い、真剣な顔を上げる。
「変だとは思わないか、こんなこと!?　誰に言っても信じてもらえるわけがない。病気と思われるならまだいいほうだ。だけど点を取れない言い訳だの逃げ口上だのととられて責められてみろ、最低だ！　他人から見ればな、憶えたことを忘れるのは当たり前なんだぜ？」
「……」
大月雄二は蒼白になって絶句してしまった。
「……そんな……。そう、だったのか……」

「まあ、恨みごとを言っていても仕方がないからな。頭そのものが駄目になったわけでもなし、遅れた分はまたこれから取り戻すしかないだろう。運が悪かったと思って俺はあきらめた」

しかし大したハンデだな、と峰岸はひとりごちた。

「するとつまり、なくなったのは勉強したことだけで、他のことに関する記憶はしっかりあるわけですね？」

諒が確認した。記憶を喰う妖者の話なら、忍から聞いたことがある。しかしこれは「記憶」とは本質の少々異なる話のようだ。

「記憶……？」

大月が眉をひそめる。

「大月、その五時間目の前は何をしていた」

思いついたように峰岸が尋ねた。

しばし考えたのちに、大月はかぶりを振った。

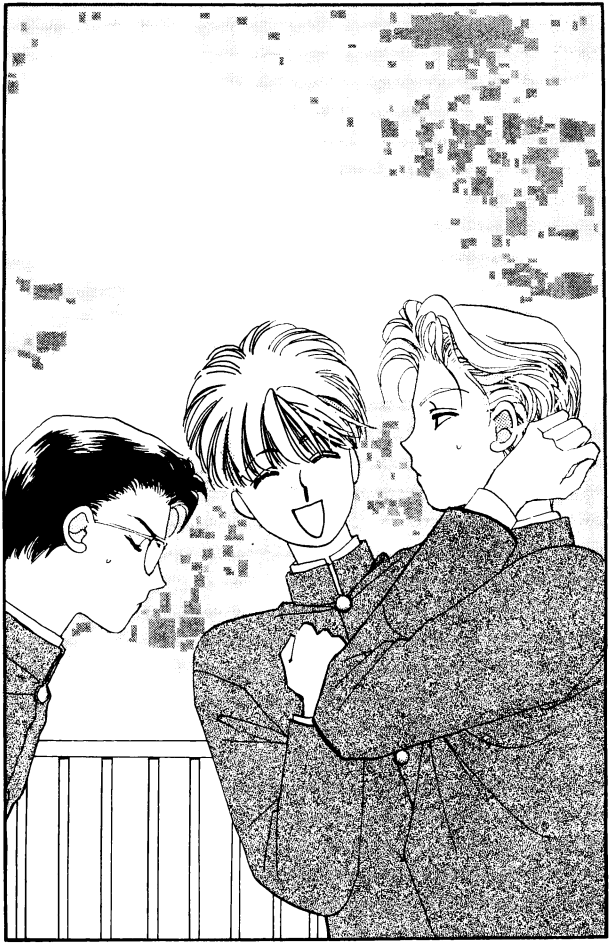
「わからない。そうだ、昼休みのことが全然……」

「やっぱりそうなのか。おい水沢、俺もそうだぜ」

「……なるほど。そのへんが鍵ですな」

諒は大きくため息をついた。材料がそろったのはいいが、結局どこまでもお勉強がらみである。さて、どうやって妖者の尻尾をさぐりあてるか。

「解決、つきそうか？」
峰岸克也が訊いてくる。
「なんとも言えませんが、とりあえずご協力に感謝」
「まあ、こちらも憂さを晴らしただけだからな。ひとりで『王様の耳はロバの耳』してるのにも飽きた」
（いい人だなあっ）
どこまでもカッコいい言動である。諒はすりすりと「神様お願いポーズ」ですりよった。
「峰岸さんっ。ファンになってもいいですか？」
「え？」
調子の狂う奴だな全く、と呟いて大月雄二が立ち上がった。乱れた髪を手ぐしで整える。
「とにかく……なかなかショックは大きいんだけど……また一からやりなおすしかないんだろうな」
「受験直前なんかじゃなくて、むしろ助かっただろう」
峰岸もよいしょ、と腰をあげる。
「そうだな……峰岸と同じハンデと考えれば、まあ……やる以外ないだろうし……」
「親切なライバルだな、俺も」
「なんかふたりだけでわかりあっちゃってますねえ。諒ちゃん淋しい。しくしくしく」



はずれ者の悲哀に泣いている諒の背中を、峰岸克也は勢いよく叩いた。
「泣いてないで頑張るんだな、ホームズ君」
「うーん……行くぞっ亮介っ、というわけにいかないからなー……」

☆

「ここ半年の実力テストの問題？　そんなのいちいち保存してあったかしら」
わざわざ赤い爪で悩ましく髪をかきあげながら、山口美夜はいい加減なことを答える。例によって場所は数学準備室である。とにかく職員室に居つかない教師なのだ、彼女は。
「そこをなんとかなりませんか」
できるだけここには近寄りたくなかったのだが、他に手がなかったから仕方ない。山口美夜からとれるだけの距離をとって、諒は神妙な顔で頼みこんだ。
「そんなに熱心に勉強してどーするのかしら。もっと青春をエンジョイしなきゃ駄目、よ」
「言ってることが授業中と全然ちがいますよ、先生……」
「あら、あれは生徒に言ってるんでしょ。今は、水沢君に言ってるんでしょ。男と女の会話よねー」
「それが困るというのにっ」
実を言うと現在はまだ六時間目の最中である。思いたったらなんとやらで屋上からまっすぐここへ来てしまったのだが、それを全く咎めないあたり、つくづく二重人格というかなんとい

うか。
「そうねえ……ほら、資料室にパソコンがあるじゃない。あれに入力してあるんじゃない？」
「そんなもん勝手に使ったら叱られませんか」
「叱られるわよねえ、やっぱり」
「先生……」
山口美夜はデスクの引きだしに詰まったファイルをばたばたとかきまわしていたが、結局あきらめて引きだしを蹴りこんだ。
「やめやめ。そんなもん律義にとっとく人いないわよ」
「しかし転入生としては今までのテストの傾向と対策について研究しておきたい、という熱意は認めていただけますでしょ？」
「ドがつくマジメなのね。そういうタイプも好きだけど」
ふう、とため息をついてパイプ椅子に脚を組む。これ見よがしのミニスカートである。
「まあ、水沢君の頼みなら仕方ないわね。女ってつらいわ……」
「ははははは」
ひきつったまま諒は乾いた声で笑った。ぎん、と山口美夜が強い目を上げた。
「ただでとは言わないわよ」
「う」

思いきり喉をつまらせる。
山口美夜はデスクのペンスタンドから鍵を一本とりだした。資料室のキーである。
目の高さにあげて、ほらほら、と振ってみせた。
「貸してほしいでしょ？」
「……はあ」
眉をひそめながら諒が答える。
勝ち誇ったように山口美夜は胸をそらした。
「貸してほしかったらキスしなさい」
「げっ」
「げっ、じゃないでしょう、失礼ねえ」
「ちょっと、それとんでもないですよ先生……」
思わずドアの所まで跳びさがって諒は情けない声を出した。
「あたし本気よ」
正気とは思われぬ目を据えて、山口美夜が言い放つ。
「べつにこのキーほしくなければ、それでいいけどー？」
「……」
言葉が出ない。その場にしゃがみこんで諒は唸った。

多少のことは予測していたが、ここまで直截的にくるとは。
「ふうーん、いらないんだー。それじゃこんなキー、捨てちゃえー」
「せんせいーっ」
山口美夜はあぶなげなことを口走っている。本当に窓から投げ捨てかねないから怖いのだ。
「ほしいの？　ほしくないの？」
キーホルダーを掲げて、山口美夜が返答を迫った。
「……ほしいです」
ぼそぼそと諒が答える。
「ふうん、そう？」
「……」
そうである。とにかく、そのキーがなければ今後の仕事が進行しないのである。
ほしいのはもちろん過去の試験問題などではなくて、試験結果のほうだ。この学校では生徒の成績を全部コンピューター管理している。狙い目はそこである。今までの犠牲者を分析し、次のターゲットになりそうな生徒をチェックして集中的にガードするしか、謎にせまる手はないだろう。しかし生徒の成績表を下さいと言って素直にくれる学校などあるわけがない。
（仕事、仕事……）
ぜーはー、と息をついて諒は額を押さえた。どうしたものか。

だいたい、山口美夜のとんでもない性格を利用しようと決めた時点で、この程度のリスクは覚悟していたはずなのだ。そうといったらそうなのだ。利用しておいて見返りのひとつもなしというのも、ずいぶんと虫のいい話ではないか。

（し、しかし……）

ちらり、と諒は視線を上げた。

姿勢を変えぬまま、山口美夜はこちらに目を向けている。

（仕事、仕事……）

はあ、と大きなため息をひとつ。

なんといってもメシの種。

（仕事、仕事……）

呪文のようにくりかえして、のそのそと立ち上がる。

誰かさんの顔が脳裏をかすめた。

（だから仕事だってば！）

しかしそんな言い訳が通用する相手だろうか。考えるだにおそろしい。

まあ、誰が見ているというわけでもないのだから……知られることも、多分、いやきっと、おそらく絶対、ないだろう、などと。

己に言い聞かせたりして。

歩を踏み出す。結界を破るような努力で、手のとどく所までじりじりと近づいた。
目の前で揺れているキーホルダーと、白い指。
（バレなきゃいいんだ、バレなきゃ）
果てしなく後ろむきの考えになって深呼吸する。力ずくで奪いとる、という発想はさすがに出てこないし。
自分も男だし。
山口美夜は女王様のようにパイプ椅子に君臨している。
今さら引きさがれるか？
（――それでもバレたらどうしよう）
ふっ、と身をかがめた瞬間、最悪の想像をしてしまった。一斉に血の気がひいた。
空いているほうの白い手をとり、その甲に軽く口づける。
やはりこれが限度である。
「だめ？」
目を上げて、哀れっぽく諒は尋ねた。
きょとんとして山口美夜はそれを見つめかえした。
「――ばかねえ」
けたけたと笑いだす。ぴしゃり、と痛くない平手が鍵ごと頬にとんできた。

「持っていきなさいよ。もうすぐ授業が終わるでしょ」
「……恐縮です」
なんとも複雑な表情のまま諒は鍵を受けとり、部屋を出た。山口美夜はいつまでもけらけらと笑っていた。

☆

「見たわよ」
「どわっ!!」
耳元でいきなり聞きなれた声がボソッと呟き、諒は再び数メートル廊下を跳びさがった。
幽霊に遭遇したかのような顔であわあわとうろたえる。
「さ、冴子さん……」
「見たわよ」
セーラー服の腕を組み、冴子はくりかえした。なんのことを言っているかは明白である。
何か言おうとして諒はハッと我にかえり、冴子の腕をつかんで階段のほうへ引っぱりこんだ。ここは男子校なのだ。
「な、何やってんだおまえは!?」
「単なるヒマつぶしよ」
「お、お、おまえな、こんなところ誰かに見られたらだな」

「適当にフォローするわよ。だいたい授業中の学校なんて無人と同じでしょ」
やけにしらじらと冴子は答え、諒はがっくりと頭を抱えた。なんというか、実にまったく文句なしに素晴らしいタイミングである。もはや何を言えというのか。
「……察するに、ものすごくヒマのようだが」
「泣けてくるほどヒマだわね」
「心底うらやましいですよ、俺は」
「楽しそうにやってるじゃないのよ」
「そんなことはないっ！　それはものすごくおそろしい誤解だっ!!」
「目が見たわよあたしの目がっ！　どこが楽しくないっていうの、え!?」
はりあげた声が階段に反響し、ぎょっとしてふたりとも口をつぐむ。
十秒間の沈黙。
「……とにかく」
声を抑えて諒が切り出した。
「もう少しで授業が終わるから、ここにいるのはとってもまずいと思うぞ」
「わかってるけど、あんまりヒマだから帰りたくないのよ」
「それはもしかしてワガママと言わないか？」
「ちがうでしょ？　手伝ってあげようというありがたい申し出でしょ？　――その鍵あずかっ

とくわよ」

勝手に決めつけたと思うと、冴子は資料室のキーを奪い取ってくるりと背を向けた。すたすたと階段をおりはじめる。

「あたし資料室にたてこもってるから、人気のなくなった頃に助けに来てよね」

「あのなあ……」

「忘れたら承知しないわよ」

振りむきもせずに言い、階段の向こうに冴子は姿を消した。校内の配置を憶えているあたり……けっこう頻繁に出入りしていたのではなかろうか。

(これだから……)

油断もスキもない。肩を落として諒は一年二組の教室へと向かった。とりあえずパソコンは冴子に任せる。

そういえば深田充が何か言いたそうだったな、と今になって思い出した。チャイムと同時に教室にすべりこむ。大月雄二はまだ戻っていなかった。

「深田君、さっきはどうも」

席に着いて声をかけたら、びくっとして充が振りむいた。

「え?」

知らない者を見るような目を向ける。

「……さっき、言いかけたことがありましたでしょ」
苦い予感を覚えつつ諒は確認した。充はまじまじと諒を見つめ、それからかぶりを振った。
「さあ……わからないな」
そのまま自分のノートに向きなおって、もう諒のことなど忘れたように勉学に集中している。言葉を失い、諒はほぞを噛んだ。
（畜生、やられた！――）

4

「変じゃない、それって」
冴子が目をみはった。
「そんなことは言われなくてもわかっておるのだ」
憮然として諒が答える。四畳半のアパートに戻っての会話である。
「つまり今の話を総合すると、あれよね、今あの学校では、大月さんとか峰岸さんみたいに『お勉強ができなくなる人』と、深田君みたいに『態度を急変させる人』の二通りの現象が起きてることになるわね」
「しかしいつの間に」

苦々しげに諒は呟いた。

五時間目の終わりに諒と別れてから、ほんの一時間たらずのうちに深田充はなんらかの意識操作を受け、人格を一変させてしまったのだ。

あのとき彼が言おうとしたことをその場で聞いておかなかったのは大失敗だった。あれはきっと重要な手がかりだったのに。今さら言ってもどうにもならないが。

「それにしても、この件に〈妖の者〉が絡んでるとして、その妖者の目的ってなんなのかしらね」

「目的ねえ……。ライバルを蹴落として自分が一番になろう、というのが妥当な線だろうか」

「だとしたらプライドのない奴だわね。そんなこと妖者の力に頼ってどうすんのかしら」

「傷つくことを言わんでくれないか」

ぼそりと諒が言う。ばらばらと成績順位表をめくっていた冴子の手が、止まった。

沈黙に気づいて諒が目を上げる。

「どうかしましたか冴子さん」

「あんたってやな奴……」

ため息をついて冴子は作業を再開する。

首尾よく成績のデータを入手したはいいが、その分析のほうはなかなか大変な作業だった。

考えてみたら〈妖の者〉の介入などなくても、成績というものは変動して当然なのである。

「良心の呵責があるわね、他人の点数見るのも」
「赤の他人なら、まだ許されるんじゃないか？」
だから冴子に任せているのだ、と主張して諒はごろごろと怠けている。冷ややかな目を向けつつも、冴子は口に出して責めることはしなかった。
「めんどくさいわね……」
ひととおり目を通したのちに、冴子が口を開いた。
「なんの変動もなく上位グループを形成してる連中も沢山いるし、次に狙われそう、という候補者ってどんなに絞りこんでも十人以上いるわよ」
「がーん」
ころがったまま天井を仰ぎ、諒が唸る。
「それでは密着ガードするにもムリがあるなあ」
「トップグループから落ちてる人も何人かいるけど、一位をとる人が必ずしもそうってわけじゃないし、規則性がないのよねー」
「行き当たりばったりでやっとるのか……」
方針を変更しなければならないだろうか。諒は身を起こし、ちゃぶ台の上に広げられた紙の束を眺めた。
「せっかくあれだけ苦労して手に入れたというのに」

「そうね。ほんっとに、ものっすごく、苦労して手に入れたのよね」

とたんに冴子の台詞に無数のトゲが発生する。ごほごほ、と諒はわざとらしく咳こんだ。願わくば早く忘れてほしい。

「いやあ、仕事って、大変だなあ。やはりプロフェッショナルの責任というやつだなあ」

「役得もいっぱいあるんでしょ、どうせ」

「そんなもんたまにしかないわい」

「たまになら何があるっていうわけ!?」

「おまえ本当に俺という人間を誤解してはいないか!?」

不毛な会話である。

ぐしゃぐしゃと髪をかきまわし、うーむ、と諒は考えこんだ。遊んでいる場合ではないのだ。

十人を下らない『候補者』の周辺に地道に目を光らせる、というのもひとつの手ではあるが、それだけでは本当にタイミングの勝負になってしまって、いつ核心に踏みこめるやら、ずいぶん気の長い話になってしまう。

「期末試験って、いつだったかしら」

思い出したように冴子が訊いた。

「ちょっと待て。……あと十日」

指折り数えて、諒が答える。
「ねえ、それってまずいんじゃない？　試験が終わったら冬休みになるわよ」
「あ？」
「学校、ないわよ。ここで年越しするつもり？」
「――げっ。そ、そうかっ」
はたと諒は事態を悟った。あと十日の内に解決をつけないと、休みに入ったらテストもなければ順位発表もない。状況を停滞させたまま無為に正月を迎えるということになってしまう。
東京がずんどこ遠ざかってゆく。
「ど、どうしよう」
これは本気で頭を抱える。仕事の終わらないうちにその土地を離れる、というのは責任感が許さないし、何より忍との信用問題にかかわる。
少しだけ考えて、冴子がおもむろに目を上げた。
「ターゲットをガードしようと思うから面倒くさくなるのよね」
「……しかしそれ以外どうしろと言うのだ」
「自分がターゲットになっちゃえば？」
冴子はそんなことを言い、頬杖をつく。唖然として諒はその顔をまじまじと見つめかえした。

「おい……それはつまり要するに」
「期末試験に照準を合わせるとして、あと十日でしょ。駄目モトと考えても……ちょうど名門校からの転入生というふれこみになってるし、前回の実力テストは一応見られる成績とってるし、ここで一気にトップに出たら注目ひくわよねえ……あ、すごくいいかもしんない」
「おいこら！　それは本当に実現可能だと思って言ってるのか!?」
期末試験で一位の成績をあげろと冴子は言っているのである。
ただでさえ全校生徒が本腰を入れて取りくむ期末試験だ。新参者に何ができるはずもない。
諒は血相を変えた。
「言っとくけどな、やるのは俺だぞ、俺」
「達成の暁には亮介ちゃん、とでも念じて頑張るのね」
「た……達成したら亮介……。いや待てしかし」
「まあ、本来のガード作戦の、補強案くらいに考えてやってみても損はないと思うんだけど」
他人事だと思って冴子は簡単に言ってくれる。
なんでよりによって男子校なのだ、今回は。諒は低く呻いた。共学だったら冴子に押しつけるのに。
「ちょっと！　やる気あるの？　ないの？」
ぶつぶつ言っている諒に、勢いよく冴子がちゃぶ台を叩いた。

「あんたの亮介ちゃんに対する熱意ってその程度なのね。ふうん、あっ、そーお」
「問題をすりかえるな、こら」
「話をまぜかえさないでよ」
「どっちがだっ」
「うるさいわね、なせばなる、やってやれないことはない、鳴かせてみせろホトトギスって言うでしょ!?　やりもしないで諦めるなんて、あんたそれでも男なのっ!?」
すでに理屈など、どこか遠い所へすっとんでしまっている。
もしかして、と諒は背中に冷たいものを感じた。これは山口美夜の一件が尾を引きずってこういうことになっているのではないか。
ばん、とちゃぶ台に片手をついて冴子が身をのりだした。
「ごはん作ってあげないわよ」
「……やればいいんでしょ、やれば」
どうにでもなれ、と諒はそのまま床にころがりこんだ。

☆

編入してくる以前の授業のノートを貸してもらえないか、と頼んだら、大月雄二は快くコピーを許してくれた。本当だったらこんなこと、クラスの誰にもOKしないんだぜ、としっかり恩も売ってくれたが。

なんにしてもありがたいことである。

「英語については、あたしが必勝のノートを作ってあげるから」

本格的に取りくむ構えで、冴子はそう宣言した。

「やっぱりポイントは数学よね。あんた途中式すっとばして答えだけ書くのやめなさいよ。点もらえないわよ」

「だって答えしかわからないんだもん」

「カンだけで数学やらないでよっ。それだから証明問題が駄目なんでしょっ、もうっ」

何やら生活がこの手の会話だけで埋め尽くされている。三日目に突入して、諒は今からげんなりと疲れていた。

学校では成績優秀者の動向に気を配り、部屋に戻ると試験勉強漬けである。冴子は近くのホテルにでも宿をとっているのか、夜も更けると一応帰っていくのだが、この調子でいくと徹夜態勢もそう遠い日のことではないように思えた。悪夢だ。

「ほんっとーに、ヒマなんじゃのー」

冴子を見ていると、ついこんな台詞が出てくる。

「あたし向きの仕事が入ってこないんだから、仕方ないじゃないのよ」

この時ばかりは不機嫌に冴子が答えた。彼女向き、というのは概して女子校方面の仕事である。

「それもきっと忍の陰謀なんだ。この世のすべてが忍の陰謀なんだ。忍様のばかばかばか……」

「ちょっと、なんてこと言うのよあんたはっ」

冴子の罵声を教科書をかぶってやりすごし、諒は世界史のノートに改めて没頭した。

こんなに勉強したのは、本当に久しぶりである。一時期は教科書の類を正視することもできなかったのに、こうして大真面目に勉学に集中する日が再び来るとは思っていなかった。人生とは不思議なものである。

人を押しのけて上へ行こうとする心だけに胸を占められていた日々は、もう一年以上昔のことで。そんなことのためだけに勉強を利用していたあの頃は、ただ耐えがたく辛かったのだけれど。

「百年戦争の詳述……？」

えーとと、シャーペンを握りしめて考えこむ。

ちゃぶ台に頭を押しつけてうんうん唸っていたら、冴子が少しだけ表情をあらためた。

「……できる範囲でやればいいんだからね」

無理をしてまでやることはない、ということだ。姿勢を変えぬまま、諒は目だけを上げて冴子を見る。

「やる時はやるぞ、諒ちゃんは」

「あ、そう」
「誉めてくれたまえ」
「成果によるわね」
涼の神経に悪い影響は出ていないことを確認し、冴子はまた元の冷ややかな態度をとりもどす。床に積まれた参考書をひっくりかえしながら、涼はひとつのことに気づいていた。
自分には、こんな風に誰かと一緒に勉強する、ということがほとんどなかったのだ。
そして、ライバルと認め合うような相手もなくて。
まわりのものはすべて敵。きっと自分はそんな目をしていた。あれは人間相手の競争じゃなかったのだ。
大月や峰岸の余裕は、そんな自分との違いを如実に語っている。
「しかし序列というのはやはり残酷だよなあ」
ぽつりと涼が呟く。冴子が辞書から顔を上げた。
「でも人間なんてそれぞれ違うんだから、順番なんていくらでもつけられるもんじゃないの？百メートル走でも早食い競争でも順番は決まるわよ。要は本人がそれにどれだけの価値をおくかでしょ」
「価値、ですか」
「本人が数学で一位になることに価値をおいてるからこそ、一位になったら嬉しいわけだし、

大したことじゃないと思ってれば大したことじゃなくなるわよ。問題はその『価値』を自分じゃなくて他人に決められてるところにあるんじゃないの？」

さらに、ひとつのことだけに価値をおくから視野が狭くなる。

人間である以上、他の誰かより優る面や劣る面がそれぞれにあるのは当然なのだ。しかしその一面だけで人格の価値そのものに上下が生まれるはずはない。

そのような意味のことを冴子は言った。諒は指を組んでひじをつき、しみじみと頷く。

「なるほどねえ。諒ちゃんまたひとつ利口になってしまったよ」

「そうおちゃらけて言われるとなんかバカなことを言ったような気がしてくるわ……」

ため息をついて冴子は時計に目をやり、立ち上がった。

「夜食作るわね」

「至れり尽くせりで涙が出てきますね」

「言っとくけどあんたのためじゃないわよ！　ヒマだからやってるのよ！」

「はあ……」

釘を刺すことだけは忘れていない。諒は首をすくめてお勉強に舞い戻った。

「冴子」

ふと思いついたように、目はノートに向けたままで口を開く。

「何よ」

「お前さんいてくれて、助かったわ」
冴子が振りかえった。
諒は無表情にしこしことシャーペンを動かしている。
両眼を細め、冴子はどかんと鍋をコンロの上に据えた。
「だからもうラーメンはやめて違うもの作れとか言うんでしょ」
「ど、どうしてわかったんだろう」

☆

冴子の作ったスケジュールに合わせてノルマをこなしていくうちに、つきつめてやってみると勉強というのもなかなか面白い作業なのだ、という発見があった。
知らなかったことを知る、というのは基本的にどんなことでも面白いはずなのだ。アイドルのことにせよ車のことにせよ、知識が増えるのは楽しい。どうして「勉強」という名がついた途端につまらなそうな印象を抱いてしまうのか。
(強制されてやるからだろうか……)
いろいろと複雑な問題だ。まれに見る勤勉さで問題集と格闘しながら諒は漠然と考えた。
大体、いつもは他にやることが沢山ありすぎて、ここまで集中して勉強なんかしない。だから気づかないのだろうか。
あるいは逆に、勉強しかやることがない状況に追いやられたものだから、やむにやまれずそ

こに楽しみを見出そうとしているのだろうか。
なんにせよ、いつの間にか諒がかなりの純粋さで勉強をしていたということは確かなのである。

5

四日間の期末試験をこなしてから三日後に、成績発表というものが行われる。
いつも通りに登校したら、下駄箱に紙切れが一枚入っていた。手紙、らしい。
(?)
まさか男子校でラブレターはないでしょうね、と諒がひきつりながらそれに指をのばした時だった。
「よう」
昇降口を通りがかった峰岸克也が、諒の姿に気づいて声をかけてきた。
「やりやがったじゃないか」
「は?」
「四位、だぜ」
わからずにいる諒に人差し指を向けて、そう言う。

下駄箱に手を入れたポーズのままで、諒はしばし石のように静止していた。
「うわあお」
「タイミングはずす奴だな、おまえ……」
我にかえって悲鳴をあげる。峰岸克也には呆れられてしまった。
十日間やそこらの詰めこみ作業で何ができるわけでもない、と信じていたのである。こんなにうまく話が進んでいいのだろうか。まさか十位以内に食いこむとは。
しかしさすがに冴子の作戦は無理があったようである。一位、というのはそう簡単に取れたものではないのだ、やはり。
(これは年越し、かな……)
やるだけやったから、心はさっぱりしている。まあ仕方ないよね、と呟いて問題の紙切れを開き、諒はふと厳しい目になった。

☆

「失礼しまーす……」
そろそろと諒は数学準備室のドアを開いた。夕刻のことだ。ほとんどの生徒がもう下校した後である。
西向きの窓からは、朱色に染まった夕陽がまっすぐに射しこんでいた。
「いらっしゃーい」

デスクから向きなおったのは、言うまでもなく山口美夜である。いつ来てもこの部屋は彼女ひとりに占領されている。他の数学教師は何をしているのであろう。

「なーにボサッと突っ立ってんの、よっ。こっちいらっしゃいよ」

赤い爪の手招き。ドアを閉め、諒は窓際の彼女のデスクまで歩みよった。

「あのですね、先生……」

「あらちょっと、何マジメな顔してるのよ。いつになく凛々しいわよ」

「いや、あの……」

「惚れなおしちゃうわね。ねえ、あたし本気で水沢君のこと好きなのよ。おフザケじゃないのよ。そのへんわかってくれてるかしら」

そんなことを言って山口美夜はパイプ椅子から立ち上がる。瞬間、きらりと、両の瞳に走る輝き。

その瞳を見おろして、諒は低い声で尋ねる。

「呼び出したのは、それを言うためですか」

「そうよ」

ぐい、と諒の襟元を片手で摑んで、山口美夜はにっこりと笑った。

「楽しいことしましょうねって、言ったでしょ」

「その手で何人の生徒を泣かせてきたんでしょうか」

「傷つくことを言ってくれるわね」
さして傷ついているとも思えぬ笑顔で涼の身を引き寄せる。涼は抗わなかった。瞳と瞳。
「催眠誘導ですね」
「あらやだ、知ってたの」
ぽつりと言った涼の台詞に、あっけらかんと山口美夜が答える。
とらえたが最後、視線を外すことを許さぬその双眸。超常的な力がそこには働いている。
「俺もけっこう先生のことは好きなんですが」
見つめあったまま涼が口を開いた。
「でも先生が好きなのは、俺よりも俺の頭の中身のほうらしいですね」
「教師の鑑でしょ？」
「世の教師が気を悪くしますよ、それでは」
周囲の机や本棚が視界から消えた。
窓から降る朱色の光だけが、その空間に留まることを許されている。
「いい点取ったからってすぐに手を出してくるあたり、やり口が安直ではないですか？」
「あら、前々から美味しそうだと思って狙ってたのよ。優秀な人材だってことは、水沢君が来た時からわかっていたものね」
しかし何もこんなに、打てば響くように誘いをかけてこなくても良いではないか。涼は内心

で苦く呟いた。

集中して蓄積した知識。なんと呼べば良いのだろうか。記憶、というよりは——学究的成果とでもいうのか。

とにかくそんな「意識」を喰って生きる〈妖の者〉。確かに進学校に根を張るのは納得がいくというものだ。それも教師という立場であれば情報にも事欠かず、よりどりみどり食い放題であろう。

「すると深田君はさしずめ目撃者ですか」

「よくわかるわねえ。あの人、大月君がこの部屋に入るのを見てたらしいのよ。だから忘れてもらったの」

そちらの方は「食べた」わけではなさそうだ。術をかけた者が倒れれば解ける類の、意識操作のはずである。

あの五時間目のあと諒が教室を出ていく際のやりとりを、教壇から山口美夜は注視していたのだ。そして深田充の様子に気づき、その場で手を下したのだろう。

「そんなに難しく考えることないじゃないのよ。別に頭からとって食うわけじゃないんだし」

艶然と笑って山口美夜が言う。ゆらりとその姿が揺れた。

「ちょっとの間、気持ちよくしてあげるだけじゃない？」

白い歯が光る。

視線の直撃。

「！」

無重力世界に放りこまれたような浮遊感がやってきた。

透明な虹。からみつく極彩色。音をたてて流れる空気。

爪先からじりじりと熱が上る。目に見えぬ手が全身を拘束して真綿のように包みこむ。痺れが走る。

耳元で呼吸の音。

首筋に指の感触。

視界に映るのは、濡れてきらめく一対の瞳だけだ。

時間が回転した。諒は瞼を閉じた。意識がどこかへ運ばれてゆく。感覚が溶ける。ゆっくりと、ゆっくりと……。

永遠の錯夢。

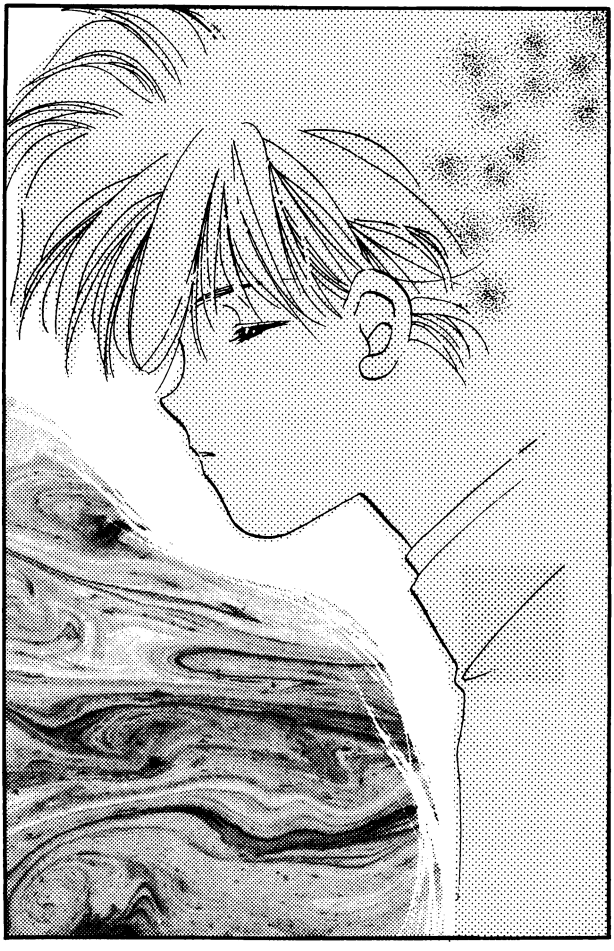
離さない。

やわらかい囁き。

どこまでも。逃がさない。ほら。

声が。

粘りつく。



息が止まる——。

「いつまでやってんのよっ」

ぴしゃんっ、と勢いよくドアが開いた。幻影が消えた。はっと息を呑んで山口美夜が後ずさる。

「おまえ本当に俺を信用しとらんなあ」

部屋の中央に立つ諒がため息をついた。なかなか楽しかったのに、などとは口が裂けても言えない。

「ど、どうして!?」

窓に背中をつけて山口美夜が叫んだ。技を破られたことが信じられないのだ。

「なんなの、あんたたち!?」

「なんなのって、そのへんの素人探偵だとでも思ってたわけ?」

このうえもなく冷ややかに冴子が言い放つ。

「諒のセリフ聞いてたらわかりそうなもんじゃないの。想像力ってものがないのかしら。術者様の言うことは、しっかり聞きなさいよねっ」

「術者——!?」

山口美夜の声が悲鳴になる。

「だから、やり口が安直だと言ったじゃないですか」

気の毒そうな目を彼女に向け、諒がそう言った。ぶん、と右腕で風を切る。〈朱雀剣〉が姿を現した。

愕然として山口美夜は朱雀の光を見つめ、それから諒に視線を転じた。

「水沢君、あなた……」

「すみません。実はこういう者なんですよ」

「実はって、あ、あなたねえ……」

泣き声。追いつめられて山口美夜は言葉を失い、がたがたと震えはじめた。

朱雀を両手で持ちなおし、諒はもう一度深いため息をついた。冴子がそれをまっすぐに見ている。

「あたしを殺すわけ?」

窓際で身をすくめたまま山口美夜が口を開いた。

自棄になったような語調。

「言っとくけどあたしは誰も殺しちゃいないわよっ!! そりゃ何十人かの意識は食べたけど、喰わなきゃ生きていけないんだから仕方がないじゃないのよっ!! どうしてあたしが封じられなきゃならないの!? え!?」

「ごめんなさい」

素直に諒は頭を下げた。本当の気持ちだった。

けれど、喰わないと生きていけないのは彼女だけではないのだ。

顔を上げる。正面から見る。

「しかし東京にも、お腹すかせて待ってる子がいるんです」

「――あ」

山口美夜が何かを言いかけた。諒の腕に力がこもった。

――光剣が一閃した。

☆

誰もいない一年二組の教室で、自分の机に頬杖をついたまま諒はしばらくの間じっと考えこんでいた。

山口美夜の存在が消滅したことについては、またいつものように忍がその莫大な財力を活かして裏工作をするのだろう。架空の事故を設定して、親類縁者のただひとりにも真相を知らせることなく。

何も封じることはないではないか、というのが身を守る術を持たぬ低級妖者たちの常の叫びだ。命を奪うわけではないのだから、せめて共存することくらいは許されないか。

〈妖の者〉に身を乗っ取られたとはいえ、その「器」本人にも親はいるし友人もいるわけで、そういった人々のことを思うと自分のやっていることは結局、正義でもなんでもない。知っているつもりではいるが、こうやって正面からそれを見せつけられるとやはり……。

「忍様に連絡しておいたわよ」
冴子が姿を現した。つかつかと歩みよってくる。
「手は打ってくれるって。それから、また後で電話してくるようにって言ってたわよ。まだまだ仕事が山積みらしいわ」
「ふうーん」
諒は気の抜けた答えをかえす。
深田充の席にどっかりと腰をおろし、冴子は顔をしかめた。
「あたしは、今度こそ東京に戻るけど……何か預かる物あれば引きうけるわよ」
「それじゃこれ」
短く言って、ぬっと諒が腕をのばした。ぽん、と冴子の掌に「玉」を押しつける。
「忍の餌」
「餌って、あんたねえ……」
怒鳴るのも忘れて、冴子が呆れた声を出した。
視線も返さずに、諒はそのまま考えこんでいる。
「玉」を握りしめ、冴子は少しだけ沈黙した。途方に暮れたように自分の指を見つめる。
そっと顔を上げた。
「……本気で言ってるの？」

諒が振りむいた。
机にひじをついた姿勢。
ゆっくりと息をついて、微妙な笑みを浮かべる。
「わかってるよ」
「なら、いいんだけど」
すっくと椅子を立って冴子が言う。いつもの冴子だ。ぱしり、と音をたてて一枚のテレホンカードが机の上に置かれた。
「電話代、かえしとくわね」
「ラーメンはどうなるんだ」
「あれはあんたも食べたんでしょっ。まったく図々しいったら。あたし先に帰るわよ。またねっ」
言うだけ言って、勝手に教室を出ていく。流れるウェーブの長髪を見送り、それから諒は残されたテレホンカードに視線を戻した。
しばらくそれを眺めたまま、考える。時計を見る。六時。難しい時間だ。いないかもしれない。
まあ、駄目でもともとしても。
のたのたと席を立ち、諒は鞄を取った。

机には、何も残さない。明日にはもうここの生徒ではなくなる。次にみんなが登校するのは終業式だ。その日になったら、水沢諒が急な事情で転校したことが発表され、ほとんどの生徒はまた無関心にそれを聞くのだろう。けれどそのなかで、何人かはこの風変わりな転校生のことを憶えていてくれるだろう。

忍に頼んで、水沢諒と山口美夜は人知れず駆け落ちしたということにしておいてもらおうか。

一段一段、踏みしめるように階段をおりながら、そんなことを思いつく。一度くらいはいいかもしれない。説得力あるぞ、と自画自賛して諒はふと——足を止めた。

（けっこう俺は……好きだったんですけどね……）

めぐりあわせが悪かったんですよ。

呟いて、再び歩を踏み出す。冬の空はもうすっかり夜の色になっていた。

昇降口の脇に、緑色の公衆電話がひとつ。

のたのたと近づき、手の内のカードをじっと見つめる。まだ迷っている。

のたのたとダイヤルする。番号はしっかり憶えている。

しかしこの時間では。

きっとまだ学校から戻っていない。そうだ、まだ家にはいないはずだ。学校の後どこかに遊びに行っているかもしれないし。

コールの音。四回。やっぱりかけなおそうか。
もう少し時間がたってから、もう一度。そのほうが。
「もしもし」
いきなり声がかえってきた。うっ、と諒は息をつまらせた。
忘れてなんかいなかった。記憶どおりのその声。
もう少し変わっていても良さそうなものではないか。混乱した頭で理屈に合わないことを考える。おかしい、これでは変わっていることを期待していたようだ。そうではなくて。つまり。
「崎谷ですけど」
なんだおまえは幸せそうな声を出しやがって。俺がいなくても充分元気なわけだな。ふんふん。こっちはいろいろと大変なことがだなあ、ぐしゃぐしゃとあってだなあ、さすがの諒ちゃんもちょっと落ちこんでしまっておるよ。
「もしもし?」
はっ、と諒は我にかえった。しまった、無言電話をかけてしまった。
本当ならのっけからおちゃらけてこっちのペースに持っていく予定だったのに。これではフォローがつかない。ど、どうしたらいいのだろう。
なんとかしようがあるはずなのに、どうしたことか頭がストライキしている。言おうと思っ

ていたことなら、あれとかこれとかそれとか山になるほどあったのに。どこからも何も出てこない。ひたすら絶句。

これは不覚の極みである。この水沢諒としたことが!!　こうなったら間違い電話を装って逃げるか、と心を決めかけたところに。

『――諒?』

意気ごむように、亮介が言った。

唖然として諒は受話器を見つめた。

こちらはまだ何も言っていない。

『どうした?　元気?』

(うわーっ、なんだこいつーっ!?)

かまわず亮介がたたみかけてくる。諒は思わず電話の前にしゃがみこんでしまった。

(なんなんだなんだ、いったいっ!!　なんでそんな考えなしで訊いてくるんだ!?　人ちがいだったらどうするつもりなんだおまえはっ!?)

さすがは亮介。

パニックした頭を、そんな言葉がかすめた。

そうだ。これが亮介なんだ。これだから亮介なんだ。

知っていたのに。

「うん」

ようやく、諒は言葉を押し出した。すんなりと声になった。

「うん、元気。とても元気。すごく元気」

言いながら、発作的に笑いがこみあげてくる。

「ものすごく元気……」

諒はけたけたと笑い出した。何を迷っていたのだろう。本当に馬鹿みたいだ。

『どうしたの、おまえ……』

亮介の呆れ声がかえってくる。

「だから元気って言ってるじゃないのよーう」

『いやそれはわかるけど。だからそうじゃなくて』

「いいっていいって。わははははは」

しゃがみこんだまま諒は延々と笑いつづけた。大丈夫。自分は大丈夫。こいつがいるから俺は大丈夫。

悲しくなんかないよ。

そんな言葉をどこかへ送って。

そして冴子のくれた五十度数のテレホンカードを使いきるまで、諒は受話器を握りしめて、しつこく笑いつづけていたのである。

アニバーサリー

Opening

ものごころついた頃には、自分の力の使い方を知っていた。
少し意識を切り替えるだけで、ぼうっと手首から先が光る。危険だから勝手に使ってはいけないよ、と大人たちには強く言われていた。人を傷つけこそしなかったが、確かにその力でものを壊したことは何度もある。癇癪をおこして八つ当たりしたのだ。
「いいなあ」
一歳年上の従兄は本当に屈託もなく、そんな言い方をした。
「すごく綺麗だ」
白く淡く光る自分の手を見つめて、うらやましそうに。
得意になって念をこらすと、ますます眩しさを増した光がそこに宿った。
どうだ、と彼に問う。
「綺麗だよ」
期待どおりに彼は微笑した。
「見てごらん」
自分の手の上に、彼が片手をかざす。

すう、と輝きが落ちたと思ったら、次の瞬間ぱちりと光がはじけた。花火みたいだ。自分が力を放ち彼がそれを抑え、その狭間でぱちぱちと泡のように光が散る。楽しくて面白くて、ふたりで顔を見合わせてくすくす笑った。

彼の力はとても強いけれど、自分のそれのように光となって顕れることはない。静と動。内へ向かう力と、外へ向かう力。触れあうとシーソーゲームのようで、どんな遊びよりも胸がわくわくして。

くすくすくす。

子供部屋の片隅で、ふたりだけでそんな風に遊んでから、それだけで足りなくて大人たちにも自分の『光』を見せてまわった。綺麗だと、彼がそう言ってくれたから。

見て見て、綺麗でしょう。

せいいっぱい両手を掲げてみせる。けれど誰も——父親も姉も近所の友達も、不思議そうにそれを見るだけ。誰も誉めてなんかくれない。どうして？

光なんか見えない、と彼らが言う。何が綺麗なの。何も変わってなんかいない。何を言っているのかわからないな。

わからないって。見えないって。

誰も。誰も誉めてくれない。変な目をして。まるで自分が嘘をついているみたい。

嘘なんかついてない。信じただけ。信じただけなのに。

「嘘つき！」

笑われたじゃないか。馬鹿にされたじゃないか。従兄のところへ駆けこんで責めたてた。ぼろぼろと涙を落として訴えた。おまえのせいだ。おまえの。おまえがあんなことを言ったから。嘘つき。嘘つき。

「ごめんね……」

そう言って彼は——十九郎は、少しだけ困ったような顔をした……。

Scene 1

十一月二十日。

渋谷駅構内、東横線改札口前は相変わらずの混雑ぶりだった。

切符売り場と改札の間が小さな広場になっていて、そこからそのまま向かいの建物への連絡通路がのびている。幅のある通路は両側の窓が大きなガラス張りで、日の暮れた渋谷の駅前を眼下に見渡すことができる。

ターミナルに溜まるタクシーの赤いテイルランプ。照明に浮きあがる映画館の看板。ざわざわと動く人々の頭を窓の向こうに見おろしながら、前を行く人と同じ速度で、奈緒はぼんやりと連絡通路を歩いていた。学校の帰りだ。時間をつぶしたくて、何を買うでもなく駅前の店をのぞいて、ひとりでドーナツショップに入ってマフィンを食べて、行きつけの本屋の中をうろうろして、やることがなくなって仕方なく家に向かうところである。

東横線の切符売り場が見える。いつもの光景。これからいつもの改札を通っていつもの電車に乗って、武蔵小杉でJRに乗り換えて……いつものコース。

いつもいつも同じ。

学校指定の革カバンが重くて、奈緒は左手の荷物を右手に持ちかえた。

「ちょっと」
どこかから、男の声がした。
声はしたけれど、それはそれだけのことだった。知っている声でもないし。
そもそも、男は苦手だ。
「あんただよ、あんた」
声が近づいた。下を向いたまま進んでいた奈緒は、ふと自分の隣に人影が並んだのに気がついた。
「おい、あんた、名前は」
「え!?」
耳元で言われて、ぎょっとして顔を上げる。
男の子だった。背が高い。ブレザーの制服。色の薄い髪。
ハンサムなのだが、どこか怖い。なんだか意地悪そうなのだ。
「いきなりだけど、ちょっと話があるんだけど」
こっちの都合などおかまいなし、という口調で彼が言う。
これはナンパだろうか。
一歩後ずさって、奈緒は考えた。ナンパなんてされたことはないけど。もしかしてこれが。
(冗談でもイヤだ!)

荷物をしっかり摑んで、思いきり無視して歩き出す。知らない女に声をかけるなんて、軽いにもほどがある。

「おい」

あきらめるかと思ったのに、ナンパ男はしつこく追っかけてきた。

「勘違いするなよ、そういうんじゃなくてさ——親切で言ってるんだぜ、こっちは！」

何を言っているのだろう。親切？

お情けで声をかけたとでもいうのだろうか。

「人の話くらい聞けよな」

ぐい、と片手をつかまれた。

「いやっ!!」

泣きそうな悲鳴になった。つかまえた当人が、一瞬びびって手の力をゆるめたくらいだ。

逃げだそうとしたが、もう一度手首をつかまれるほうが早かった。

「だからそうじゃないって言ってるだろ!?」

「やーっ！　や、だーっ!!」

手を放せ、その手を！　と言いたいのに言葉にならない。頭が沸騰して、気がついたらただ馬鹿のように叫んでいた。か弱い女の子がこんなに困っているのに、誰も助けに来てくれない。これだから渋谷なんか嫌いだ。大嫌いだ！

ナンパ男は苦い顔になって、舌打ちをしている。
「あのさあ……」
彼が何かを言いかけたところに。
「そんな風に頭ごなしに話しかけたら、誰だって逃げたくなると思うよ、俺は」
奈緒の背後から、もうひとり、声をかけてきた者がいた。
不機嫌な顔のまま、ナンパ男がふりかえる。
「わかってるならなんとかしろよ、おまえは！」
「せっかく希沙良が頑張っているから、割りこむのは失礼だと思ったんだけどね」
「もっと正確に状況を把握してほしかった」
「悪かったな、それは」
はたして本当に悪かったと思っているのか判然としない語調でそんなことを言い、奈緒の前に姿を現したのは大人びた印象の——多分、年上の——育ちの良さそうな少年だった。
落ちついた表情で奈緒を見据え、口を開く。
「すみません、驚かせてしまって」
やわらかい声。
ナンパ、という行為があまりに似合わない相手に思えて、奈緒は判断に迷ったまま彼の顔を見上げた。

「どう言えばいいのかな……つまり……この頃あなたの身のまわりに危険なことが起きていると思うんだけれど、そんなことはないですか？」

「え？」

奈緒は目をみはった。

なぜ、知っているのだろう。そんなこと。

「最終的には命にかかわる問題だから、そのことについて協力できればと思って。ああ、その前に……俺は私立祥英高校二年、里見十九郎といいます。こいつは都立新宿南高校一年、和泉希沙良」

「というわけだっ」

ようやく奈緒の手首を解放して、ムッとしたようにナンパ男——ならぬ、和泉希沙良がそうつけ加えた。

Scene 2

十一月二十九日は和泉希沙良の誕生日である。

忘れていたわけではないが、気づいたらすぐ目の前だった。困ったな、と渋谷へ向かう電車の中で里見十九郎は考えをめぐらせた。

末息子の誕生日を祝う、という習慣は和泉家にはないのである。それはそれであの家族なりの気遣いなのだが、そうすると里見家としてはささやかながらも希沙良に居場所を提供しないわけにはいかなくて、これは毎年、暗黙の了解となっているのだ。

（しかし確か二十九日は……）

思い違いでなければ、その当日は片桐の家のほうで何か催しがあったはずである。十九郎は眉をひそめた。とにかく片桐の父親は思いついたら即実行の人なので、この話が舞いこんだのもつい数日前のことだ。なんでも久々に兄弟が顔を合わせるそうなので、欠席すると後継者の自覚がないだのなんだのと面倒なことになる。内輪の集まりだなどと言っても、どうせちょっとした園遊会になってしまうのだろうし。

なんとかしなければと思いつつ、まだ有効な策は見つかっていない。素直に本当のことを話したりしたら、あの超自己中心的問題児には拗ねまくりに拗ねられるだけだろう。言わぬが花というやつだ。とりあえず、保留ということにしておく。

渋谷駅到着を告げるアナウンス。

本日の待ち合わせは東横線改札前に、六時半。渋谷に美味いイタリア料理の店を見つけた、などと希沙良が言うので、今日は彼のリクエストに応えて新宿から場所を移したのだ。夏江も仕事に出ていることだし、ひとりで食事を済ませるよりは、希沙良に夕食をおごったほうが楽しいといえば楽しい。

（七時に店に入ったとして、出るのが八時半。コーヒーを飲んで九時半。家に戻るのが十時。それからレポートを二本書いて、数学の課題と予習と……本を一冊読んで……三時には寝られるかな）

ざっとそんな計算をして、改札を出る。希沙良の姿はすぐに見つけた。十九郎は今まで、こういう場所で希沙良を捜したことは一度もない。オーラの波動を熟知しているから、意識しなくても自然に目が向くのだ。

「？」

立ち止まる。両眼を細める。神経に障る空気。

（これはまた随分……）

絵に描いたような妖気、というものがあるとすれば、まさにそれだ。これが妖気だ、と展示しておきたいような模範的な気配が、まっすぐに一方向から伝わってきている。

希沙良が動いた。

制服姿の少女に近づいて、声をかけている。妖気の源。

彼女自身から妖気が発散されているわけではない。十九郎はそう判断した。それは彼女の周囲にまとわりついているだけだ。今のところは。つまり。

狙われている……。

「だからそうじゃないって言ってるだろ!?」

希沙良が怒鳴っている。交渉はうまくいかなかったらしい。相手の女の子は完全に怯えてしまっている。

それでも彼女を逃がさないあたりは、とりあえず感心なことと言えよう。余計な正義の味方が乱入してナンパ少年を撃退したりしないうちに、十九郎は足を運んで希沙良の背に声を投げてやった。

「そんな風に頭ごなしに話しかけたら、誰だって逃げたくなると思うよ、俺は」

むっとして希沙良が振りかえる。同時に見返ったのは、小柄でおとなしそうな……女子高生。

「わかってるならなんとかしろよ、おまえは！」

「せっかく希沙良が頑張っているから、割りこむのは失礼だと思ったんだけどね」

近づくとはっきりわかる。ずっしりと重苦しい気配。

まだ本人に変化が表れる段階ではないが、このまま放っておいたら確実に妖者を呼びこんでしまう。きわどいところだ。

「もっと正確に状況を把握してほしかった」

ぶちぶちと希沙良が言う。

しかしここで彼をさしおいて先に自分が動いたりしていたら、希沙良は大激怒して口もきいてくれないであろう、と十九郎は踏んでいる。そういう奴だ、彼は。

「悪かったな、それは」
この台詞にたどりつけば、一応バトンタッチを許される。
きょとんとして見ている少女に向き直って、簡単に状況を説明する。相手が十九郎となったら、彼女のほうもさすがに逃げ出そうとする勢いを失い、それを見て希沙良はますますむくれていた。
「キ、サ、ラ?」
自己紹介を聞いて、少女は怪訝な表情になる。
「希望の希に、サンズイの沙に、良い子の良!」
不機嫌なまま希沙良が口を出した。叱られたように少女は身をすくめた。
十九郎が、意外そうな目を上げる。
「いつから希沙良が良い子になったんだ?」
「良い子じゃん、こんなにっ。見るからに良い子じゃんっ。認識足りないんじゃねえの? おまえ」
「きっと根が正直なんだ、俺は。そうか、今まで気づかなかったな」
「最っ低。どうせな、おまえはいいよな、数字の十九っていえば誰だってわかるもんな、便利きわまりないよな、ああうらやましいなーっと」
「あ。もう口きくのやめよう」

「おまえっ！　心が狭いぞおっ！」

背中を向けそうになる十九郎に、ぎゃんぎゃんと希沙良がわめきたてた。通行人が何事かと見ていく。

「反省しなさい」

じろり、と希沙良に目を向けておいて、十九郎は問題の少女のほうに視線を戻した。彼女はふたりの無意味としか言いようのないやりとりを、何やら唖然として見ている。

「話をそらしてすみません。とにかく――今のあなたは、ちょっと放っておくわけにはいかない状況だから……」

「だからさあ、おまえさん要するに今、背中に〈妖の者〉しょってる状態なわけだよ。で、そのまんまだと憑依されちまうぞって話をしてるんだろ、こっちは。そのへんわかってるか？」

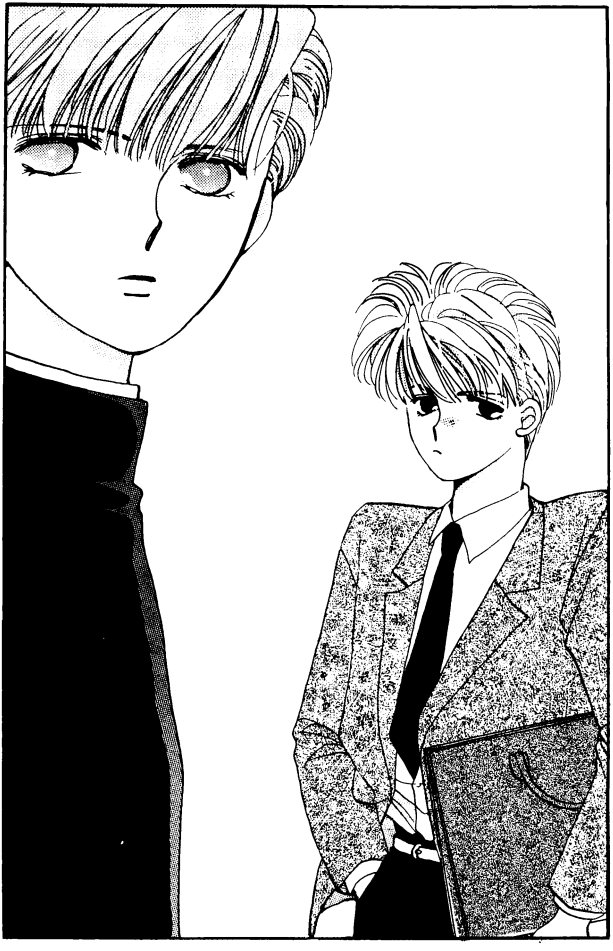
口を開いた十九郎の後ろから、希沙良が無理やり言葉を割りこませた。言われた本人はぎょっとして彼を見つめかえした。

「え？」

突然〈妖の者〉などと言われて普通の女子高生がそのまま納得したら、それこそ大嘘である。

「希沙良！　いきなりそんなことから話しても」

「だってまどろっこしいんだよ、十九郎の説明って」



希沙良の台詞は、時と場合というものを無視している。十九郎が何かを言いかけた時だった。

「あの、あたし、そういうの、いいですからっ」

もつれそうな小声で少女が言いきり、引きとめる間もあらばこそ、脱兎のごとくに駆け出していってしまった。げげ、と希沙良が呟いた。

追って追えないこともなかったが、十九郎はあえて動かなかった。考えを組み立てながら、彼女が東横線のホームに走りこんでいくのを見送る。

理詰めで説得するにしても、かなりの時間がかかりそうだ。宗教団体あたりと誤解されても厄介である。何より夕食の時間が後にずれこむ。ここは強引な手に頼るか。

希沙良を振りかえる。

「で、まさか見捨てるつもりはないんだろう？　この期に及んで」

「一応。見つけちまった責任、あるし」

ぼそぼそと希沙良が答える。十九郎はふと遠い目をした。

「……あの制服は清苑女子高だから、ここで乗り換えて地下鉄で半蔵門だな」

「なんでおまえってそういうヘンなことばっかり知ってるわけ？」

気味悪そうな顔になって、脇から希沙良がそんなことを問いかけた。

Scene 3

十一月二十一日。

……身のまわりに危険なことが起きているか、なんて。

朝のラッシュをくぐりぬけながら、奈緒はその言葉を胸でくりかえしていた。

初対面でいきなりあんなこと言って。あれっていったい、なんだったんだろう。

ヘンなことなら、嫌と言うほど起こっている。触れもしないのに物が落ちる。近くのガラスが割れる。高いところから落ちそうになる。怖い夢ばかり見て、よく眠れない。

でもそんなこと、誰にも話してなんかいないのに。

(やっぱり、ナンパだったんだ)

あてずっぽうで驚かそうとしただけなんだ、きっと。そう納得して、奈緒はもうあのふたりのことは忘れることにした。

もともと男の子は苦手なのに、顔まで良いとなると最悪だ。ハンサムな男の子はもてるから、気のきいた女の子も沢山知っているだろう。こっちはそんな相手を前にしたら緊張して緊張して、話しべたがますますひどくなって、そして結局つまらない女の子だと思われるだけだ。

中学の時はまだ、仲良しグループの中で守られていたから、クラスの男子と口なんかきかなくても友達が全部フォローしてくれた。でも今は。

「おはよう、早水さん」

電車の中で、同じクラスの子が声をかけてきた。

話しかけてなんか、こなくていいのに。奈緒は内心でそんなことを思いながら、それでも顔では笑ってみせている。

「おはよう、白井さん」

「寒いね、今朝は。電車の中は暑すぎるけど」

「暖房で空気が悪いんだよね」

「家庭科の宿題、どれくらいできた?」

「まだ半分くらい」

「よかった、私も。全然進まなくて」

あたりさわりのない、無意味な会話。

言いたいことがあるわけでもないのに、ただ話を跡切れさせないために口を動かしているのだ。白井陽子はこのまま学校に到着するまで、ずっとついてくるのだろう。ひとりで学校に行くことくらい、どうしてできないのか。心なんてお互いに何も許していないのに、表向きだけこんな風に友達のフリをして、馴れあって。それは友達がほしいからじゃない、単に自分ひと

りで立っていられないからだ。
「知ってる？　塩倉さんね、バドミントン部では完全に相手にされてないんだって。性格すごく悪いんだって」
「クラスでは主導権もってるのにね」
「でも目立ちたがりじゃない？　あの子って」
ウワサと悪口。
クラスで当人と会ったら、また別の人間の悪口を言って盛り上がるくせに。
自分だって、どこかでいろいろ言われているのだろう。わかっているけど、女の子同士なんてそんなものだ。何より嫌なのは、わかっているのに表面ではしっかり同調してしまっている自分自身だ。
誰も本当のことなんか話さない。
そういう世界なんだから、仕方がない。
（嘘つき……）
定期を握りしめて、渋谷駅のホームに降りる。白井陽子が遅れてくる。一応振りむいて彼女の姿を目にとめながら、人の流れにのって奈緒は先に改札口をくぐった。
（あれ？）
視界の隅のほうに、どこかで見た顔が映った。

誰だったか、と思い出すよりも早く。

「遅いっ！」

ずかずかと近づいてきたと思ったら、その人影がいきなり叱りつけた。

「え!?」

ハッとして見上げる。そうだ、昨日のナンパ男だ。なんでまた、こんな所で。

（遅い……？）

あっけにとられている奈緒の手から希沙良は定期を奪いとり、つらつら眺めている。ついでに裏にかえして学生証も。

「早水奈緒、清苑女子学園高等部一年六組。あっそ。ったく自己紹介くらいしろよな」

勝手にぶつぶつと呟くと、無造作に定期入れを投げかえす。

「まあでも、こっちの改札で会えてラッキーだったよな。あと十分待って来なかったら清苑のほうに乗りこむところだったもんな」

「あ、あの？」

なんの話をしているのかつかめない。人波に背中を小突かれながら、奈緒は必死に口を開いた。

「というわけで、今日は学校行かなくていいから」

奈緒の反応にはまったくかまわずに希沙良がそんなことを言って、いともあっさりと片手を

つかみ歩き出す。奈緒は急転直下の特大パニックに陥った。何を言っているんだこいつは!?

「あ、あたし地下鉄！」

白井陽子が見ている。こんなところ見られて、学校であることないこと言いふらされたら。

「俺は山手線なのっ！」

強引に希沙良が言いかえす。なんの関係があるというのか。ずるずると引きずられて階段にたどりついた。

奈緒は白井陽子を振りかえった。彼女はぽかんとしてこちらを見守っている。

目が合ったら、なんだか気まずいような作り笑いになって小さく手を振り、背を向けて行ってしまった。——あれは絶対に誤解している。

「は、放してくださいっ」

ちゃんと声が出ない。喉をしめられたような感覚。

「逃げたら大声出すぞ」

足早に階段を上りながら希沙良が言う。

「渋谷駅中に大声で『清苑の早水奈緒っ』って連呼するぞ。みんなに見られるぞ。渋谷中の人間があんたの素性を知るんだぞ。とっても恥ずかしいぞ、これは」

「……」

絶句。

脅迫に屈したわけではない。単に呆れはてたのである。

気がついたら、引きずられたまま山手線の改札まで来ていた。奈緒は我にかえって希沙良の顔を見上げた。

「あの、あたし、本当に学校が」

ビシッ、と何かが弾けるような音がした。

次の瞬間、売店に積まれていた雑誌の山が一斉になだれをうって崩れ落ちた。キオスクのおばさんが悲鳴をあげ、その場の人間がひとり残らず目を向けた。地震か、という声。

希沙良が小さく舌打ちをした。

「あんたのせいだぜ、あれは」

「え？」

「心当たりくらいあるんだろ」

突き放すような言い方をする。奈緒は言葉をつまらせた。

こういうことが目の前で起きるのは確かにはじめてではない。ないけれど、どうして自分のせいだなんて言われなければならないのだろう。無理やりに決めつけて。すごく冷たい。自分には何もわからないのに、頭ごなしにそんなこと。

意地悪だ、この人は。

「今の状態であんたを放っとくと、こういう風に傍迷惑なんだよ。で、俺がそれを未然に防い

でやろうっつってんだろ。親切だよな、まったく」
　ポケットの小銭をさぐって、希沙良が言う。希沙良も制服姿である。学校は行かなくていい、などと言って……本人はどうするつもりなのか。
「後で返せよ」
　JRの切符を渡された。そのまま改札に引っぱっていかれる。
「え？」
　どういうことなのか、まだつかめない。改札を通ってしまってから、奈緒はもう一度訊きかえした。
「そればっかりだな、あんたは」
　希沙良が言う。ずきり、と傷ついた。
（意地悪だ！）
　もう口なんかきたくない。奈緒はぐっと唇を結んだ。下手をしたら泣いてしまう。うまく息ができない。視界の周辺がわずかに滲んだ……。
　これだから男の子なんて嫌なのに。
「昨日の十九郎の言ったこと、憶えてるだろ？　最終的には命にかかわるんだぜ。こっちも別に冗談でやってるわけじゃない」
　希沙良は手を放してくれない。

新宿方面行きのホームに降りて、人ごみの中を端のほうまでぐんぐん進んでいく。

学校は……このままだと無断欠席になってしまう。はじめてだ。きっと家に電話が行って、白井陽子のせいで男と一緒だったこともバレて、母親にヒステリーを起こされる。

娘の言うことなんか、絶対に信じないんだ。あの人は。世間が優等生だと言えばそう信じるし、不良だと言えばそう信じこむ。本当の娘の姿なんて、何も見ていないんだ。自分の子供のくせに。

父親は何年も前から地方に単身赴任(たんしんふにん)だし。あの人は仕事のことしか知らないし。

「言いたいことがあれば、言えよな」

ホームの一番前まで来て、希沙良が言った。

「顔じゃなくて口のほうに出せよ。でなきゃ表になんか出さないで完璧(かんぺき)に黙りとおすか、どっちかに徹底しろよな。何も言わないで相手にだけ説明させるのって、虫がよすぎる話じゃねえの？」

「……」

勝手なのはそっちのほうだ。

胸の内で呟いて、奈緒は答えなかった。

もっと、ちゃんと、わかりやすく——優しく、話してくれたら。そうしたら自分だって。

（——あ？）

いきなり、ずしりと背中に重量がかかった。誰かにのしかかられたのかと思った。よろめいて、そのまま前に膝をつきそうになる。

「！」

ばしり、とまた空気の割れるような音がした。

希沙良の腕にぐいと引き起こされる。もう背中には何も感じられない。奈緒は後ろを振りむき、そこに誰もいないことを確認した。

息を呑んで、希沙良を見上げる。

今、何かをやったのだ、彼は。見えなかったけれど。ずっしりと重い何かを、消してみせたのだ、必ず。

「結界の応用。下手なんだ、俺は」

苦い表情のまま、ぼつりと希沙良が言う。電車が入ってきた。

「乗るぞ」

ぎっしりと込んだ電車の、それでも比較的空いている先頭車両に希沙良は奈緒をひきずりこんだ。今のことを尋ねたかったけれど、うまくタイミングをつかめないままで、なしくずしに奈緒は山手線に乗りこんでしまっていた。

Scene 4

都内でも一、二を争う名門とされる祥英高校は、都心から少しはずれた立川にある。例にもれず、ここもしっかり男子校である。

始業前の音楽放送（当然、クラシックである）が流れる中、十九郎は二階の一角にある生徒会室に顔を出した。祥英の生徒会は校内における勢力が強いことで有名で、一部には治外法権と呼ばれている。

「先輩！」

現副会長の麻生和浩が、会報から目を上げて子供っぽい笑顔になった。今朝は彼がひとりでこの部屋を占拠していたらしい。

「おはようございます！　先輩のほうから来てくれるなんて、嘘みたいに久しぶりですね」

「まるで俺がずっと不義理をしているみたいな言い方だね」

「だって、そうじゃないですか」

麻生少年は恨めしげな顔になる。十九郎は肩をすくめた。

十九郎自身は昨年の後期から今年の前期、つまり夏まで副会長を務めて、現在は引退の身である。そんなわけで今は頼まれれば出向くという程度に、生徒会室からは距離をおいている。

後任を全面的に信頼しているといえば聞こえはいいが、要は忙しすぎてこちらまで手が回らないのだ。

「で、どうしたんですか？」

あらためて麻生少年が問いかける。

「ああ、いつものことなんだ」

「あ、電話ですか。わかりました、気をつけてます」

「よろしく頼むよ。多分、今日中にかかってくるはずだから」

電話、というのは生徒会専用回線のことである。

外から学校に連絡するときはこちらにかけるように、以前から希沙良に指示してある。前任者の特権を発動して、この回線は自由に使わせてもらっているのだ。本来、学校の電話をその手の私用に使って許されるはずはないのだが。

「甘いですよね。先輩も。弟さんでしたっけ？」

「いや、従弟。母方のね」

「どうせなら本人も祥英に来ればよかったんですよ。そうすれば里見さんにこんな面倒かけることもないのに」

「プライベートだよ、麻生」

やんわりと十九郎が言う。ちぇっ、と麻生少年は呟いた。

今ごろ、希沙良は昨日の少女となんとか合流しているはずだ。その手の待ち伏せ（などと言うと希沙良が気を悪くする）なら、なぜかあの従弟は失敗することがないのである。女運がいいと言ってしまって良いのだろうか。

彼女にまとわりついている妖者は、同化をはじめているわけではないし、スキあらばと機会を狙いつつ身を潜めている状態だから、すぐに撃退するのは無理だ。精神体である「本体」を誘い出さないことには。

おそらく、術者である希沙良が側にいて妖者の力を抑圧していれば、そのうち本体のほうが苛立って実力行使に出てくるだろう。精神体相手のさぐりあいは本当なら十九郎の得意分野なのだが、ここはひとつ希沙良に頑張ってもらうこととする。なんといっても、彼女に声をかけたのは希沙良のほうが先なのだし。

「それはそれとして、先輩」

麻生少年が指を鳴らした。切り替えが早いのは彼の取りえである。

「今度の総務会、出てください！　お願いします！　試験前になっちゃうんですけど、なんとか今学期中に予算、通さなきゃいけないんです。だけど文化委員長がものすごくガンコで、こっちの言うこと全然聞かなくて」

「いつだって？」

会長その他をさしおいて元副会長が大きな顔をするというのも妙な話だが、どうしたことか

十九郎が出席すると本当に議事の流れが変わる。それだけに麻生少年の懇願にも熱がこもっていて、なかなかに同情を誘うものがあった。

「来週なんです。二十九日」

「――――」

めずらしく心底複雑な顔になって、十九郎が問いかえした。

「二十九日？」

Scene 5

要するに、目的地というものはないのだ。

希沙良を見ていて、奈緒がたどりついた結論はそうだった。列車が新宿駅についてドッと乗客が入れ替わり席が空いたスキに希沙良は奈緒をひきずってさっさと座りこみ、ラッシュ時だというのにどっしりとシートにくつろいで動く気配がない。そのうち山手線はぐるりと一周して、今は恵比寿に来ていた。次はまた渋谷だ。この間、約一時間である。

そろそろ手を離してほしい……。

「あの……」

おそるおそる口を開く。電車に乗って以来お互いだんまりを通していたので、この一言には

随分な勇気を要した。

じろりと希沙良が目を向けた。

「これ……放して」

睨まれただけで言葉がつまずきそうになったが、必死の思いで声にする。

「やだ」

無表情に希沙良が答えた。にべもない、とはこのことだ。ぐぐぐ、と奈緒は腹のあたりに力をこめた。

「キ、キサラ君はいいかもしれないけど、あたしは、人に変な誤解、されたくないんです。どうせもう、学校には間に合わないし、その、どうして一緒にいなきゃならないのかも、なんとなく、わかったから……つ、つかまえてなくても、逃げたり、しません」

希沙良相手にこれだけの量の日本語を話したのは、はじめてのような気がする。

奈緒の台詞を希沙良は黙って聞いていたが、それが終わると妙に複雑な顔になって前歯をかみあわせた。何やら考えている。

「えーとだなあ……今の発言についてはいろいろと言うことができちまったんだけど、全部言うから心して聞けよな」

ぼそぼそとそんなことを言う。叱られそうで、奈緒は思わず身構えた。

希沙良は怒ったような困ったような、神妙な様子で言葉を続ける。

「まず。あんた『俺はいいかもしんない』って、それさあ……俺の学校どこだか知ってんだろ？」

「……新宿南？」

「わかってんじゃん。時に新宿南は新宿西口だ。つまりだ、うちの学校で山手線使う奴ってのはやたらめったら多かったりするわけだ。だからさっきから俺は顔見知りにじろじろ見られてとっても恥ずかしいわけだ。俺だって嫌なんだよ本当はっ」

台詞の後半で、希沙良は声をひそめた。微妙に照れている。

ただの無神経男かと思っていたが、そういうわけでもなさそうだ。奈緒は言うことを思いつかなくて、希沙良の仏頂面を見つめかえした。

「で。それでもなんでしつこくあんたの手つかまえてるかっていうとだ」

ばっ、と希沙良が一瞬だけ奈緒から手を放した。とたんに反対側の席の網棚からどさらがさらと荷物が崩れ落ちた。

「――そういうこと！　まだわかんないか？」

「わ、わかりました……」

理屈では説明しようのない事態だが、実際に目の前で起きていることなら、認めるしかないだろう。奈緒は息をつめて頷いた。

「それから。その丁寧語やめてくんない？　初対面から馴れなれしい奴も嫌だけど、いつまで

もその言い方されるの苦手だから、俺」

まだどこか照れたままで、希沙良が言う。

「でも……」

そんなことを言われても、男の子と対等に話したことなんてないし……どうしたらいいのか。

「でもじゃないっ。俺に丁寧語使っていいのは、俺より年下の後輩か、俺がタメロききたくないくらい大嫌いな奴だけだっ。昔からそう決まっているんだっ」

「……」

「だいたい似合わねえだろ、俺とデスマス調って。外見といい性格といい」

希沙良は勝手に決めつけている。奈緒は反論の機を失った。

なんというか、この人は……単にものすごくワガママなのかもしれない。

「言うこと四つ目。今がどういう状況かちゃんとわかってるみたいだから、それについては誉める。この期に及んで逃げるなんつったらぶっとばしたけど、さすがにそこまで馬鹿じゃないよな」

えらいっ、と希沙良が力をこめて言う。

ありがたいと思ってしまっていいのだろうか。

電車が渋谷に停まり、発車する。とうとう一巡したことになる。希沙良に降りようとする気

配はまるで見られない。一日中山手線に乗っているつもりなのかもしれない。
「それでもって五つ目」
希沙良は表情を改めた。
「キサラクンはやめろ、キサラクンはっ！　恥ずかしいだろうっ！」
怒鳴りつつも、声のボリュームは落としている。奈緒は迫力に押された。
「……だって、名前でしょ？」
「和泉でいい、和泉で」
もったいない、と奈緒は思う。やたら印象的な名前なので、正直言ってキサラのほうしか憶えていなかったのだ。
「綺麗な、名前なのに」
「人目にさらされる俺の身にもなれよな……」
「……でも、昨日の十九郎さんは、希沙良って呼んでたのに」
「あれは別」
きっぱりと希沙良が言いきる。
実はつい先日も、他の相手と同じようなやりとりをしたばかりである。どんなに叱っても『希……』と言いかけて『じゃない、和泉』と言いなおし、その度にへこへこと謝るという三段技を連続十一回にわたってかますに至っては希沙良もいちいち怒鳴りとばす気力を失い、

『希沙良でいいよ、希沙良でっ』と異例の譲歩に出たという、希沙良にとってはあまりめでたくもない相手であったが。その、希沙良でさえ沈黙する無敵の必殺技を有するとんでもない少年の名を、崎谷亮介という。……余談である。

「ついでに言うけど、その十九郎クンもやめろっ。里見と呼べ、里見と」

「……どうして？」

「俺がイヤだから。うん、あいつもきっとイヤにちがいない。そうにちがいない」

希沙良は理不尽な発言を連発している。奈緒は首をかしげた。

奈緒自身は本当のところ、『十九郎』のほうしか憶えていなかったりしただけなのである。

「でも、和泉君は、名前のほうで呼ぶんでしょ？」

「だから、俺は別なの！」

「――」

奈緒は口をつぐんだ。

昨日の、希沙良と十九郎の会話を思い出す。あんな風な――お互いが目を合わせた時に流れた安堵するような空気と、じゃれあうような言葉と。

今の、希沙良の言い方。

「好きなの？」

気がついたら、そう問いかけていた。希沙良が少しだけ驚いた目をした。

「何が？　十九郎が？」
奈緒は答えなかったが、希沙良はそれをそのまま肯定ととった。
「そういうこと訊くか、普通？　訊くほうが恥ずかしくないか？　答えるほうはもっと恥ずかしいぞ。言えるか、そんなことっ。バスバスっ」
「――男が好きなの？」
訊いてから、奈緒は我にかえった。しまった。こんなこと直接言うなんて。
唖然として希沙良が視線をかえす。
原宿駅。人のざわめき。アナウンス。閉まるドア。がごっ、と揺れて走り出す列車。
「面妖なこと考えるよなあ、女って」
ぽつりと、希沙良が呟く。
「心が貧しい」
静かだが、どこか確実に怒っている。奈緒は唇を噛んで黙りこんだ。希沙良もそれ以後、ずっと沈黙を保っている。
失敗してしまった。少しずつ、会話を作れそうになっていたのに。奈緒は本当に泣きたくなってきた。
ただの嫌な――意地悪な奴ではなくて、自分の言葉に、一に対して十くらいの割合で言葉をかえすように、ちゃんと『話』をできるように、気を遣ってくれていたのだ、彼は。なのに。

自分は全然、ろくなこと言えなくて。ガチガチ緊張してるから。つまらない反応ばかりで。きっともう、すごく馬鹿な女だと思われている。

自分のことを悪く思っている相手と一緒にいるのは……辛い。楽しいはずがない。のたうちまわるほどの痛み。そんなことには慣れているはずなのに。平気なはずなのに。だって、自分を本当に好きな人なんてどこにもいない。そんなこと、自分はちゃんと知っているのに。

いざ現実として思い知らされるのは、何度目のくりかえしでも、何十度目のくりかえしでも、変わらずに痛い。

(そんな弱い神経なら、なくなっちゃえばいいのに!)

泣けばいいというものでもないのだ。泣いたからって助けが来るわけじゃなし。

お腹が痛くて、死にそうに苦しくて、泣きながら救いを求めた時も、奈緒は泣き虫だからと母親はとりあわずテレビのお笑い番組を見ていた。小学校二年のころだった。あまりに辛くて、自分で救急車を呼んだ。盲腸だった。医者にそう言われてはじめて、あの母親は大騒ぎしたのだ。

あの頃から、父親は家にいなかった。

奈緒の記憶は、そんなことばかりだ。

ひたすらに電車が走る。人が流れこんでは吐き出されてゆく。

いたたまれない空気のまま、奈緒は山手線がぐるりと一周する時間をじっと堪えた。

希沙良は何も言わない。
また渋谷に戻ってくる。のろのろと、原宿、代々木、新宿。
……新宿を出たあたりだったろうか。
遠くから声がした。
意識の片隅で気づいた。低い声。
『ココニオマエノ……ハナインダヨ』
奈緒は耳をすました。低い……落ちついた、やわらかい声が。
『ココニオマエノ居場所ハナインダヨ……』
ゆっくりと囁く。
『カワイソウダネ』
かわいそう?
どこから届いた言葉なのかわからなかった。深い響きの……。
『ダレモ本当ノオマエノコトナンテ……ワカラナイ』
(誰……!?)
やさしい、あたたかい声。包みこまれそうになりながら、どこかで腹立ちに似た感情を自分が抱いていることに奈緒は気づいた。
かすかな反発。

なぜ?

「ミンナ、馬鹿ダ。ドイツモコイツモ、ミンナ、馬鹿ダ、ネ……」

突き刺さるように脳裏にフラッシュ――。

「え? 高田馬場!?」

いきなり隣で希沙良が身を起こした。奈緒は飛びあがりそうになってしまった。

ぼんやりしていたらしい。時間の経過があいまいになっていた。驚きまくっている心臓をなだめながら、何事かと希沙良を振りかえる。

「さっき、原宿だったよな」

希沙良がそんなことを尋ねてくる。何か不得要領な顔をしている。

怒っては……いないのだろうか。

「……いつの、さっき?」

おずおずと奈緒は訊きかえした。原宿なら、三度ほど通過したような気がする。

「だからさっきって……げっ、一周してやんの」

腕時計を見て、希沙良は事態を呑みこんだらしい。もしかして、と奈緒はあることに思い至った。

「え……寝てたの?」

「わかってたら起こせよなあーっ」

「わ、わかってない！　見てなかったから……」
「それくらい見てろよなあーっ」
希沙良は頭を抱えこんでいる。
静かだと思ったら、そういうことだったのか。奈緒は拍子抜けして、それからえらく馬鹿馬鹿しくなってしまった。こっちがじりじり悩んでいた間、こいつはひとりで居眠りしていたのである。まぎらわしいことをするなというのだ。
あの針のムシロの一時間は、いったい何だったのだろう。我慢するだけ損だったようなものである。
「仕方ねえな、もう一周するか。急ぐわけじゃなし」
息をついて希沙良がそう呟く。
「降りるの？」
「降りる。新宿」
「……新宿なら、反対側に乗り換えればすぐだけど」
「くやしいからもう一周するっ」
妙なところで意地を張る癖があるらしい。頑として希沙良は動かず、あえて逆らう気もおきなくて奈緒はそれに従った。
さすがにもうラッシュはおさまり、車内は風通しが良くなってきていた。それだけに制服姿

がふたり並んでいるのはいかにもワケあり然としていて、なんとはなしに視線を感じる。それぞれ違う制服だし、おまけに手までつないでいるし。

けれど。

それはそれでいいかもしれない。奈緒は自分でも意外なほど、ゆったりとシートに座りこんでいた。

さっきまでと変わらない口調で希沙良が話しかけてくれたことで……こんなに気持ちが楽になるとは思わなかった……。

Scene 6

三時間目終了のチャイムが鳴った。授業中だけかけることにしている眼鏡を外し、十九郎は自分の席を立った。

「里見君。そんなに急いでどこへ行く」

がん、とドア枠に脚をかけて行く手をふさぎ、そんな風に声をかけてくる者が約一名。

「図書室にね。今の授業に感銘を受けたものだから」

あっさりと十九郎が答える。これは半分嘘である。教師の解釈に納得のいかない部分があるので、文献をあたりにいくのだ。

「なんだなんだ？　ドイツ観念論か？　実践理性の優位か？　ヘーゲルよりは絶対カントだろう、里見君の興味をひくのは」

「平家物語の授業で、どこを聞いていたら十八世紀ドイツ思想になるんだろうな」

「君とは一度じっくりと哲学の話をしたくてな」

にやりと笑うのは、一見したところ哲学とは縁のありそうもないロック少年である。

西城敦、という文学的な名前を有し、並の教師では歯の立たないような頭脳の持ち主である彼は、しかし一方で本校随一の人気ロックバンドのリーダーかつ名物ボーカリストでもあり、さらに他方では現役の生徒会長であったりもしたりする。彼がこれだけ派手な肩書を背負わなければならない原因のひとつには、この学校の生徒会役員が、選挙制ではなく前任者の指名によって決められていることがあげられるであろう。とにかく目立つ人間なら片端からひきずりこむシステムなのだ。

「まあカントとヘーゲルはいずれの機会にとっておくとして、おい、図書室は逃げないが俺の話は逃げる。情けの心があるならば聞け」

西城は強引に決めつけて、十九郎を廊下に連れ出す。自分の周りにはこの手の人間が多いな、と十九郎は内心で呟いた。

「ライブがあるのだよ」

前置きも何もなく、西城はそう切り出した。

「ピアノは困るよ、西城」
きっぱりしすぎる口調で、十九郎が予防線を張る。
「おぬしが困っても俺は助かる。おまえは自分が困らなければ俺が困ってもいいと言うんだな？　それでも友人か？　それでも同志か？」
「その言葉をそのままかえしたいな」
「まあそう言わんでくれ、頼む！　このとおりだ！　この際モーツァルトでもビリー・ジョエルでも中島みゆきでも文句は言わん。おまえがいないと間がもたんのだ、正直なところ」
西城は切々と訴えた。どこまで本気かわからないが、世話になっている相手ではあるし無下に断るというわけにもいかないだろう。十九郎はしばしのあいだ考えこんだ。
とにかく問題は、時間的に余裕があるかどうか、である。ピアノを弾くこと自体は趣味のひとつだからそれほど抵抗はない。しかし。
「日取りは？」
「思いたったが吉日。今月二十九日だ」
西城の一言で、傾きかけた気持ちが見事にひっくりかえった。
「なかったことにしてくれ」
「おいおいっ。生徒会が常日頃どれだけ里見君のために尽力していると思うのだ」
「――その生徒会だが、麻生が困っていた理由がわかったよ。頼みの生徒会長は総務会を蹴っ

てライブハウスに雲隠れするようだね」
「う。な、なぜそれを……」
やれやれ、と十九郎は息をつく。
大体、わざわざ試験一週間前にライブを敢行するあたりが天才肌の西城らしい。普通はもう少し無難な頃合を狙うものではないのか。自分としても、できるなら日頃の恩義に報いてやりたいのだ、本当は。
よりによって十一月二十九日。
「時間が空けば、突発で顔を出すということで……考慮はしておきたいと思うんだが」
これが精一杯の譲歩である。ううむ、と西城は唸った。
「どうしても駄目か」
「二十九日は駄目だ」
「そうか、八方美人の里見君らしくもなく強硬な態度に出たな……これはよほどのことと見てやろう。無理強いはするまい」
「……不本意ながら礼を言うよ」
あまり素直に喜ぶこともできず、十九郎はあいまいな言い方をする。
八方美人というのはひどい言われようだが、西城の目は確かだ。これでその『よほどのこと』の正体が知れたらどうなることであろう。

「巨頭会談ですか？」

西城の後方から声がかかった。

ひょいと顔をのぞかせたのは、両者の後輩にあたる麻生少年である。

「おお、麻生君か。わざわざ二年の教室までご苦労だな。まあ聞け、里見君はつれない奴なのだ。友を友とも思わん奴なのだ」

「心に決めた人でもいるんじゃないですかー？」

芝居がかった西城の発言に、麻生少年はしれっとした答えをかえす。

「やはりそう思うか？　いくら口説いてもなびかんのはそのせいか」

「どうせ我々のことなんて眼中にないんですよ、はじめから」

本人の目の前で勝手なことを言いあうあたり、ふたりとも大した性格の持ち主としか思えない。負い目があるぶん強いことも言えず、十九郎はあえて口出しを控えた。まあ——借りはいずれ返せば良いのだ。

小さく咳払いをする。

「それで麻生……用件は？」

「そうでした」

きっ、と物言いたげな目を十九郎に向け、麻生少年はおもむろに口を開いた。

「お電話です」

「……それは……ありがとう」
——十九郎は抑揚のない返事をした。

Scene 7

山手線に別れを告げて新宿駅構内の地下道に入ると、希沙良は東出口に足を向けた。さすがに西口方面は学校関係者の目がありそうなので避けることにする。
外に出たら補導員につかまったりはしないだろうか、と奈緒はびくびくしていたのだが、堂々としてろ堂々と、と希沙良に叱られた。要はハッタリなのであるという。
「運の問題だろ、あんなのはさ。俺ってその手の運は強いんだ、なぜか」
察するに、こういう風に学校をサボることがよくあるらしい。そんなに簡単に学校を休めるものだとは奈緒は知らなかった。
しかしよく考えたら、それは自分のためなのである。頼まれもしないのにこうやって一緒に行動してくれて——見返りがあるわけでもないのに。
「！」
改札を出たところで希沙良がハッと目を上げた。駅ビルのエレベーター前の照明が、不安定な点滅をはじめている。

小さく舌打ちして希沙良は奈緒をひきずり階段へ向かった。地上に出る。いい天気だ。通行人の途絶えぬ横断歩道。カメラ屋の宣伝音楽がガンガン聞こえてくる。流れの悪い車道と、無秩序な店の並び。

通学カバンは駅の脇のコインロッカーに入れた。それから、足にまかせて歩き出す。

時計は十一時をまわっていた。希沙良が何かを言いかけた。

「和泉君、上！」

奈緒が声をあげた。反射的に希沙良は地面を蹴り、奈緒はぐいと腕を引かれてつんのめりそうになった。

がしゃん、という甲高い音。

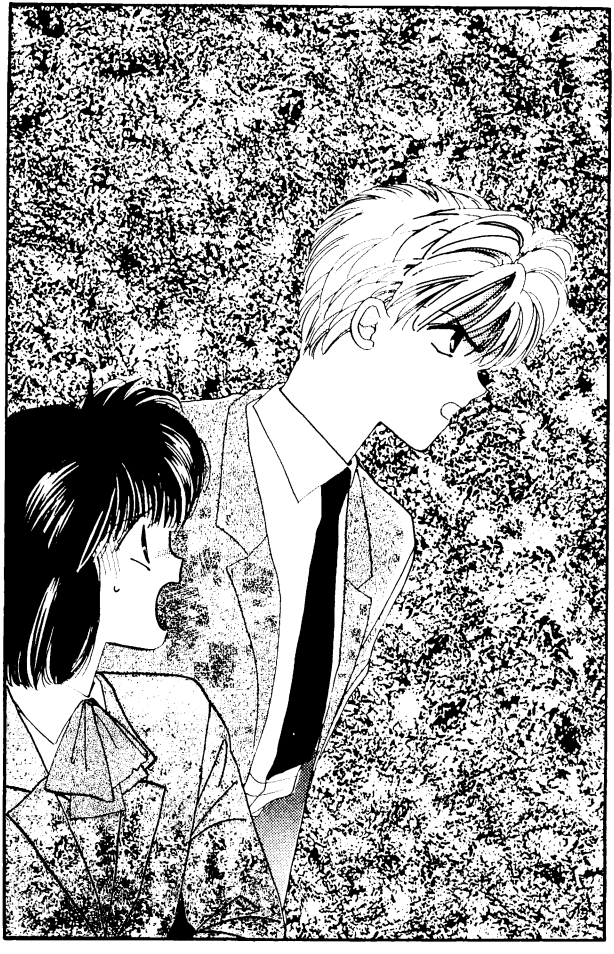
「……やってくれるよなあ」

希沙良が呟く。歩道にはガラス片が飛び散り、それまでふたりが立っていた所には街灯の首から上がぐしゃりともがれて、落ちていた。鉄柱が折れるなんて、さすがに偶然の事故とは思えない。

「行くぞ」

注目を浴びるのは困る。希沙良は足早にその場を離れた。怯えた様子をかくせぬまま奈緒がついてくる。

妖者のいやがらせも、ここにきてずいぶん本格的になってきた。希沙良の存在が己の力を妨



げていることを認識して、邪魔者を排除する方向に動き出しているのだ。むこうも焦りはじめている。

「……あれも、あたしのせいなの？」

横断歩道を渡りながら、奈緒が尋ねた。細い声。

「一応そういうことになる」

ぼそりと希沙良が答える。

「どう――なっちゃうの？　このままどんどんひどくなってくの!?」

今のようなことが次々に起きたらそのうち死人が出てしまう。奈緒は喉をつまらせた。いったい何がどうなっているのか全然わからないけれど、とにかくあんなこと二度と起きてほしくない。

「あたし、どうしたらいいの!?　和泉君ずっといてくれるわけじゃないんでしょ!?　いつまでもあたしこのままなの!?」

「そんなことはないっ！　ガタガタ騒ぐな、絶対今日中にカタつけてやっから！」

恐慌状態に陥りかけた奈緒を、正面から希沙良が怒鳴りつけた。奈緒は口をつぐんだ。

見おろして、希沙良が微妙に表情をやわらげた。

「……腹、減らないか？」

「え？」

「ちょっと早いけど、今のうち食っとこうぜ。あ、おごらねえからな俺は」
そんなことを言って、すたすたとハンバーガーショップに向かい出す。
奈緒は黙ってその背中を見上げ、自分の腕をつかんでいる希沙良の手に視線を移した。
（女の子にもてるのかもしれない、この人は……）
なんとなく、そう思いつく。外から見るとただぶっきらぼうで冷たくて乱暴なようだけど。本当は。もしかすると女の子の扱いがうまい人なのかもしれない。きっとそのくせ本人は無意識で。
だから……期待しては駄目だ。
（え？）
自分の発想にびっくりして、奈緒は我にかえった。期待？　何を期待するというのか。何を考えているのだろう。
「あ、その前に電話。今ちょうど休み時間だ、あいつ」
希沙良が腕時計に目をやり、足を止める。すぐ目の前に電話ボックスがある。
「ちょっと待ってろ……と、あ、そうか……」
奈緒から手を放しかけて、希沙良が顔をしかめた。
少し思案して、制服のポケットをさぐる。取り出したのは小さなプラスチックのプレートだった。和泉、と彫ってある。

名札、だ。こんなダサいもんつけられるか、と校則を無視していつもポケットに入れっぱなしにしているのである。とりあえず、術者が身につけていた物であることに違いはない。名前、というのも重要な意味をもつ。わずかなりとも希沙良の波動を伝えてくれるはずだ。

「持ってろ。お守り」

奈緒に渡して、それからそっと手を放す。

何も起こらなかった。

左手に握った白のプレートを奈緒は見つめた。希沙良は電話ボックスのドアを開く。

『……期待シテハ駄目ダ』

かすかな呟き。

奈緒は脇を通りすぎていく人々の流れを見やった。

『期待シテハ駄目ダ』

期待なんかしてない。してないったら。

けれどプラスチックの手ざわりは……ガラスや金属ほどには冷たくなくて。

冷たくなくて……。

「ねえ、ちょっといい?」

不意に横から声をかけられた。

振りかえる。女の子がひとり、隣に立っていた。

希沙良と同じ制服だった。奈緒は目をみはった。知り合いだろうか。
「こんにちは。あたしね、みゆきっていうの。よろしくね」
人なつっこい口調。
きれいな女の子だ。あかぬけて、お洒落で。長い髪が一房だけ黄色いのは……脱色したのだろう。そういえばスカートも長めのように思える。けれどそれが全然だらしなく見えなくて、彼女にぴったりと似合っている。あんまり美人なので、奈緒はなんだか気圧されてしまった。
「急に声かけちゃってごめんね。ひとつだけ訊きたいんだ。あのさ、全然悪気じゃないから気にしないでね」
ぐいと奈緒に顔を寄せて、彼女は声を落とした。
瞳をのぞきこむ。
「――和泉とどういうカンケイ?」
(え!?)
ぎしりと希沙良が電話ボックスのドアを押しあけた。
「こら、みゆき。なあにやってんだおまえは」
受話器を耳にあてたままだ。待たされているらしい。
みゆきと呼ばれた彼女のほうは、わざとらしく嫌な顔を作ってみせる。
「和泉には用がないんだってば。ちょっと見かけたからさあ、やっぱアイサツしなきゃと思っ

て」

「おい、そいつに変なこと吹きこむなよ。今日一日、ワケありで預かってるだけだからな、それだけだからな、勘違いするなよ。——げ、もしもし?」

言うだけ言って希沙良は電話に舞いもどる。ボックスのドアが閉まり、みゆきは肩をすくめた。

「失礼だよねえ、あいつ。あんなきっぱり言わなくたっていいじゃん」

「あの……?」

ようやく奈緒が口を開く。ああ、とみゆきは笑顔になった。

「そっか、びっくりしたよね。あのね、あたしさ、昔つきあってたんだ和泉と」

どきり、と奈緒の心臓が鳴った。

にっこりとみゆきが邪気のない笑い方をする。

「すーぐ駄目になっちゃったけどね。嫌いじゃなくてもね、気持ちがつづかないんじゃダメなんだよね。和泉ってかわいそうな奴でさ、そういうとき嘘つけないもんだからさ……。あたしも踏んばりのきかない女だし」

どきどきと胸は鳴りつづけている。

「あたしごときが何言ったってしようがないとは思うんだけど、やっぱ責任っていうかさ、誰か根性のあるコが現れてくんないと安心できないっていうか、そういうこと考えてね……う

ん、あんたが和泉の『彼女』だったら励ましてあげたかったんだ。それだけ。なんかあいつに言わせると勘違いらしいけど、一応話しといてもいいよね……」

大人びた表情でみゆきは言葉を切る。

「でもきっと、あたしと同じようなこと考えてる人間って沢山いるんだろうねえ。ふふっ。とんでもないよね、和泉って。女には優しいし『彼女』がいるうちは浮気しないし、みんな泣くに泣けないってやつだよね」

「……振られちゃうんですか？」

「半々くらいかな。言われる前に自分から逃げちゃうコもいる。あたしは見事に振られたヒトだけどね」

ぽつりと訊いた奈緒に、さばさばした調子でみゆきは答えて、それから電話ボックスのほうをうかがった。希沙良が受話器をおろしたところだった。

「だからおまえやめろっつってんだろうが！　何話してんだよ、こそこそとっ」

ドアを開くなり希沙良が叱りつける。

「心にやましいところでもあるんでしょ、和泉は」

「あたりまえだっ」

「いばることないじゃん、ねえ」

くすくすとみゆきは笑った。スカートをひるがえして背を向ける。

「ま、お互いサボリについては口をつぐもうね。じゃね」

後ろ姿も、芯がしっかり通っていてきれいだった。奈緒は人ごみにまぎれる彼女をじっと見送った。隣で希沙良はぶつぶつぼやいている。

『期待シチャ、駄目ダヨ……』

低い囁き。そんなのわかってる。あんなに魅力的な女の子。それでも駄目なんて。ならきっと自分なんて問題外。

いや、もともと関係ない。馬鹿馬鹿しい。そんなんじゃないんだから。

「ったくあいつは何をフラフラしてんだか。ほら、行こうぜ」

苦い顔でひとりごちると、希沙良はまた奈緒の手をとって歩き出そうとした。

(イヤだ!)

衝動が背筋を駆けのぼった。スパークした。

(そういうのはイヤだ!!)

瞬間、希沙良が鋭く振りむいた。息を呑む間もなかった。ぐいと肩を抱き寄せられ、足が地面から浮いて、その直後すさまじい破裂音が奈緒の耳をつらぬいた。

車道を行く車の急ブレーキ。通行人の悲鳴。

……しばらくの余韻。

ざわめきが広がる。

「……」

そろそろと奈緒は顔をあげた。何が起きたのか。

まず気づいたのは、自分が歩道に座りこんでしまっていることだった。しりもちをついたかたちだ。目の前に……は、グリーンのブレザー。

「!?」

ぎょっとして見る。希沙良のブレザーだ。歩道に両膝をついた姿勢で、希沙良は奈緒を胸に抱きこんでかばったのである。奈緒は視線を移動し、三メートルほど先に、原型をとどめぬまでに粉砕された電話ボックスを見出した。

「つつつ……」

かすかに希沙良の声。

希沙良の腕の中からごそごそと抜け出して、ようやく奈緒は彼の顔を見ることができた。愕然とした。

こめかみを押さえた左手の指のあいだから……地面に落ちたのは、まぎれようもなく鮮血の色。

「い、ずみ、君……？」

「ハンカチ持ってない？」

顔を伏せたまま希沙良が言う。

ロボットのような動きで奈緒はスヌーピーのハンカチを差し出した。希沙良は傷口をそれで無造作に覆うと、あんがい平然とした様子で身を起こした。空いている右手で奈緒のひじをつかみ、立たせてやる。

「急げ」

ぽつりとそれだけ言って、ガラスだらけの現場はそのままに、大股で歩きはじめる。混乱した頭を抱えて奈緒はそれに続いた。砕けた電話ボックスの周りには野次馬が集まっている。放っておいていいのだろうか。

ずかずかと直線を歩き、角を曲がり、裏道を通って、それから希沙良は三階建てのハンバーガーショップに奈緒を引っぱりこんだ。

「ダブルバーガーとテリヤキバーガーとポテトのLとコーヒー。一緒に頼んどいて。あとで金は十九郎に払わせる」

入り口で立ち止まり、そんなことを言いつける。押さえたハンカチには血が滲んでいる。さすがにその物騒なりでカウンターのお姉さんと対面したくはないらしい。まだはっきりしない頭のままで奈緒は言われたとおりにカウンターへ向かい、気がついたらしっかり自分のぶんのチーズバーガーもオーダーしていた。

トレイを抱えて階段をのぼり、人のまばらな三階禁煙フロアの窓際に陣取る。

向かいあわせの椅子に腰をおろしたところで。

突然がっくりと希沙良がテーブルに上体を伏せた。奈緒は心臓が止まりかけた。
「い、和泉君!?」
「びびったよなー……まいったまいった」
深々と希沙良はため息をついている。腰を浮かした奈緒は、そのまま次の動作に移れなくなってしまった。
「気を抜いたんだな、俺が。だから俺『抑え』には向かないっつってんのに。あ、三時過ぎには十九郎が合流するからな。さっきそう打ち合わせたから」
「三時？」
なんとか椅子に座りなおしながら、奈緒が訊きかえす。
「それで六時間目が終わるんだ、あいつが」
顔をあげて希沙良が言う。ハンカチを外す。もう血は止まっている。
しかし額には斜めに傷が走って、見ていると痛々しい。せっかくの整った顔が。奈緒は眉をひそめた。希沙良ひとりがこんな危険な目にあって——同じような力を持っているはずの十九郎は何をしているのだろう。
「……交替制なの？」
「え？　何が」
「だから、どちらが学校を休むか、とか」

「表向き交替制だけど、まああくまで表向きだな」
希沙良はあっさりとしている。実際のところ、十九郎に学校を休ませるわけにはやはりいかない。ごねてみせることはあるが、それはみせるだけであって、デモンストレーションの範囲にとどめているつもりだ。
「えらく忙しい奴だから、あいつは」
「なんで？」
「……知らないけど」
「和泉君は、忙しくないの？」
「……忙しいけど」
「それって不公平にならないの？」
「ちがうっ。それは絶対にちがう！　根本的なところでちがう！」
力をこめて希沙良が断言した。奈緒は口をつぐんだ。
希沙良はどこか遠い目になって、コーヒーに手をのばす。
「……かかってる期待の量が全然ちがう。多分」
ふと語調を弱め、そんな風につけ加えた。
その言葉の真意は、奈緒にはわからない。けれど……。
（——また）

胸中のつぶやき。

（まただ……）

憶えのある感覚。理由の見えない……重い、気持ち。

そうだ、あの電車の中で自分が希沙良を怒らせてしまった時。あの時も、もやもやとこんな気持ちに包まれて、それで何か言わずにいられなくて馬鹿なことを訊いて。あれはどうして。

そういえばさっき。電話ボックスが砕けた直前に自分が感じた衝動。あれはどういうことだったのか。なんだか、今の気持ちと少し似ている。

「なんにしても、新宿ってのはいい所だよな」

ブラックのコーヒーを一口ふくんで、希沙良が話題を変えた。

「お互いに無関心ってところがあるだろ、歩いてても。どんなカッコしてようが許されるし、よほどのことがなきゃ注目されたりしないからさ、楽だよな。俺、イナカのほうのさ、道行く人みんな知り合いって空気、ダメなんだ」

「あ、あたしも！」

「だろ？　いいから放っといてくれって気になってくるんだよなー」

思わず身を乗りだして同意した奈緒に、希沙良は苦笑めいた表情を向けた。

（あ）

奈緒は息をつめた。

笑顔。はじめてだ。

「まあ多少の異常現象なら許されるからな、ここなら。それで新宿を選んだというわけだ」

「山手線は？」

「あれは暇つぶし。金かからないだろ、あれって」

希沙良はテリヤキバーガーにかぶりついている。

見ていると、がつがつと三口程度できれいに片づけて、間もおかずにダブルバーガーに手を出し、これまた魔法のようなスピードで食べ終わってしまった。よく食べるなあ、と奈緒は感心した。男の子って、みんなこうなんだろうか。

「でもさあ」

ポテトをつまみながら、希沙良が口を開く。

「どこもかしこも新宿みたいになったら、やっぱり人間、ダメになるんだろうな」

「……うん」

奈緒は小さく頷いた。

誰も振りむかない、誰にも干渉されないところ。

そんな場所でしか安らげない人間は、きっと淋しい人間なのだろう。理屈でなら、そう思う。理屈だけれど。

（同じこと考える人って、いるんだ）

がさがさとチーズバーガーの包みを開いて、そんなことを思った。
希沙良もきっと何かを抱えていて、だから。
（でも）
割りこんでくる反論。
（でも和泉君には、あの人がいるじゃない）
「なんでそんなにトロトロ食えるわけ？」
希沙良が呆れたように頬杖をついた。奈緒は目を上げた。
そんなにもたもたしていたつもりはない。いつものペースである。
「和泉君が、早すぎるんだと思う」
「みんなそう言うなあ、女って」
希沙良は癪にさわることを言う。台詞に実感がこもっているあたりが憎たらしい。
「目の前でいつまでも食われてるとさあ、こっちまでほしくなるじゃん」
「まだ食べられるの!?」
奈緒はあっけにとられた。食欲魔人か、こいつは。
「そんな化け物みたいに言うなよ。普通だぜ、こんなの」
ぬっ、と希沙良が手をのばした。
何を言う間もなく、食べかけのチーズバーガーが包み紙ごと奪われた。そのまま、ためらい

もせずに希沙良が。
「えええええっ!?」
ばくり、と一口。
食べかけのチーズバーガーを。
「サンキュ」
四分の一になったバーガーが奈緒の手中に戻ってきた。
(嘘――っ!!)
これを、この残りをどうしろというのか。奈緒はめまいを感じた。人が口をつけたものを。女の子が食べてるものを、こいつは。
昨日知り合ったばかりの女の子相手に、こんなことをできてしまう奴だなんて。抵抗のかけらもなくできてしまう奴だなんて。見れば本人はすずしげな顔をしている。これが常識だとでもいうのか!?
とんでもない奴。
さっきの彼女――みゆきの言葉が胸によみがえった。
本当にとんでもない。これではどんな女の子だって。
泣くに泣けない。
(でも泣くに泣けないってことは……憎めない、のか、な……)

そうだ。少なくとも、希沙良は嫌いな相手だったらこんなことはしないだろうし、嫌われていなければ女のほうは期待するだろうし。なんだか、保証をもらったような気になってしまうし。

——ある程度は、好きだよって。

和泉は嘘をつけないから、とみゆきは言っていた。そういえば。

はあ、と奈緒はため息をついた。嘘はつけなくて、嫌いは嫌いと言って、そのくせ女には優しくて、だからこそ期待が強まって、なるほど凶悪だ。

「これ、あげるから」

奈緒は行き場のないチーズバーガーを、そろそろと希沙良に差し出した。

「あ、そう？　悪いな」

希沙良は罪の一つの字も感じていない様子で、それを口の中に放りこむ。奈緒は喜ぶべきか悲しむべきかわからなくなってしまった。

Scene 8

業界二位の大会社「片桐建設」を柱とする一大コンツェルンを実質的にひとりで取りしきっている切れ者こと片桐龍太郎氏には、実子養子をあわせて二十三人の子供がある。

本妻との間にできた子供が四人、外に作って認知した子供が五人、あとは身寄りのない者や家庭に恵まれぬ者を養子として引きとったケースである。当初から龍太郎は血縁によって跡取りを決めることはしないと公言しており、そうすると彼が次々に見込みのありそうな子供を引きとったのは当然、伊達や酔狂ではなかったということになる。彼自身に言わせると「私は子供が好きなだけであって、それぞれの将来は本人に選ばせるさ」となるのだが、それを言葉どおりに受けとる者は皆無に近かった。実際のところ彼の子供たちはいずれも豊かな才能に恵まれた者ばかりで、すでに壮絶な後継者レースははじまっていると言って言えないことはないのだ。

現在、実子であり長男である剣一が二十六歳で龍太郎の片腕として働き、最も有力な跡継ぎ候補と見られている。その他、企業経営をきらって別の道へ進んだ者や年齢がまだ低い者などを除いて、本格的にエリートコースを邁進している者が十人以上はいるであろう。

その候補者グループの最年少者が、里見姓を名乗っている十九郎であることもとうに周知の事実である。

強制されたわけではない。むしろ夏江はトップ争いには批判的なほうなのだ。父の龍太郎も、学生のうちは遊べなどと言ってきている。だからこそ——些細なことでつまずいて遅れをとることなど、十九郎には許されていないのだ。あくまで自分の意志でやっていることなのだから。

（さて、どうするか……）

昼休み。人のいない生徒会室の電話の前に立ち、十九郎は思案に暮れた。

とりあえず、父が不在であることを願って受話器を取る。ダイヤルしたのは、父の第三秘書のデスクに直通でつながる番号である。

「松井さんですか？　……里見ですが」

『ああ、坊ちゃんですか。ご無沙汰ですね、松井です。どうしました？』

実直な若手秘書の明るい声がかえってきた。十九郎は個人的に彼とは仲が良いのである。よく世話をみてもらっている。

「すみません、ちょっと頼みがあって。学校が終わるまでに車を――いや、バイクのほうがいいな、僕のバイクをいつもの所までまわしておいてくれますか」

『バイクでいいんですね？　了解です。三時前にはお届けできると思いますよ』

「よろしく頼みます」

片桐の人手を自由に使えるという点では、十九郎は父に優遇されている。龍太郎が斎伽の一族に関して理解を示しているためであろう。

「それから二十九日の件なんですが」

『あっ、ちょっと待ってください。実はすぐ隣でボスがわくわくして待ってらっしゃるんですよ』

「――」

ボス、というのは言うまでもなく片桐龍太郎その人のことである。十九郎が何を言う間もなく回線が切り替わり、エネルギーの塊のような声が受話器からとびだした。

『なんだ、どうした小僧。松井と仲良くしとる暇があったら私につきあったらどうなんだ。このところちっとも顔を出さんじゃないか。と一さんはとっても淋しいぞー』

「それは申し訳ないことをしました」

苦笑するしかない。タイミングが悪かったらしい。

『そうだ、来週あたり馬場につきあえ。なんだったらゴルフでもいいぞ。と一さんは十九郎の顔を見たくて泣いとるぞ。ふむ、カラオケという手もあるな』

「ちゃんとお仕事なさってるんですか?」

『それについては自信がないな』

「心配です」

そうか、と十九郎は納得した。自分のまわりには強引な人間が多いと思っていたが、その筆頭はこの父親だったのだ。

『ところで二十九日は大丈夫だろうな。期待しとるぞ、私は』

「――期待、ですか?」

先手を打たれてしまった。十九郎は慎重に問いかえす。

『ああ、平日だというのにすまないがな。実は十二月から二月までな、私はヨーロッパをまわりっぱなしで帰ってこれんのだ。クリスマスも新年もないのでは悲しいからな、私は今回に賭けているぞ、はっきり言って』

「……そう、だったんですか」

『どうだ、ちゃんと働いているだろう私は』

一種の壮行会というわけか。

龍太郎自ら国外に出るとなると、やはりこれは……そうないがしろにできるものではない。今度ばかりはどうしようもないか。

「そういうことでしたら、お見送りするしかないですね」

『よーし、十九郎は良い子だ。その調子でブラームスを一曲頼むぞ』

「本気ですか？」

『とーさんは十九郎のピアノが大好きでなっ。なあ松井っ』

「……わかりました、善処します」

どんどん深みにはまっていくような気がするのは、己の修行不足のためだろうか。

出席を確約して受話器を置き、十九郎は小さくため息をついた。もう、二十九日に関して他にどんな用件が舞いこんできても不思議はないと思っている。例えば斎伽忍からであるとか。

「先輩」

部屋の入り口から、麻生和浩が顔を見せた。電話が終わるまで待っていたらしい。
「どうした？　入っていいよ」
そう十九郎に言われてなんとなくホッとしたような表情になり、するりとドアをくぐってくる。十九郎は時計を見た。
「役員会議があるんじゃないのかい」
「西城さんの鶴の一声で中止になりました」
「……麻生も苦労する立場だね」
「もう慣れました……」
人生を悟りきったかのごとく麻生少年は肩を落とした。
確かに、多少のことであれば会議などせずとも西城の頭ひとつで解決がついてしまう、という事実は否めない。しかしそうやって会議をチャラにした西城が意気揚々と書記二名監査一名を引き連れバンドの練習に消えていくのを見送る立場の麻生少年が、ここで自分が踏んばらねば生徒会は軽音部に乗っとられてしまう、と決意を固めるのも無理のないことと言えた。
「でも、里見さんほどじゃないです」
麻生少年が面持ちを改める。
「それは突然だな」
十九郎は困ったような笑みを浮かべた。麻生少年が顔をしかめて言葉を続けた。

「笑いごとじゃないですよ。西城さんも口ではいろいろ言うけど、本当は心配してるんですからね！　あんまり頑張っても、倒れちゃったら元も子もないって」
「そこまで無理はしていないよ」
「その言葉が曲者なんですよ、先輩は。無理の基準が他人と違うんだから！」
「ひどいな。本当に大丈夫だよ」
やわらかい語調のまま十九郎が言う。これは本心である。
なぜなら——努力なんて、まだ全然足りていない。自分などと比べようもなく優れた人を、どこまでも完璧な存在を、手も届かぬほどの力を有した若者を十九郎は知っている。無理をするとは、彼に追いつこうとするようなことを言うのだ。あの美しい人に。
「それより、例の総務会のことだけどね」
穏やかに十九郎が顔を上げた。麻生少年は口をつぐんだ。
「文化委員長は四組の佐藤だろう。俺が事前に行って個人的に話をつけておくよ。それでいいかな」
「あっ……はい！　助かります！」
とたんに明るい顔になって麻生少年が頷く。直後、がっくりと頭を抱えこんでしまった。
「ああもうっ、言ってるそばから自分がこれだからなあっ」
「いいんだよ、麻生」

「駄目ですよっ。先輩がそれだからついフラフラと頼りたくなるんです。これでは情けないです。僕はいったいなんのために里見さんの跡を継いで副会長になったんだろう……」

腕を組んでぶつぶつと呟いている。十九郎は微笑して、苦労性の後輩の肩を叩いた。

「麻生、食事は？」

「え、まだです」

「じゃあ一緒に食べよう。もう食堂も空いてるんじゃないかな」

「……僕って現金な奴かもしれない」

CLIMAX

映画館と本屋と電器屋が好きなのだと希沙良は言う。

金がないという理由で映画は見送り、デパートをハシゴして書籍コーナーと電気製品売り場をうろつくうちに、いつの間にか時間はどんどん進行していた。自分たちはなんで一緒にいるんだっけ、と奈緒は何度も自分自身に確認しなければならなかった。例の電話ボックス以来とくに大きな事故も起こらず、これでは本当にただのデートと変わらない。

（冗談！）

必死になってその思いつきを打ち消す。希沙良は新型のコンポをつらつらと鑑賞している。

店の時計は二時三十二分。
三時を過ぎたら、このふたりだけの時間は終わりだ。
「そうか、そろそろだな」
希沙良が呟いた。奈緒は少しだけ胸をつかれて、それを聞いた。
「駅前まで戻るぜ」
「あ、ちょっと待って！」
歩き出そうとした希沙良を引きとめる。出足をくじかれてつまずきそうになり、希沙良が振りむいた。
上目づかいに奈緒が見上げる。
「……お手洗い、行きたい」
「あ、そう……」
複雑な顔で希沙良が答え、そのフロアの片隅へ進行方向を変更した。エレベーターの脇。ピンクのプレートがかかった女子トイレの前で希沙良は奈緒の手を放した。
「お守り、持ってるな？」
「うん」
「じゃ俺、エレベーターの前にいるから」
さすがの彼も女子トイレには抵抗があるらしい。そそくさと去っていく希沙良の背を見送っ

て、奈緒は照明の派手な洗面所に踏みこんだ。
誰もいなかった。
暖房は効いているのに、なんだか寒いような気がする。奈緒は視線をめぐらせた。
——鏡。ひやりと白い。
大きな鏡に、制服姿の自分が映る。
なんの取りえもない、ごくごく平凡な自分の顔。べたっと重たくてカッコの悪い髪形。パーマは禁止されているから、ブローも決まらなくて。
制服も、ただそのまま着ているだけ。なんの工夫もしていない。ウェストを絞ったりしてきれいに見せてる子もいるけど、自分はそういう知恵がまわらないから。
ずっと希沙良の隣に、こんな自分がいたんだ。あの見るからにカッコイイ、すらりとして綺麗な、道行くおばさんの注目までひいてしまう男の子の隣に。見ていた人はどう思っただろう。希沙良自身はどう思っているのだろう。
『ダカラ……期待シチャ駄目ダッテイウノニ』
でも優しいんだ、あの人は。思ったことなら口に出す人だから、嫌いなら嫌いとちゃんと言うはず。
『アイツニハ、ミユキミタイナ女ガ似合イダヨ』
……それは、そうなんだろうけど。

「期待なんかしてないもん」
鏡に向かい、奈緒は声に出して言いきかせた。
「別に……誰にだって、そんなものしないから……」
『嘘ダヨ』
「嘘じゃない！　みんな嫌いだもん。みんな馬鹿で、あたしのことなんか」
あたしのことなんか、わからない……。
言葉が跡切れて、奈緒は洗面台を見つめた。
（でも、同じこと、考える人……いるよ……）
誰もふりむかない新宿が好きだとか言って、そのくせ誰も助けてくれない渋谷は嫌いだとか言って。そんな自分と同じようなこと考えてる。
（いるよ……）
『デモアイツハ、オマエノコト見テイナイヨ』
鏡の向こうからあの低い声。
『本当ハオマエノコト、見テイナイジャナイカ』
奈緒は沈黙した。
本当は。
あの人は。

——鏡に映る青白い肌。
まわりの人間を見ようとはしていても、あの人は。
結局ただひとりのことしか考えていないじゃないか。
「ワカッテタクセニ」
だからみゆきたちも泣くんだ。
「ダカラ怒ッタクセニ」
昔のカノジョも行きずりの女もみんな同じ扱いじゃないか。手をのばしても、目を見てはくれないじゃないか。だからイヤなんだ。そんなんじゃイヤなんだ。
見てよ。ちゃんと見てよ。でなきゃはじめから振りむいたりしないでよ。
あんたのことを見てくれる人なら、ちゃんといるんでしょ。目移りなんかしなくていいじゃない。
そんなに恵まれてるくせに、何が淋しいの。
『嘘ダヨ、全部』
自分が思いこんだだけ。
『ココニオマエノ居場所ハナインダヨ』
——びしり、と目の前の鏡にひび割れが走った。
まっすぐに奈緒は顔を上げて、その亀裂を見つめた。

「！」
轟音とともに鏡が粉々になる。奈緒はそのまま衝動にまかせて洗面所を駆け出していた。
「おいっ……」
音を聞きつけて来た希沙良と、ちょうど出口で正面衝突しそうになる。勢いにのせて奈緒はそのブレザーの胸をつきとばした。
「嘘つき！」
一声、たたきつけるように叫んで身をひるがえす。フロアの中央へ向けて走る。
「え!?」
不意をつかれて希沙良の反応が遅れた。
「なんだよそれっ！」
体勢をたてなおして、ダッシュする。奈緒は買い物客の間をすりぬけ、エスカレーターを駆けおりた。人の流れに阻まれて希沙良のスピードがやや鈍る。
ここで例の人間ばなれした跳躍力を披露するのは、できれば避けたいところだ。ひとりでやるとフォローがきかない。すべりやすいフロアを走りぬけて、希沙良は無理やりエスカレーターの列に割りこんだ。
☆
走って走って走って……。

なんだか頭の中はすっきりと一色に整理されている。なんて楽なんだろう、と奈緒は漠然と考えた。ぜんぜん迷わなくていいのだから。

運動音痴の自分らしくもなく、足は軽々と動いている。他人の足みたいだ。人にぶつかりもせず、歩道をすりぬける。

こんなことなら、はじめからあの声の言うことを聞いていればよかった。あんな人たちになんて、出会わなければよかった。

「待てバカっ」

後方で希沙良が怒鳴っている。まだ追ってきている。どこにそんな義理があるわけでもないのに。

もう見捨ててしまえばいい、自分のことなど。

駅からずっと離れつつある。人通りが少なくなってくる。奈緒は角を曲がり、細い路地に入りこんだ。新宿のどこを走っているのか、自分では見当もつかない。

ビルとビルの隙間。うす汚れたポリバケツと積みあげられたビールケースの脇を通って、反対側に出ようとした時だった。

「もらったっ！」

希沙良が跳んだ。奈緒の頭を越えて、目の前に着地する。行く手をふさがれて奈緒は急停止した。

「おまえなあっ」
希沙良が手をのばし、腕をつかもうとする。
「イヤだってば！」
言いかえすのと同時に、後方に積まれたビール瓶が一本、希沙良の足元まで飛んで炸裂した。希沙良が一歩下がる。
「何が嘘なんだよ！　言えよ！」
身構えたまま、希沙良が怒鳴った。
「知らない！」
「知らないですむかよ！　傷ついたぞ、俺！　責任とれよっ！」
「よく言うよっ！」
それを言うために希沙良は追ってきたのだろうか。奈緒はじりじりと後ずさりをした。
「傷つくような神経持ってて、どうして女泣かせて平気なんだよっ！」
「……何言ってんだ、おまえ……」
「別れるんだったら、最初っからつきあわなきゃいいじゃんよっ！　あんたといると、女みんなだまされるんだからっ！」
「ちがうだろっ!?　別れるかどうかなんて、つきあってみなきゃわかんねえだろ!?　……ちょっと待て、なんでこんな話になってるんだ?」

「うるさい！」

ケース一個分のビール瓶が一斉に降った。両腕を頭の上でクロスさせて一時的に結界を張り、希沙良が身をかばう。ガラスがとび散って路地を覆いつくした。

「じゃあ、言うけどっ」

腕の構えを解き、希沙良が声をはりあげた。

「その程度のこと、〈妖の者〉の力借りなきゃ言えないおまえはなんなんだよ！　俺が嘘ついておまえが傷ついたってんなら、正々堂々と俺とケンカすればすむ話じゃないのかよ！　なんのために口がついてんだよ！」

「口で言ったってわかんないよ！」

「ああわからねえよ、わかるかよっ。同じ人間でもないのにそう簡単にツーカーでわかってたまるかよ！　おまえ女で俺は男だから、ますますわかるわけないんだよ！　あたりまえなんだよ、そんなこと！　あたりまえすぎて言い訳にもならねえよ！」

「――意地悪！」

今度は地面に散っていたガラスの破片が、ふわりと浮き上がった。希沙良が厳しい目を上げた。

「そうやって俺を追い払って、それからどこに行くんだよ」

破片が空中で集結し、疾風に乗って希沙良に迫る。



「奈緒！」

「！」

びくり、と奈緒が震えた。ガラスの雨が凍りついたように宙で停止した。

希沙良はまっすぐに目を向けている。

「……ひとりが平気な奴だったら、はじめから妖者なんか呼ぶかよ」

奈緒は答えない。

「俺もガキだからさあ、はっきり言って何もわからねえよ。自分のことで手一杯だよ。——けど、おまえだって結局ただのガキだろ」

ただの子供。

振りむいてほしい時に振りむいてもらえなくて、拗ねている、ただの子供。

裏切られることに慣れてしまって、けれど信じたくて、だけど諦めて、それでも未練がましく誰かを待っている。結局はそれだけの。

奈緒は首を横に振った。

「違ウ。説教ナンカ聞キタクナイ」

自分の声を聞いて、愕然とする。何……誰の声？

希沙良はわずかに眉をひそめている。

「言葉ナンテ……イクラデモ嘘ガ言エルンダカラ。言ウダケダッタラ、誰ニデモデキルンダカ

ラ！　アンタニドレホドノコトガデキルッテイウワケ!?」

違う。これは自分の声じゃない。自分の言葉じゃない。誰かが勝手に。

自分の心を、自分の体を、誰かが勝手に動かしている。

「奈緒」

希沙良が自分の名を呼ぶ。

「なんか俺に言いたいことないか？」

「ソンナモノ」

ある。ひとつある。ひとつだけ。

「オマエナンカ」

そうじゃない。そうじゃなくて。

「オマエ……ジャマ……ス、ル、ト……」

「聞こえない！」

希沙良が怒鳴った。奈緒は一気に声を押し出した。

「たすけて!!」

『――オマエ！』

あの低い声が怨念をこめてとどろいた。奈緒はよろめいて地面にぺたんと座りこんだ。背中から何かがずるりと剝げ落ちた気がした。

ハッとして振りあおぐ。真っ黒な影が目に映った。

（え!?）

暗雲をちぎって運んだような、どす黒い影法師。

宙にぶかりと浮いて、その尾はまだ奈緒の背にまとわりついている。状況を把握しきれず、奈緒は口をあけたままその影を見上げていた。

『邪魔シヤガッテ、邪魔シヤガッテ、コイツ！』

影法師が唸る。妙に幼稚っぽくそれは響いた。

「手間かけやがって！」

希沙良が言いかえし、再び身構えた。ガラス片が渦を巻いて希沙良に集中した。暴風。

雨あられの勢いに、結界を維持したまま希沙良は動きを止められる。我が身を守るのが精一杯だ。敵もいいかげん自棄になっている。

「みっともないぞ、悪あがき！」

『コノヤロウ、死ンジャエ！』

もう一ケース分のビール瓶が、ぐらっと宙に浮いた。

反動をつけてから、動けずにいる希沙良に向かって弾丸のように襲いかかる。奈緒が悲鳴を上げかけた。

「！」

ばん、と派手な破裂音がした。
ガラスの暴風雨が見えない壁にさえぎられて玉砕した音である。
希沙良の背後にすべりこんだのは、甲高いバイクの急ブレーキ。
強固な結界に包まれた希沙良が力をぬき、肩ごしに振りかえる。ヘルメットを片手で脱ぎながら、十九郎が地面に降りたつところだった。
「すごいな、もう最後の仕上げじゃないか」
「……なんでわかった？」
ある程度は答えを予測した口調で、希沙良が尋ねる。新宿の片隅のまた片隅のビルのかげ、などという場所を探しあてたことに対する問いである。
「なんとなく、だな」
軽く微笑して、十九郎は希沙良の隣に並んだ。
「おまえ実は俺に探知機かなんかセットしてないか？」
「そんな物に頼るほど落ちぶれてないつもりだが」
「……深く考えると怖いかもしんない」
希沙良の身を包んだのは、言うまでもなく十九郎の張った結界である。さすがに今回は希沙良から「余計なことするな発言」が聞かれない。ギリギリまで彼ひとりに任せたのが良かったのかもしれない。

『ナンダナンダオマエタチ！　畜生、コノヤロウ！　バカバカバカ！』

むくむくと動きながら影法師がわめきたてた。

「いい相手だな」

ヘルメットを地面に置き、十九郎が言った。そのまま跪いて片手を地にあてる。

「ガキなんだよ、ただの」

胸の前で両の手首を重ね合わせて、希沙良が言いかえす。かっ、と手刀が発光し、周囲にふわりとオーラがただよう。

「バランスがとれてるじゃないか、希沙良と」

「むかむかむかっ」

奈緒の目には、希沙良の手刀の光は見えない。

けれど、彼の表情が確かに変わったのはわかっていた。その眼差しは、獲物を前にした狩人のように——生気に満ちて。厳しさを残しつつも、勝利を確信した色をたたえて。

『死ンジャエ！　邪魔スルナ！　潰レチャエ！』

ビールケースの山がひとつ残らず浮き上がった。がらがらとぶつかりあう嫌な音。たちのぼる殺気。奈緒は目をみはった。

滝の流れのごとく……殺到する。正面から希沙良をめがけて。

「行け！」

十九郎が短く声を発した。
「おうよっ！」
希沙良が地面を蹴る。障害物は希沙良の身に届くことなく、その直前で次々と十九郎の結界に阻まれた。目の前で起きるガラスの爆発にまばたきひとつせず希沙良はまっすぐに影法師へ向けて突進した。
「！」
奈緒の頭の上で影法師が悲鳴を上げた。
『ナニスルンダヨウッ』
逃げることができないのだ。十九郎の念に縛られて。
「お仕置きに決まってんだろうっ！」
『ウワアアンッ』
「泣くな、ガキ！」
希沙良が跳躍し、黒雲をすっぱりと両断した。しゅう、と空気のぬけるような音がした。
次の瞬間。
『ナンデソンナニイジメルンダヨオーッ』
ボン、と破裂したと思ったら、影法師はきれいに四散して見えなくなってしまった。
浮遊していたビール瓶が重力にひかれて下に落ちた。希沙良が軽い身のこなしで着地する。

精神体の状態の〈妖の者〉を滅しても「玉」にはならない。しかし斎伽忍を喜ばす義理はないので、希沙良は気にもとめなかった。本当は、いつもこんな風に犠牲を出さずに妖者を撃退できれば理想的なのである。

「大丈夫ですか？」

立ち上がって、十九郎が奈緒に声をかけた。

奈緒は座りこんだままだった。十九郎に手をさしのべられて、ようやくハッと我にかえる。

「あ、あの」

「気をつけて」

自力で起き上がろうとして、バランス感覚が狂いまくっていることに奈緒は気づいた。体が地面から十センチほど浮いている感じだ。結局十九郎の腕につかまらなければ立っていられなくて、しかし彼の手を借りるというのは実はものすごく畏れおおいことなのではないかと思ったりもして、内心でひどく奈緒は焦った。希沙良の手ならともかく。

「そこでまっすぐ女のほうへ行くあたりが十九郎」

希沙良がひとりでぐちぐち呟いている。

「当然だろう、そんなこと」

「嫌われるんだぞ、フェミニストって」

「おまえほどじゃないよ」

「……今の発言に根拠はあるのか!?」

なんだかんだ言って希沙良は、仲間はずれにされかけたことを拗ねて絡んでいるだけのように奈緒には思える。要するに子供なのだ。やっぱり。

自分もそうだ。拗ねて絡んだのだ。希沙良に。

でも――。

「おい」

希沙良が目を細めた。

十九郎が視線を転じる。その肩にまとわりつくように、ふわふわとにじりよってくる暗雲の切れ端。

野球ボールにも満たない大きさだ。ほんのひとかけら。

『……ズルイジャナイカ……』

虫の息で、それがぼそりと訴えた。

『……二対一ナンテ、ズルイジャナイカッ。弱虫ッ』

希沙良がふと胸をつかれたように顔をしかめた。それを見たかどうかはわからない。十九郎が鋭く影法師のかけらを見据え、空いている右手の指を一度だけ鳴らした。あとかたもなく影が吹っとんだ。

「無礼者」

十九郎がそんなことを呟いたのは、奈緒の気のせいではないはずだ。
（こ、この人って……）
声を出すのも忘れて、奈緒はその横顔を見上げてしまった。

☆

足のふらつきはおさまったが、体重が一気に減ったような感覚は消えなかった。体がものすごく軽いのだ。今まで気づかずに背負っていたものが抜けたからだと十九郎は説明した。
心に隙があるとあのような暗雲――〈妖の者〉を呼びこみやすくなるのだ、ということもその時になってはじめて聞いた。自分と一緒に行動している間、希沙良はわざとそれを言わなかったのだろうか。それとも単に説明を怠ったのか。後者のような気もするが、真相は奈緒にはわからない。けれど……たとえ言われていたとしても、反発しか感じなかっただろうということはわかる。
「もう大丈夫だよなっ」
希沙良が決めつける。新宿駅のコインロッカーまで来て、革のカバンを取り出した時だった。
「わかんないけど、頑張る」
「えらいっ」
和泉君も頑張って、と言おうかと思ったがやめた。何を、と突っこまれると困る。

「ところで、おまえどうする？　三鷹に行くわけ？」
希沙良が十九郎をふりかえる。十九郎は後方に停めたバイクを指さした。
「あれがあるからね……。でもまあ、今日はマンションのほうに置いてもいいか。まっすぐ帰ろうかな」
「んじゃ、ついでに送っていこうとか思わないか？」
「誰を？」
「俺」
「……」
「だって今日重労働だぜ俺っ。額の傷が目に入らないか、ほらほらほらっ」
「わかった、譲歩しよう……」
十九郎はため息をついている。この人も大変だなあ、と同情しながら奈緒はカバンを持ちなおした。
「それじゃ。――どうも、ありがとう」
ふたりに向きなおる。十九郎は目礼し、希沙良は片手をあげた。
「またな」
またの機会なんて、あるんだろうか。そう思いつつ、けれど奈緒も手を振った。名前だって学校だってわかっている。本当に会おうと思えば、きっとまた会える。

「またね」

彼女が駅の中へ小走りで去っていくのを見送って、十九郎は隣に立つ希沙良に視線を移した。

「なんだよ」

いつも通りの顔で、希沙良が振りかえる。

十九郎はそのまま少し間をおき、それからゆっくりと口を開いた。

「いや……実は、二十九日のことなんだけど……」

「二十九日？　ああ、あれ、もうすぐか。あのさあ、言わなかったっけ、俺その日試合なんだよ」

「え？」

十九郎が小さく問いかえす。希沙良はテニス部に所属している。

「日帰りなんだけど、静岡まで行ってくるからさ、帰り遅くなっちまうだろ。だから今年はお邪魔しないって、夏江さんにも言っといて」

「ああ……そうか、わかった……」

「試験前だってのに、無茶だよなあ。とりあえず俺、学年代表だから出ないわけいかないんだけどさ」

希沙良はあっけらかんと言葉を続ける。十九郎はあいまいな表情でそれを聞き、片手をあげ

て口許にあてた。何やら考えている。
「何かまずいこと言ったか俺？」
いぶかしげに希沙良が眉をひそめた。
「いや、そうじゃなくて」
考えを断ち切るように十九郎は顔を上げた。希沙良と目を合わせる。
目を合わせて……十九郎は全開の笑みを向けた。
「じゃあ、今日これからお祝いをしようか。少し早いけど」

ending

学校を無断欠席したことについては、担任にも親にもさんざん叱られた。わかってはいたものの言い訳を考えていなかったので、解放されるまでがなかなか大変だった。

けれど、希沙良と一緒にいたことはなぜか誰にも伝わっていなかった。白井陽子が口をつぐんでくれたのである。

「ああ、そのこと……」

ふたりきりになった時に理由を尋ねてみたら、彼女は目を伏せて微妙な笑い方をした。

「だって……絶対何か事情がありそうだったでしょ？」

「それはそうなんだけど」

あれは傍からは痴話ゲンカとしかとれなかったらしい。事情は一応、ちがう次元の話として存在してはいたのだが。

「……あのね、本当言うと私も今……つきあってる人、いるんだ」

「――え？」

きょとんとして奈緒は目をみはった。

「大学生なんだけど……誰にも、親とかにも内緒だから……」

だから他人事と思えなかったのだ、と彼女は言った。

クラスの中にいる時とはちがう顔をした女の子が、そのとき奈緒の目の前にいた。何を言えばいいのかと、奈緒は反応に迷ってしまった。

「実は私びっくりしたんだ、早水さんってそういう風に見えなかったから。でもなんか、私だけじゃないんだなあって安心した」

にっこりと彼女が笑う。一生懸命で、その姿はかわいい。

恋をしている女の子は……かわいくて、素敵だ。

「うん、ありがと」

気がついたら、そう頷いていた。

「……でも、あの人とはもう、会わないと思うな」

「え、そうなんだ……」

奈緒の言葉に、彼女は悲しげな顔になる。奈緒は目を上げて、元気づけるように笑ってみせた。

「でもまた、頑張る」

「――うん！　頑張ろうね！」

希沙良とはなんともなかったのだ、と言うのは簡単だけれど。

こんな風に素敵な嘘もある。白井陽子の姿を見ていたら、なんだかそんな気がしてきた。

母親は相変わらずあのままだが、世界中の人間がみんな母親と同じだというわけでもない。多分。

和泉希沙良は、十二月の半ばになってから、一度だけ渋谷の駅前で見かけた。後ろ姿だったが間違いはないはずだと奈緒は思っている。ふわふわした髪を肩までのばした女の子が、彼の隣を歩いていた。かわいい子なのだろう、きっと。優しくしてもらえるといいけど。

けれど、希沙良に声をかける気にはなれなかった。

あの一日は、十一月二十一日は、記念すべき大切な思い出だから。あの一日を思い出に変えるためには、自分はもっとオトナにならなきゃ駄目だ。

コドモ同士じゃ恋愛はできない。

(でも和泉君に名札もらった女なんて、あたしくらいしかいないよね)

それだけはなんとなく、誰かに自慢したかったりする。例えばどこかで偶然みゆきに出会ったりしたら、そんな話題で盛りあがれそうな気がする。

それから——ひとつだけ、気づいてしまったことがある。

自分は希沙良とあの従兄の関係がうらやましくて妬ましくて、割りこめなくて拗ねたけど。

今になってわかってしまった。希沙良は怖がっているのだ。あの従兄の負担になること。ずっとずっと、怯えているのだ。頼らずにいられないのに、頼りすぎることを恐れて。だから淋しくて。

（馬鹿なんだから）

わかっていても、口に出して言ってはいけないこと。

言ってやっても、今の希沙良にはどうしようもないこと。

だけど大丈夫。本当は大丈夫。そんなこと、あの従兄本人をちゃんと見てたら誰にだってわかるのに。

いつか誰かが教えてあげられるはずだ。もし誰もいなかったら、その時は自分が劇的に再会して教えてやってもいいけど。

その前にまず、二度目のデートの相手を捜さないと。

「バイバイ」

渋谷の人ごみに呑みこまれていく希沙良の背中に手を振って、奈緒はいつもの改札へ向けて歩きはじめた。

黄金時間が見えるまで

その頃あたしは、ものすごい遅刻魔かつサボリ魔であった。

中二の二学期とか言ったら、クラブとか委員会とか文化祭とか体育祭とか遠足とかコンパとかデートとか、若者はここで燃えなきゃ嘘よね、っつー感じのイベントが目白押しのはずなんだけどさ、どうしたことかあたしはしょっぱなでその手の波に乗りおくれてしまったらしくて、しょーがないからよく寝てよく食べることにしてたの。まあ人間そんなに急いでも一生のうちにできることなんてたかが知れてるからさ、のんびりしたほうが得だなあって、思ったりしたわけだね。うん。

それでもってまた、あたしらの担任が家庭科のセンセイだったんだけど、この人の授業が超つまらないし眠くなるし声はきこえないしみんなはおしゃべりするしで、あたしはその四時間目も例のごとく教科書のかげでぐっすり熟睡していたのでありました。あたしの席ってのが窓際の一番後ろという特等席だったんだ、これが。で、しかもうちのクラスって男子が少なかったもんだから、あたしの隣って誰もいなくてさ。天国。

タンパク質と脂肪と……ビタミンDで……栄養素かどした？

「池田さん」

頭の上からキレイな声。

「池田さん、起きて」

はいはい。

のそりと顔あげたら、もう授業は終わってて、みんなガタガタと机動かしてお弁当タイムに突入するところだった。
目の前に立ってるのは、ポニーテールの彼女。
あれー？
「どしたの？」
あたしのほうから訊いてしまった。あたしって滅多にクラスのコと口きかない奴なんだけど、記憶ちがいじゃなけりゃ彼女があたしに話しかけてきたのって、これがはじめてだったんだ。
「あたし、先生に頼まれたから」
妙に力こめて、彼女。背が低い。肩も細いな。
「池田さん、お昼すぎるとすぐ早退しちゃうから、よく見ておいてって」
ほおおーっ。
あ、そっかあ、そういえば学級委員だったんだ彼女。しかしあの担任、よくそんなとこに頭まわったなあ。
「だから、ね」
ちょっと緊張したように彼女は息を吸いこんだ。
「お弁当、一緒に食べよう」

「……へえ」

これはなかなか画期的な提案だった。あたしは悪い意味じゃなくて、ホントに感心してしまった。

一世一代の決心、みたいな口調でそんなことを言ってきた学級委員が、うちのクラスで一番の美人と名高い神原亜衣さんであった。

☆

「へえ、すごいじゃん、それー」

「おほほほほほほ」

「そんで池田はどしたの、その後」

吉村が尋ねる。これは隣のクラスのいわゆるお不良さんで、今時がんばって不良少女やってるこいつがあたしは結構好きだった。だって根性要るよ、体制に反抗するのって。あたしにゃとてもそんな体力残ってなくってさ。

「どしたって、一緒にメシ食ったよ」

「えらいじゃーん。吉村びっくり」

「だって神原さん美人なんだもん」

「そのくせ今ここにいる池田って何者？　吉村わからなーい」

「おほほほほほほほ」

実は現在は五時間目、場所は図書室の隅である。

せっかく気にかけてくれた神原さんには悪いんだけど、五時間目の社会のセンセイってのがまたあたしの嫌いなタイプでさ、授業そっちのけで「うちの娘が」「そういえば先生の若いころ」「テレビで言ってたけど」って、関係ない話ばっかりするんだよなあ。そういう余談で生徒の人気取りしようってのが見え見えなの。くだらない。講談師じゃないんだから、授業の中身のほうで勝負すりゃいいのにさ。そのくせ寝てると怒るんだよ、あいつは。

「イシザキの授業聞くより、『ベルサイユのばら』読んでるほうがよっぽど歴史の勉強になるじゃん」

「ベルばら好きっ！　吉村行きます！　あーいー、それはー、悲しーくー」

「……吉村って元気な奴」

あたしが呆れても吉村は愛、愛、あーいー、と歌いつづけて下さった。さすが日頃の鍛練がちがうわ。

「でも亜衣ちゃんってかわいいよねえ」

いきなり吉村が話をすっころばせる。今のアイアイはもしかしてその伏線かっ？

「あれはヒットだよ、ヒーット。顔よし勉強よしスポーツよし、うちの学年で三本の指に入るね」

「そっちのシュミはないでしょうね。吉村サン」

「あたしゃ美人が好きなだけ。宝塚最高。わたしはッ、おフランスの、女、王ーっ、なのですうっ」

「美人じゃなくてよかったよ、あたし」

あたしは本棚に寄りかかって、ため息をつく。膝を抱えて座りこんだポーズ。吉村は窓ぎわのエアコンにひじをついて、体重をかけてる。他には誰もいない。もし誰かが今ドアを開けても、本棚のかげになってあたしたちのいる場所は見えない。

「一組に関口っているじゃん」

思い出したように吉村が口を開いた。

「バスケ部のハンサムっ！　あたし好きっ！」

吉村とちがってあたしは顔のいい男が好きである。こっちのほうがまだ一般的だよね。二枚目はミーハーの王道だっ。

「そうそう、そのヤサ男。あれさあ、ウワサだけど、亜衣ちゃんに気があるみたいだねー」

「どひゃーっ。くらくらきちゃうーっ」

あたしは悲鳴をあげた。に、似合うっ。似合いすぎるっ。それはっ、実現したらおいしすぎるよはっきり言ってっ。

かたや長身バスケ部さわやか笑顔のハンサム男、かたや成績優秀スリムでコンパクトのキリリ美女、くっついちゃったりしたら理想のカップルそのものだよ。うわあ、生きてて良かった

なあ。じーん。

「よーし、行け行け関口っ、がんばれニッポンっ！　池田和美が応援しているぞっ」

「亜衣ちゃんが人のものになってしまったら吉村は悲しい……」

「あんたそれ迷惑だよ、本人にとって」

「いいんだ、あたしは遠くから見守るだけで」

そ、そのへんの心理はあたしにはわからんけど。

まあ、あたしらが仲いいのって、このミーハーという共通点があるからなんだよね。あたしは見た目キレイならなんでも好きだし。男でも女でも。

キレイな絵とかも好きでさ。そういえば。

で、だから神原さんが昼メシのお誘いをかけて下さったとき、あたしは教室じゃイヤだったんだよね。いつも美術室に行って画集眺めてるもんだから、昼は。だいたい教室で弁当食べるとなると、女の子たちってグループ同士で机寄せあって和気あいあいとデザートの交換なんかするじゃん。あたしパン買ってるし、そういう空気なじめないし、あたしが入ったら違和感かもしだしちゃって誘ってくれた神原さんにも迷惑かかっちゃうと思ってさ。

そしたら神原さんは、グループのほうを振って一緒に美術室につきあってくれたんだよ。あれにはびっくりしたなあ。それで、ふたりしてミケランジェロのキリストはカッコいいかどうかなんて話をしてたという。

「でも亜衣ちゃんみたいなタイプって、面クイじゃないような気がするなー」

吉村が言う。それはそうだな。神原さん、あのキリストは今ひとつ評価してなかったもんね。

「亜衣ちゃんには幸せになってほしいんだけどなあ」

「あー？」

あたしはエアコンにのしかかっている吉村を見上げた。何言ってんだか、この女は。

天井を仰ぐように背中をそらして、吉村は両眼を細める。

「マジメだからね、彼女」

「……」

あたしはその大人びた表情をしばらく見つめ、それから膝を抱えたまま視線を板張りの床に移した。

「そうだね……」

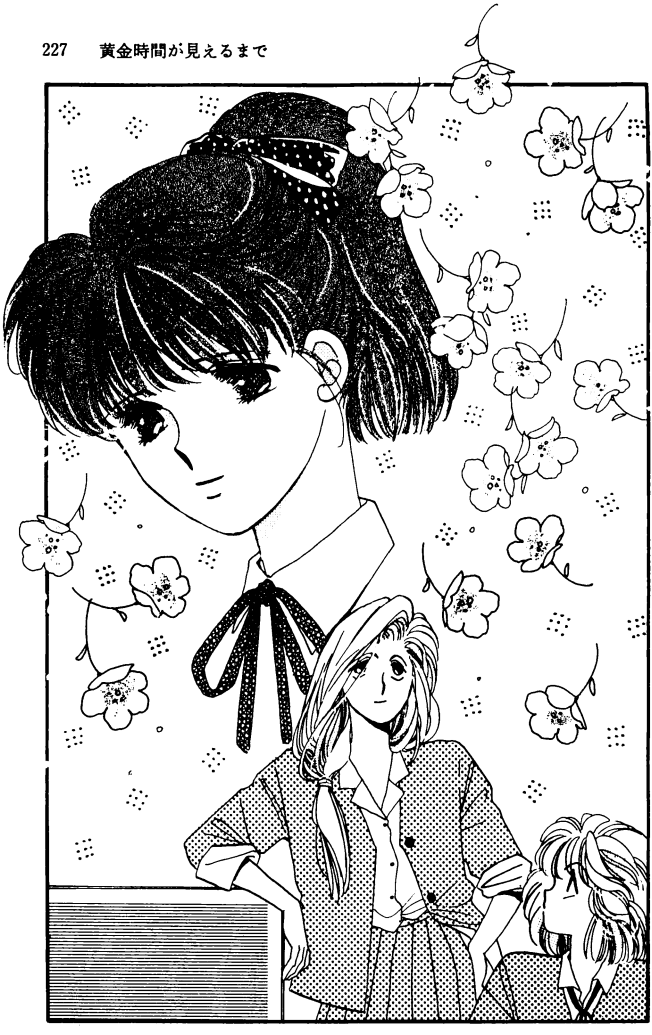
☆

「サボっちゃ駄目だって、言ったでしょー？」

困った顔で、神原さんはさとすような声をかけてくる。

「へへへへー。ごめんね」

この台詞もすでに何度目かになってしまった。つくづく進歩がないなあと自分でも思うんだ



けどさ。

学年のアイドルにかまってもらえるのは嬉しいけど、そう簡単にキッチリした生活には戻れないよー。自堕落しまくってるもんなあ。

「せめて一時間目の遅刻はもう少し減らさなきゃ。……あたし、なんだったらモーニングコールしてもいいんだけど」

「……一生懸命だなあ、神原さん」

どう見ても遅刻も寝坊もしそうもない神原さんがピシリと引きしまった表情でそんなことを申し出てくださると、あたしとしてはしみじみと呟かざるを得ない。本当、なんでそんなに一生懸命なのかなあ。

「一生懸命って、別に……」

神原さんが視線を逃がす。

「遅れる人は自覚が足りないんだから、本人の責任で来させればいいんじゃないの？」

いきなり脇からそんな言葉が割りこんできた。あたしは目を上げた。

あたしの机の横を通りすぎざまに、偉そうに上から見おろしてそう発言したのは……誰だっけ。篠田サン。神原さんのオトモダチ。

「そりゃそうだよねえ」

ひじをついて、あたしが答える。神原さんは篠田サンに向きなおった。

「でもメグちゃん、だからって……」
「人がよすぎるんだってば、神原さんは」
メグちゃんこと篠田は、それだけ言うと背中向けて行ってしまう。神原さんは言いかけた何かを呑みこんで、その後ろ姿を黙って見送った。
ふうん。
「神原さん、なんだね」
ひじをついたまま、あたしが口を開いた。意味をとれない表情で神原さんが振りかえる。
「だからさ、アイちゃんとかって、呼ばれてないんだね」
今まで気がつかなかったんだけど。
あたしが彼女のこと神原さんって言うのは、そこまで馴れなれしい間柄じゃないから礼を尽くしているのである。でもあれだけ好き勝手言う立場のおトモダチにもカンバラサンなんて呼ばれてるってのは、ちょっとばかり意外だった。
「……そういうの……頼んで呼んでもらうようなことじゃないし」
あいまいな口調で神原さんが答える。目を伏せて。
そうかなあ。頼めば呼んでもらえるんじゃないのかなあ。よく知らないけど。
クラスの連中と仲悪いってわけでもないのにさ。
「アイちゃんって呼ぶような人、いないの？」

「別に……」

あらら。そう呼びたがってる奴なら隣のクラスに約一名ほど心当たりあるけどな。教えてやろうか。

「じゃ親友とかは？」

「そういう……ひいきみたいなのはちょっと……」

は？　ひいき？

あたしがぽかんと口あけて見返したら、神原さんははたと口をつぐんで背筋をのばした。

「それじゃ、明日七時半に電話するから」

しっかりとそう言って、あたしの机離れて自分の席に戻っていく。あたしは何やら頭を抱えたくなってしまった。うーん、そうかー、ひいきかー。

☆

遅刻とか早退とかは生活の乱れのはじまりなんだそうで、生活の乱れってのは多くは家庭環境に問題があるんだそうである。

でもあたしの家ってのは別に、親が離婚とかしたわけじゃないし、夫婦仲が格別悪いってんでもないし、ひとり娘の和美さんがグレて家庭内暴力に走ってるっていうんでもないし、あくまでも普通の家だったりする。強いていうなら母親がものぐさで面倒くさがりなのが難点か？

「……ずみー」

電話のベルに重なって、もごもごと隣の部屋から母親の声。
「かずみー、でんわー」
でろりろでろりろとベルが呼ぶ。あたしはのそのそと布団をはいずり出る。モーニングコール三日目、これが池田家の朝であった。で、母親は起きてこないんだよ、そのまま。ちなみにうちの父親も、出版業界の人なので夜遅く朝遅い。だからまあ、あたしが勝手に朝メシ食って勝手に学校行って、それからしばらくしないとうちの両親は日の目を見ることがないのである。たまには娘の弁当くらい作れよと思うけど、どうせ自分も作らないからなんとも言えん。
「もひもひ」
ようやく受話器にたどりついて、あたしはまわらない舌を動かした。
『あ、おはよう……』
神原さんの声。あれ……？
「どしたの？　大丈夫？」
目がさめてしまった。なんか死にそうな声出してる。どうしたんだよ。折れそうに細い声。
『うん、あの……頭痛くて……今日、休むかも……』
全然エネルギーの足りない弱い声。
「ば、ばかッ！　そんなんであたしんとこ電話してくることないじゃんよっ！」
思わずあたしは怒鳴りつけていた。何考えてんだっ。ほんとにっ。

『でも……』

「でもじゃない！　ちゃんと寝なさい、そういう時は！」

『あの……』

「切るよ、ほら！　薬飲むんだよ！　じゃあねっ」

有無を言わせず受話器をおろす。いかん、興奮しちまったぜっ。

だってさあ、あたしのところに電話しなきゃあたしの人生が変わってしまうとか、誰かの命にかかわるとか、そういうんじゃないんだよ。単にあたしが時間にルーズな怠け者だっていう、それだけのことじゃん。フラフラになってまで律義にモーニングコールしてどうするんだっ、神原っ。

それでもって、その日ギリギリで学校に着いたあたしは、例の一組の関口がとうとう神原さんにアタックしてしかもOKをもらったというウワサを耳に入れて、少なからず仰天したのであった。

☆

「あーいー、それはー、切なくー」

「やめろってのに」

あたしと吉村はうちの教室の窓際によっかかって、校門を出る生徒の群れを眺めている。放課後の、もうクラブも終わるころである。

例のウワサは真実だったりしたので、吉村はうじうじと落ちこんでいる。あたしはこの展開、本当なら踊りまわって喜ぶところなんだけど今ひとつ釈然としないので、やっぱり悶々としている。神原さんは、あの日は欠席したものの次の日からはいつものようにキリッとして登校している。うーむ。

「あーれー？」

吉村が振りかえった。あたしもつられる。

「あ……」

教室の入り口で、問題の神原さんが立ち止まった。

この教室に残ってるのは、あたしたちだけだった。神原さんはノートとカンペンを抱えていた。鞄を取りにきたらしい。

「今まで部活ー？」

あたしをさしおいて吉村が話しかける。神原さんはちょっとだけ驚いて、だけどいつも通りの顔で答えた。

「そうじゃなくて……中央委員会」

なるほど、学級委員の責務を果たしてるわけだね。

「こいつ、吉村真弓。別に怖いお姉さんじゃないから」

これはあたしの台詞である。神原さんも、吉村の存在くらいは知ってたんじゃないかな。目

立つ奴だから。

「ども、吉村です。亜衣ちゃんとは一線を越えたおつきあいがしたいです」

「やめんかいっ」

免疫のない相手にはギャグにならんぞ。神原さんは目を円くしている。けらけらと吉村は笑って、それから肩をすくめた。

「でも、仲良くしたいのは、ホントだよ」

……こういうの上手いよなあ、吉村って。

「え、と……」

神原さんは口ごもって、戸惑った目を上げた。

「なんで、ですか？」

「カワイイから」

すかさず吉村が答える。おいおい。

「しかも悲愴感ただよってるし」

「……」

神原さんは沈黙してしまう。また吉村はひねくれたことを。あたしは脇から口を出すことにした。

「仲良くすんのに、理由も何もないでしょうが」

「池田が言うと説得力ないなー」
「一般論だよ、一般論っ」
「あの」
あたしがわめくのにかぶって、神原さんが口を開いた。
「……あたしは、あなたのこと良く知らないし、どうしてそんな風に思うのかわからないけど……」
まっすぐに芯の通った表情。
「これからは、悲愴感なんて見えないように、努力するから」
そう言って、机の上のかばん取って、ドアのほうに戻っていく。ひゃー、とあたしは胸の中で呟いた。振られてやんの、吉村。しかし神原さんってこのあたり……曲者だ。
「！」
ドアにたどりつく前に、神原さんの足どりがちょっと揺らいだ。もつれて。
吉村が窓の手すりから身を離した。
机と机の間に、神原さんが膝をつく。転んだんじゃない。座りこんだんだ。力なく。
片手で顔を覆うようにして。

☆

よく考えたら、こないだがはじめてってわけじゃないや。あたしが神原さんと話したのっ

て。

今ごろになって、あたしは思い出していた。そうだ、あれ、クラス替えの直後。担任がどうにも頼りにならなくてさ、自己紹介とか班決めとかの段取りなんて全然考えてないような人だったから、もう初日だけでこっちはげんなりしちゃって、

（「先生」なんて呼ばれるような立場なら、もう少し尊敬に値する中身を見せてくれなきゃサギだよなあ）

などと考えて、ボソッと、ついていけん、とかなんとか呟いたんだよ。そしたら。

「どうすればいいかわかってる人が、わからない人を見下してるだけで何もしないんだったら、結局変わらないよ」

ぽつりと、前の席から言いかえした声があって。そのあとすぐに彼女は学級委員に立候補してしまったから会話は続かなかったんだけど。

びっくりしたんだ。すごい頭よくて、前向きな発言じゃん。で、そのくせ担任のことはかけらも弁護してなくて偉いともなんとも思ってないのが見えまくってるから、性格悪いなーこいつ、とあたしは感心したのであった。そもそもそうやって胸のうち他人にバラしちゃうあたりが、ひねくれきってないというか練りが甘いというかまだまだかわいいというか所詮あたしと同レベルというかで、世捨て人してなくて好感を持ててしまったし。全部ひっくるめて、なんかマジメに世の中と向きあってる人だなあという印象が残った。しかしあれ、神原さんだった

んだなあ。すっかり忘れてた。
まあしかしそんなこと、今になってわざわざ本人に確認する気はないけど。
「やだなあ……」
保健室のベッドで、アイスノンを目の上にのっけた神原さんはしみじみと呟いた。
目の前が真っ白に光ってて何も見えないと彼女が言うから、それはいかんそれは目の使いすぎだと吉村が主張し、あたしたちは三人して保健室になだれこんだのである。たまたま保健の先生は不在であった。もう帰っちゃったのかな。
「例の頭痛ってのもさ、目の疲れからくるやつじゃないの？」
吉村が言う。神原さんは考えこんだ。
「わからないけど……」
「なんにしても疲れだよ、疲れ。少し休んでから帰りな」
強引な吉村の決めつけには、ずいぶんと迫力がこもっていた。こういう口調になると本性が出るんだよ。
「あ、もしかして関口と待ち合わせかなんかしてるとか？」
これを訊いたのはあたしである。神原さんはますます考えこんでしまった。
「えっと、今日は別に……委員会があったから……」
うーん、うーん、ひっかかるなー、その態度。もっと突っこむか。

「あのさ、だいたい、なんで関口とつきあうことにしたわけ？」
「……なんでって言われても……」
……それって考えこむような問題じゃないと思うんだよね、本当は。
これでは関口くんもかわいそうというものではなかろうか。
「ねえ神原さんってばまさか、『つきあう』って『一緒に帰る』の同義語だとか思ってたりしないよね」
ちょっと意地悪な質問だけど、思いきって言ってみた。顔半分アイスノンでかくれた神原さんは、しばらく間をおいた。
「……それ、近いかもしれない」
「おいおいおい」
あたしと吉村が同時に声を上げる。そりゃないでしょうっ。
それは良くないよ。なんというかもう、理屈以前に良くないよ。関口が泣くよ、それでは。
「でも、わからない。本当はよくわからない」
静かなんだけど、どこかきっぱりとした言い方で神原さんがつけたした。
「わからないうちに、可能性つぶしちゃ駄目だと思ったの」
う……うーん……。そ、そうなのかなあ。
可能性って……好きになる可能性？　でも普通、そういうこと考える以前に好きにならな

い？　む、むずかしいけど。
「しかし亜衣ちゃんのようなタイプは」
何やらおごそかに吉村が切り出した。
「どっちかっつったらスポーツマンより読書家の男のほうが好きでしょ」
な、何を偉そうに分析しているんだ？
「で、背は低めで、頼もしいっていうよりは『守ってあげたい』願望くすぐるタイプで、ハンサムよりはカワイイ感じで、マジメで頭良さそうな男が好みでしょ」
なんか口からデマカセのような気がするけど、吉村がビシッと断言する。と、神原さんがアイスノンどけて、こっちに目を向けた。
「――なんでわかるの？」
「ほどほど亜衣ちゃんと共通点持ってて、だけど亜衣ちゃんの持ってないものを持ってるということだね。ふっふっ」
う、ううううーん……。あたしにはわからん。

☆

結局それ以上深い話をすることもなく、あたしらはそれぞれの帰途についたわけだが。
それからも神原さんは何度も頭痛だの腹痛だの目眩だので保健室の世話になり、あたしは近くも遠くもない場所からそれを見ていた。ひいきはできんと彼女が言うからには、そういうス

タンスに立つしかないでしょうが。

関口と神原さんはいわゆる公認のナントカというやつになってて、いいように校内の注目を浴びているのだが、その実情は『つきあうっていっても……一緒に帰って、時々電話とかで話して……』程度の内容であることをあたしは知っている。よく続くよね。まあ、あたしが首つっこんでも仕方ないけど。

「ストレスだね、ありゃ。心労がカラダに出るんだよ」

神原さんが朝礼のとき貧血でぶっ倒れるに至って、吉村はそういう結論を出した。

「しかして、そのストレスの原因は？」

あたしが尋ねる。吉村は意味ありげな笑い方をした。

「ストレスの原因がないことイコール原因かな」

「……わからん」

「自分で考えな」

不良ってやだなあ。世間知ってて。

どうせあたしはものぐさで物知らず。

しかしストレス……ストレスねえ。あたしには縁遠い言葉だな。よっぽど家庭に問題でもあれば「どうしてウチはこんな家庭なのっ。ああっ、ストレスがっ」とかって悩んでみせても絵になるんだろうけど。学校も別に——好きでも嫌いでもないし。よく食べてよく寝てるし。敵

がいるってわけでもないし。

確か神原さんのところも、ごくごく普通の家庭だったよなあ。

そんなこと考えながら、いつものようにとろとろ通学路を歩いてた朝のこと。

「……しかしおまえ、うまくやったよなー」

前を行く連中が、一組の男子たちだった。四、五人のグループで。

げげげ、関口がいるじゃん。

今日はバスケ部の朝練はないらしい。むこうは当然あたしのことなんて知らないんだけど、ついついあたしは息をひそめて気配を殺してしまった。なんとなく。

アハハハ、なんて恥ずかしくなりそうに明るい声で関口は笑う。朝っぱらからさわやかな奴である。そうか、関口って案外……屈折のない奴だったんだ。

「でも神原って顔は文句ないけど、性格ってどうなわけ？」

グループの内のひとりがそんなことを訊く。言い方が無神経。

「……んー、俺よくわかんないなあ」

おいこら関口。

「頭よすぎるって感じかなー。時々わかんないこと言うんだよな……うん、哲学的っていうのか。意外とおとなしいしさー。あんまし会話ないや」

「つまんないじゃん。暗いんだな、なんか」

「んー、もっと面白いかと思ったんだけどさ……」

関口の声が遠ざかっていく。

道のどまんなかに立ち止まったまま、あたしは連中の制服の背中を見送っていた。

暗いとかつまらないとかって。神原さんを見ててその程度の言葉しか出てこないのか、おまえらは。神原さんの良さなんて全然わかってないじゃないか。見た目がよけりゃそれでいいのか。

バカでまっすぐな男は、それはそれなりにかわいいし好きだけど。

あんたの相手じゃないよ、神原！

「ばかやろうっ」

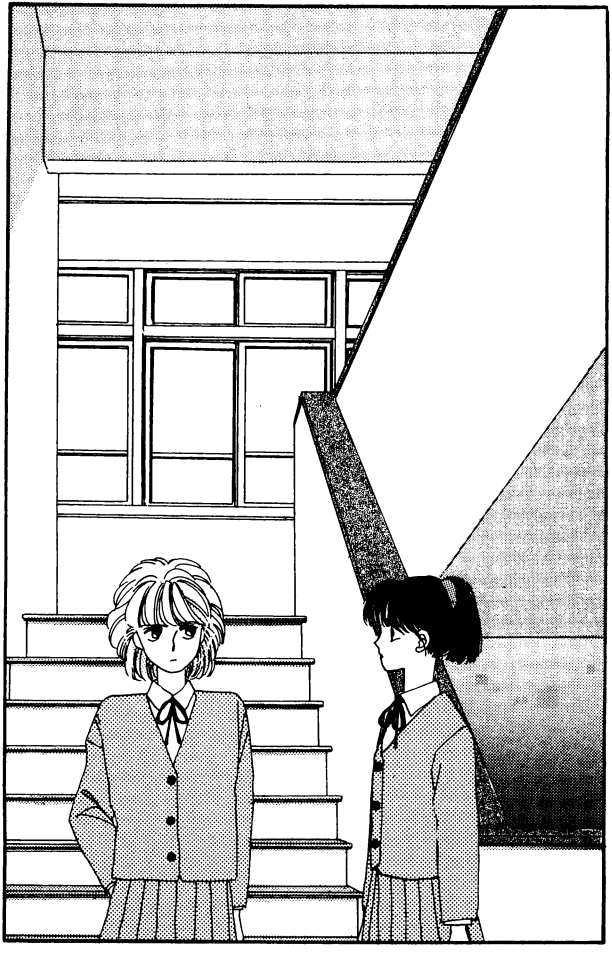
あたしはずかずかと学校に向けて歩きはじめた。自分のことでもないのに、何をこんなにぐらぐら怒ってんのかわかんなかった。とにかくあたしは怒りまくっていた。身も世もなく怒りまくっていた。地団駄ふみたいくらいに怒りまくっていた。

☆

「ねえ」

のしのし歩いたもんだから、学校に着いたのはめずらしく始業より五分は早かった。クラスメートの話に加わってる神原さんのところに突進して、あたしはそう声をかけた。

「来てよ」



あたしはなんだかケンカを売るような顔をしていたかもしれない。
時間を気にしながらも、神原さんは廊下の端の、人の通らない階段までついてきてくれた。
「どうしたの？」
尋ねる神原さんは、今朝も相変わらずキリリとしている。
キリッとして、隙なんか見せないで。でも。
「関口なんかやめなよ」
前フリも何もなくあたしが口を開いた。神原さんは目をみはった。
「あいつただのバカじゃん。あんたのことなんか何もわかってないじゃん。好きでもなんでもないなら、あんな男やめちゃいなよ！」
「――――」
なんでそんな事こいつに言われなきゃならんのだ、と神原さんが思ってるのがわかる。かまわずあたしは言葉を続けた。
「そんなんだから、あんたどんどんストレス溜めこんでいくんじゃん！　ストレス溜めて、体こわして、そんな風にまわりに平等に良い子の顔してどうするんだよ！　やめなよ、そういうの！」
「そうじゃない！」
いきなり神原さんが言葉を叩きかえした。

「そういうんじゃない！」
「何が!?　現に毎日保健室行ってて」
「ちがうの！　あのね、ストレスなんてのはね、言い訳なんだから！」
あたしの台詞をさえぎって、彼女が拳を握りしめる。
「ストレスなんて言葉なら、どんな人にでも言えるんだから！　ちょっと物知ってる人ならみんなそう言えるの、言えるんだけど、だからって何も変わるわけじゃない。そういう言葉を、切り札みたいに使うのは、ずるいんじゃないの？」
き、切り札って……。
「あたしがこんななのは、あたしが弱いだけ！　弱虫の証拠なの、こんなのは！」
……違うよ、それは。弱虫とか、そんなんじゃなくて。
しまった。あたしは今ごろになって我にかえっていた。言い方を間違えたんだ。おまえのそれはストレスだなんて、鬼の首取ったみたいに言ってもこいつには意味がない。そんなのとっくに自分でわかってるんだ。わかってるくせに。
「だから、放っといて」
目をそらして、はねつけるように彼女。
わかってるくせに、この程度じゃストレスじゃないとか思ってるんだ。不幸じゃないから。それなりにうまくやってるから。ちゃんとボロ出さずにうまくやってるから。

だけど。だけど、あたしは。本当はそんなこと言いたかったんじゃ——。

「わかんない女だなあっ」

怒鳴りつけて、あたしはガンガンと床を蹴りつけた。なんでこんなに面倒くさい性格してるんだよ、畜生！　なんでほんとに。

「え……」

神原のバカがふりかえった。

「な……なんで……泣くこと……」

「泣いてないよおっ」

「うそ、泣いてる」

「ちがうっ。泣いてないっ」

ガキみたいに泣きながらあたしは床にしゃがみこんだ。うろたえたように神原のバカも一緒に座りこむ。

「な、なんで泣くの？」

「それくらい自分で考えろっ。頭いいんだろっ」

チャイムが鳴りだした。ひとしきりあたしはわんわん泣きつづけて、神原は本当に何がどうなってんのかわからんという顔でずっとあたしの隣にしゃがんでいた。

一時間目がはじまっちゃって、どこの教室もしーんと静まりかえって、黒板にあたるチョー

クの音がかすかに聞こえてくるころになって。
ぐすぐすと鼻すすりあげながら、床についてる神原のスカートのすそを指でつかんで、それからあたしは情けない声を出した。
「友達になろうよお」

☆

吉村に言わせると、あたしのは泣き落としというんだそうである。……反論できない。
「いいんだ。どんなに卑劣な手を使おうと落としてしまえばこっちのもんなんだ……」
「亜衣ちゃーん、こんなこと言ってるよー」
「なんかそれって、あたしがうまく丸めこまれたような言い方じゃない？」
吉村に答えて、神原がふてぶてしい発言をかえす。むか。
「知らなかったの？　見事に引っかかったんだよ、あんたは」
「でもやっぱり、告白は相手に言わせたほうの勝ちっていうものね」
「そういう問題じゃないだろうっ」
「まあまあまあ。和美が泣いてたなんて誰にも言わないから」
こ、これが神原亜衣の本性である。この根性の悪さをいったいどこにかくしていたんだっ。なんだったんだあの良い子面はっ。
廊下であたしら三人がそんなことをくっちゃべっていると、通りすぎる連中が不可解な顔を

していく。どういう取り合わせだと言いたげだが、ふふんっ、貴様らも神原の外面にだまされておるのだよ。気の毒になあっ。

「しかし池田はさ、いいかげん亜衣ちゃんにモーニングコールしてもらうのやめなよね」

吉村が言う。うんうんと神原が頷いた。

「友達である以上は、甘やかせられないわよねー」

「……もはやあたしは何も言えん」

例の関口とは、神原は早々にケリをつけて現在はしっかりとフリーの身である。まあ当然の成りゆきである。二度とつまらん男に引っかかったりしないようタンカの切り方を教えてやる、などと吉村はほざいていた。これ以上たくましくなったら手に負えないような気がするけどなあ。

「今度はさあ、ちゃんといい男つかまえなよ」

もうこいつのために泣いてやるなんて恥さらしな真似は御免なので、あたしはしつこく念を押してやった。

「うん。見つけたら報告するから」

自信ありげに神原はVサインなどを出していた。けっ。

☆

時は移って春である。

中学卒業と同時に神原は、家を新築したとかで中野のほうへ引っ越していった。新宿から中野なんて、引っ越しというほどの距離もなくて、会おうと思えばいつでも会えるんだけど。

しかしさすがに道端でばったり出くわすようなことはなくなって、ちゃんと高校であの本性をかくしおおせているのだろうかと気にしていたら……手紙が来た。

入学式の時に理想のカタマリを発見。同じクラスのS君であることが判明。これは運命の出会いとしか思えない。頑張ります。

……何を頑張るんだよ、何を。

あいつもつくづく臆面がなくなったものである。あたしは大きくため息をついて、同時に相手の男に深く深く同情して、しかしさらに同時に、その男がろくな奴じゃなかったらあたしが直々に行ってまわし蹴りをくらわしてやるしかあるまい、なんてことを考えていた。

あとがき

どもども。皆様お元気してらっしゃいますでしょうか。あとがきに命かけてる若木です。実は（もうバレてるけど）若木はあとがきを書くのが大好きです。なんたってこれは幼いころからの夢だったのです。

だって、あとがきというのは自分の本にしか書けない、つまりプロの作家にしか書けないものではないですかっ。しかも一冊分しこしこと小説を書きためた末でなければ、プロの作家でさえ到達できないという奥の深い数ページ、それがあとがきだっ！　どうだ、すごいだろうっ！

というわけでみんながイヤがっても、例によってずるずる長いあとがきを書くぞ。私は。決意したぞっ。（何言ってんだかコイツは）

そんなこんなでオーラバスターの四冊目をお届けします。

今回は、ちょっと趣向を変えてオムニバス形式です。やりたかったんですねー、これが。

長短とりまぜレギュラーメンバー総ざらえゲストキャラ頻出の計四編すべて書きおろし抱きあわせ企画、お買い得だぜっ。過去最多のページ数が泣かせますでしょ。

読んでいただければわかりますが、前の三編はシリーズ一冊目『天使はうまく踊れない』と二冊目『セイレーンの聖母』の間にはさまる時期の、話です。亮介くんが高一の冬をやってる頃ですね。亜衣ちゃんの話だけが中学時代となっております。

しかし気の狂ったようにハイな一冊になってしまった。

なんといっても『セイレーン』『十字架』と大マジメなものが続きましたので（特に十字架はもう、もうもう……行くところまで行ってしまったよ）、今回に至って大反動がやってきたようであります。若木の行動のほとんどは「反動」の二文字で説明がついてしまう。悲しい。次はまた反動で亮介くんと忍さんをたくさん書くと思います。あと、いよいよ冴子さんだね。

なにはともあれ、ご意見ご感想、ご叱責ご質問、その他もろもろ、お手紙をお待ちしております。住所、書いといてね。

それぞれの作品についてコメントを少し。

『天使墜落』

雑誌コバルトではよく「女の子視点」でものを書いているんですが、文庫ではこれがはじめ

てです。どうですか？

で、やると思ったでしょ、このネタ。やらなかったら嘘だ！　という感じでやってしまいました。楽しかったな。しかし涼ちゃんはあの身長で靴が二十六センチって、けっこう小さめではないでしょうか。はて。

『迷える羊に愛の手を』

これ、書いてる最中にフロッピーの中身が消えたんだよっ！

涼ちゃんの「忍様のばかばかばか」を書いた直後だった。誰の妨害であるかはもはや明白である。あんまりだわ忍様、心が狭いわよっ。打ち直しは大変なんだぞっ。

まあサブキャラといい舞台といい、すっかり趣味に走った一作ですね。涼ちゃんは天使になったりウサギになったり羊になったり忙しい奴ですね（ちがうっ！　そうじゃないんだっ！）。

よく考えるとやらしい話のような気がするんですけど……そんなことない？　え、まだまだ足りない？　しょせん涼ちゃんではこの程度が関の山ですねー。うーむ。

『アニバーサリー』

タイトルは「記念日」とか、そういう意味の言葉です。裏タイトルはさしずめ「里見十九郎くんの優雅な私生活」でありましょーか。

いやもう、ものすごく久しぶりに希沙良と十九郎を書いたので、あまりの嬉しさに涙が出ました。七か月ぶりだもん。書く前から嬉しくて「急いで書いたらすぐに終わっちゃう……」と

泣いて友達にさんざん叱られた。どうせバカですよ。ちっ。

しかし希沙良がからむと話が派手になるのはなぜだろう。すぐにアクションに走ってしまうキャラですね。一方で十九郎は……書けば書くほど不可解なキャラですね……。祥英生徒会はまた書きたいなあ。

『黄金時間が見えるまで』

これをトリに持ってこないと一冊分の空気が完結しない、と思って、締め切りはすでに空前絶後のレベルで超過していたにもかかわらず無理やり書いた話です（すみませんKさんっ！）。SF的な要素がまったくない話、というのはデビュー以来これがはじめてかな。書くうえでは何も違いはないんですけど。

そういえば一年前に雑誌コバルトで書いた『オレンジの瞳』という短編（死ぬほど短かった。マジでどうしようかと思った）の主役が、松永和美さんという女の子だったんですねー。あの短編より先に、実は今回の話を考えてあったんです。で、キャラクターを流用したんだな。池田さんの発展形が松永さんなわけです。けっこう違うキャラになりましたが、きっと本質は同じなんだと思います。もしかしたら鏡に映したような話を書いてしまったのかもしれない。

まあうだうだ言ってますけど、要はどの話も書いてて楽しかったんですね。それぞれの話が

微妙に関連しているので自分でも驚いた。

三百枚書き上げた現在はひたすらスッキリしてます。これでちょうど、一年間まるまるオーラバスターを書きつづけたことになります。『天使』が十二月発売だからね。早いですねえ。あっという間だね。しかもまだ全然、あの連中を書き足りていないあたりが我ながら怖い。これはハマったかな。（笑）

よく訊かれることに、メインキャラの中で誰が一番好きなのか、という質問がありますが、本当にこのシリーズに関しては全員というしかないです。そうだなあ、「好き」の種類はバラバラなんですけど。

前回のあとがきのせいで、一部に「若木さんは十九郎を憎んでいる」という説が流れているようですが、はっきり言ってそれは本当です。わははっ。憎しみもつきつめれば愛になるんです。愛の深さを言うなら、この人が一番ではないでしょうか。でも結婚はしたくないですね。

同様に「若木さんは忍を嫌っている」説がありますが、はっきり言ってそれは大嘘です！こんなに面白い人はなかなかいないです。書くのは難しいけど、だからこそ楽しい。でも結婚はしたくないですね。

ダンナにするなら亮介よ、亮介！　でも恋人にはしたくないですねー。

希沙良は一番かわいいです。とにかくそれに尽きます。一番純粋な「好き」に近いんじゃないかな。

諒ちゃんは、あれはもう、男と見ていない……。家族ですね。だから大好きですね。

冴子さんと亜衣ちゃんは、女の子として憧れるし、女の子として嫌なところもある。でもその嫌なところひっくるめてかわいい、かな。やっぱり。

みんなバラバラだし、うん、だからキャラクターに対して、自分の「分身」とか「子供」だとかいう感覚もあんまりないみたいです。だって、絶対、どこかに存在しているような気がする。どこか違う次元あたりに。若木には、その断片がちらりと見えるだけじゃないのかな。ちがうかな。

などと、オーラバスターの連中についてしみじみ語ったところで、今度は新しいシリーズの話をします。

前回のあとがきで予告したとおり、次は新しい話を書きます。発売は……いつになるかわからないなー（おいこら）。来年の春くらいには出るといいですねえ。

それでもって念を押します。新作は、コバルト文庫であるとは限りません。そ、それではどこで書くのだ!?　まあそのうちわかるでしょう。ふっふっ。（こんなこと言ってオーラバスターの新作が先に出たりしたら大笑いである）

一応、近未来SFアクションもどき、というものを書きます。若木の場合、この「もどき」が重要であります。もはやオーラバスターもすっかりジャンル不明だし。なに書くかわかりま

せんが、見かけたらよろしくです。

もちろんオーラバスターも書くから安心してくれたまえっ。今回ちょっと本筋を離れてしまいましたが、次回からは亮介くんたちも進級して……三将軍とか九那妃とか……でもって忍が……ああなってこうなって、という展開になる……かな、なんてな。

では恒例キャラクターよもやま話（いつからそうなったんだ）の続きをば。

前回で亮介のことまで書きましたが、主人公が決まったならヒロインを出さねばなるまい、ということで考えたのが神原亜衣さんです。たまたま読んでた小説にアイちゃんという女の子がいて、性格は全然ちがうんですがインパクトがあったんですね。で、どう考えてもこの屈折かげんは愛ちゃんではないな、では亜衣ちゃんにしよう、などと安易に決めてしまったのでありました。亮介との対比で考えたせいか、彼女も複雑な性格になってしまったなあ。神原というのは外見のイメージからきていると思います。

するとラストは希沙良なんですねー。意外ですねー。

今だから言うけど、希沙良って元々は「そのうち出るかもしれない十九郎の縁者」という設定のサブレギュラー（名前はなかった）であって、『天使』には出ないはずだったのです！

でも十九郎ひとりだと間がもたなくて（十九郎と亮介が一対一でお茶飲んでるところを想像してくれたまえ。……怖いでしょー）、で、それじゃ十九郎と牙を組ませて出そうかと思った

けど（想像してくれたまえ。……ものすごく怖いでしょー）なんか亮介くんがビビりそうだったのでやめて、その場でムリヤリ考えた名前が和泉希沙良。つまりなーんの意図もないのです。す、すまぬ。

一応外見のイメージとかを考えて、この五文字になったと思うのですが……でも十九郎の徒弟ならやっぱりヤヤコシイ名前だろう、くらいの安直な決め方だったような気もするなあ。

そんな彼がどうしてこんなに出世してしまったのか？　それは簡単です。ひいきです。ただ彼をたくさん書きたかったんです。

思えばラッキーなキャラだよね。気がついたらいきなり二冊目で表紙に出てるんだもんねー。（しかもこの表紙はコバルト人気キャラクターテレホンカード全員プレゼントで、テレカになったのよ！　何事!?）

そういえばジェニーちゃん（注：お人形）のお友達にキサラちゃんがいるって本当ですか？誰か教えてくださいっ。

で、このごろはもっぱら希沙良くんのよーな行きあたりばったりのネーミングに走っている若木であります。かえってこっちのほうが面白い結果になるみたい。

さていよいよ、枚数がなくなってきたぞ。

とにかく、デビュー一年間、何もわからないままでやってきたけど、本当に私は幸せな奴だ

と信じております。幸運だし幸福だ。まだスタート地点に立ったばかりで、これからも艱難辛苦が雨あられと降ったりするのではないかと思いますが、「読んでやるから早く書け、ほれほれ」と言ってくださる人たちがいるかぎり、私は大丈夫です。うん、きっと大丈夫だ。未来は明るい。

いつもいろいろありがとうです。

(Kさまにはつくづく。ほんとに。なんというか。だからその……嬉しいです)

勝負はこれからさっ。

では、また。近いうちに。

若木未生

追記その1　『セイレーン』のあとがきに書いた「七瀬シリーズ」についてのお問い合わせが多いので、お答えします。『家族八景』『七瀬ふたたび』『エディプスの恋人』以上の三部作のことです。新潮文庫に入ってます。著者はもちろん、あの！　筒井康隆先生です。

追記その2　男性読者のみなさんっ、それからいわゆる「大人」の方々、どんどんお手紙ください！　お手紙を読むと「コバルト読んでるなんて変だと思いますか」という内容が多いです。そんなことはないっ。若木の作品には年齢制限も性差別もないです！　要は読む人の心の

問題だ。読んでみて面白くなければ、それはそれまで。面白ければ、年も立場も関係ない。好きなものは好き。それでいいと思います。男がオーラバスター読んで、何が悪いんだよっ！わんわんっ。（意味不明）

追記その3　えーと、近ごろ「オーラバスターの同人誌を作りたい」「ファンクラブを発足したい」というお手紙をちらほらいただくようになりました。嬉しいです。どんどんやってほしい。この作品をきっかけにして、コミュニケーションの輪がひろがれば最高だと思います。本を作ったら、若木にも一冊恵んでやってくださいまし。ふふふふふ、図々しいだろうっ。（ただし、これはお願いなんですけど、節度を忘れたような内容の本はバスです。少なくとも作者本人に見せるべきではないです。大切なキャラクターたちですから、大切に育ててあげてください）

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101―50　東京都千代田区一ツ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

若木未生先生

わかぎ・みお
1968年12月2日、埼玉県生まれ。射手座、A型。現在、早稲田大学文学部在学中。1989年4月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。週刊少年ジャンプをこよなく愛する。苦手なものは料理。コバルト文庫『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』がある。



迷える羊に愛の手を

COBALT-SERIES

1990年11月10日　第1刷発行
1993年3月20日　第11刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社
〒101-50
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
電話　東京（3230）6268（編集）
（3230）6393（販売）
（3230）6080（制作）

印刷所　株式会社美松堂印刷所
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1990
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611474-7 C0193

コバルト文庫
〈好評発売中〉



天使はうまく踊れない

謎の転校生・諒、美少女の冴子…亮介の周囲に、妙な仲間が出現し始めた。

セイレーンの聖母

十九郎が狙われた!?とてつもない妖力(パワー)をもつ女たちに、希沙良(きさら)や亮介は…。

十字架の少女

諒の妹・彩と一緒に、合宿を始めた亮介たち。しかし彼女には悲しい過去が。

青春を考えるヴィヴィッドな文庫

空者と妖者の
闘いがくり広げる
学園アクション
ファンタジー!

若木未生の本

「ハイスクール・オーラバスター」
シリーズ



コバルト・ノベル大賞
募集中!

〈入選作〉正賞の盾と副賞100万円

〈佳作〉正賞の盾と副賞50万円

〈選考委員〉岩館真理子／菊地秀行
高橋源一郎／氷室冴子 (50音順・敬称略)

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。

この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後(400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下)を、お待ちしております。

応募要項は隔月刊「COBALT」に毎号掲載されています。

恋を夢みる乙女のための小説誌!

[コバルト]
Cobalt

1月、3月、5月、
7月、9月、11月の
18日発売!

隔月刊ですので、お求めになりにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート・ショート」を毎号募集しています。